ディドロの『セネカ論』（上）

——初版と第2版とに表現された著者の意識の構造にかんする考察——

中　川　久　定

序　論
1．目的と方法
2．研究史的回顧
本　論
第一部　テクストの批判
第Ⅰ章　原稿断片と諸版本
付論　翻　訳
第Ⅱ章　『セネカ論』初版—第2版比較テクストの編纂
第二部　『セネカ論』初版の意識の構造
第Ⅰ章　初版の成立
第Ⅱ章　セネカのための弁明
1．告発された事実の否認(一)——事実の吟味
2．告発された事実の否認(二)——告発者の人格の信憑性の吟味
3．人間性のための弁明(一)——人間的弱点の容認
4．人間性のための弁明(二)——裁かれる人間への自己投入
第Ⅲ章　セネカとの対話
1．道　徳
2．政　治
3．過去の批判を媒介とした現在の批判と未来への期待
第Ⅳ章　ディドロの方法とモンテーニュの伝統
第三部　『セネカ論』第2版の意識の構造（以下続稿）
第四部　ディドロの生涯における，ソクラテス，セネカ，後世の意味
結　論

引用した主要著作略号表

（『セネカ論』諸版本の略号は，本論第一部で示す）

AT：　D. DIDEROT, *Œuvres complètes*, revues et édités par J. Assézat et M. Tourneux, Paris, Garnier Frères, 1875—1877, 20 vol.

CORR: D. DIDEROT, *Correspondance*, édition établie, annotée et préfacée par G. Roth (jusqu'au t. XII) et J. Varloot (à partir du t. XIII), Paris, Les Editions de Minuit, 1955—1970, 16 vol.

CORR LIT: GRIMM, DIDEROT, RAYNAL, *Correspondance littéraire, philosophique et critique*, éditée par M. Tourneux, Paris, Garnier, 1877—1882, 16 vol.

DC: M. TOURNEUX, *Diderot et Catherine II*, Paris, Calmann Lévy, 1899.

EP: D. DIDEROT, *Eléments de physiologie*, édition critique, avec une introduction et des notes, par J. Mayer, Paris, Marcel Didier, 1964.

MC: D. DIDEROT, *Mémoires pour Catherine II*, textes établis et annotés par P. Vernière, Paris, Classiques Garnier, 1966.

N: D. DIDEROT, *Œuvres*, publiées sur les manuscrits de l'auteur, par J.-A. Naigeon, Paris, Desray, 1798, 15 vol.

OE: D. DIDEROT, *Œuvres esthétiques*, textes établis et annotés par P. Vernière, Paris, Classiques Garnier, 1964.

OP: D. DIDEROT, *Œuvres politiques*, textes établis et annotés par P. Vernière, Paris, Classiques Garnier, 1963.

OPH: D. DIDEROT, *Œuvres philosophiques*, textes établis et annotés par P. Vernière, Classiques Garnier, 1956.

OR: D. DIDEROT: *Œuvres romanesques*, texte établi, avec présentation et notes par H. Benac, Classiques Garnier, 1959.

PC: D. DIDEROT et E.-M. FALCONET, *Le pour et le contre*, édition critique avec une introduction et des notes par Y. Benot, Paris, Les Editeurs Français Réunis, 1958.

TP: D. DIDEROT, *Textes politiques*, établis et annotés par Y. Benot, Paris, Editions Sociales, 1960.

序　論

1. 目的と方法

目的　この論文の目的は，ディドロの晩年の大作『哲学者セネカの生涯と著作，およびクラウディウスとネロの治世論』（1778年）と，それを改訂増補した第2版『クラウディウスとネロの治世，およびセネカの生き方と著作論——この哲学者の読書案内』（1782年）とに，それぞれ表現された，著者の意識の

構造——考え方，感じ方，信念のあり方の構造——を確定することである[1]（以下この両版本を『セネカ論』と総称する）。ディドロは，『セネカ論』第2版を刊行したあと，まったく作品を発表せず，2年後の1784年夏に70歳で死亡するのであるから，『セネカ論』こそは彼の文学的総決算，文学的遺書とも称すべき作品であって，そこには著者の晩年ほぼ4年間の意識の移り変りが明らかに表現されている。

ディドロの初期と中期の意識発展にかんしては，すでに幾つかの基本的——あるいは古典的と称することも可能な——研究がある。すなわち，初期の知的発展史としては，フランコ・ヴェントゥリの実証的・包括的な『ディドロの青年時代（1713—1753年）』（1939年）にはじまり，ジャン・ポミエ『ヴァンセンヌ入獄以前のディドロ』（1939年）をへて，アーサー・M・ウィルスン『ディドロ——模索の時代（1713—1759年）』（1957年）にいたる系列，また中期の百科全書編集者としての活動の綜合的研究としては，ヴェントゥリの仕事を継続する意図のもとに執筆された，ジャック・プルースト『ディドロと百科全書』（1962年）などである[2]。

これに反して，ディドロの晩年の意識の発展をとらえようとする研究は，近年ようやく開始されたばかりであるといってもよいほどの立遅れを示している[3]。

問題をディドロ晩年の最終的局面，『セネカ論』だけに限定しても，この作

1) 私は本稿以前に，本稿の「序論」と「第1部」の原形に相当する小論を「ディドロ『セネカ伝』の2つのテクスト（その1）」；「同（その2）」（名古屋大学教養部「紀要」第9輯，1965年；第10輯，1966年）として発表している。本稿は，旧稿の（その1）を完全に，（その2）を一部改訂したうえ，本論第一部中に再録した。
なお私が『セネカ論』に表現されたディドロの「意識の構造」という時，それはディドロの「思想」，「感情」，「信念」の表層的なあらわれと，それらの深層にあって，それらを成立させている心理的な世界の把握の仕方との全体的構造を指している。ここで，私が「心理的な世界の把握の仕方」というのは，精神分析学の用語でいう «relation d'objet» (Objektbeziehung, object-relationship) ——「主体と世界との関係の仕方」（J. LAPLANCHE et J. B. PONTALIS, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris, Presses Universitaires de la France, 1971, p. 404. に近似している。

2) Franco VENTURI, *Jeunesse de Diderot (1713—1753)*, traduction française par Bertrand, Paris, Albert Skira, 1939.
Jean POMMIER, *Diderot avant Vincennes*, Paris, Boivin, 1939.
Arthur M. WILSON, *Diderot—The Testing Years, 1713—1759*, New York, Oxford University Press, 1957.
Jacques PROUST, *Diderot et l'Encyclopédie*, Paris, Armand Colin, 1962.

3) ディドロの晩年を扱った研究として，最近次のものが刊行された。——Yves BENOT, *Diderot, de l'athéisme à l'anticolonialisme*, Paris, François Maspero, 1970. ただし，著者の課題は，レナル神父『両インド史』にたいするディドロの協力関係の究明であって，『セネカ論』の問題は，直接には扱われていない。

品を主題とした特殊研究は，1950年代にひとつ，1960年代に2つ（このうちのひとつは口頭の研究発表の記録）——総計3篇——が発表されているのみである。（このほか1971年から1972年にかけて，『セネカ論』初版と第2版の版本が総計3種類——うち1種は未刊——刊行され，これにともなって4篇の解説が印刷されている。）しかも，この3篇の研究（および4篇の解説）とも『セネカ論』が提出する中心的問題を，包括的に解明しているとはいいがたい（後述）。

この事実は，ディドロ関係の論文が毎年数十篇も発表され，ディドロ研究の専門雑誌すら刊行されている（昨1971年度は平均400ページの『ディドロ研究』[1]誌が2冊刊行されている）という状況のなかでは，確かに異常な現象であるといわざるをえない。

では，なぜ『セネカ論』はこれほど無視され続けてきたのだろうか。

まず『セネカ論』初版，第2版は，普通にディドロの代表作と考えられている諸作品——『ラモーの甥』，『運命論者ジャック』，『ダランベールの夢』3部作など——とは，明らかに性格を異にする。『セネカ論』には，これらの諸作品のなかにあらわれているあの驚くべき力——たとえば，ゲーテが『ラモーの甥』を評して，この作品は「フランス文学のまっただなかに爆弾のように炸裂する」[2]と語ったような，あの驚くべき力——，あるいは『ダランベールの夢』3部作のような宇宙の始源から永遠の未来をかけめぐるあの途方もない構想力が確かに欠けている。多くの読者は，この種の作品の魅力を『セネカ論』にも期待して，ただいたずらに失望するのである。

さらに，『セネカ論』初版（1778年）は4年後に改訂増補され，この第2版（1782年）が決定版となったのであるが，初版のある程度まとまった構成に反して，この第2版の構成には一種の混乱が認められる。（第2版出版後，今日にいたるまでのすべてのディドロ著作集・全集には——昨1971年発刊のレヴァンテール編『ディドロ全集』を唯一の例外として——初版は収録されていない。したがって，初版の影響は，1778年から1782年までの4年間にほとんど局限されている。）

『セネカ論』第2版には「筋も，脈絡も，方法もない。曖昧さと気取りがあるばかり」[3]と酷評したディドロの敵ラ・アルプの評言をかりに無視するとし

1) ***Diderot Studies***, edited by Oits Fellows and Diana Guiragossian, Genève, Droz.
2) ゲーテからシラーにあてた1804年12月21日付の手紙。AT, t. V, p. 373.

ても，ディドロの友人グリムすら，初版から第2版への改訂の結果「本の内容が豊かになったにしても，形態のほうは，より支離滅裂になっている」と語っている[1]。グリムは，この「欠点」にもかかわらず，第2版が依然として，「独創的で」「興味深い」作品であることを認めるのであるが，この「支離滅裂」の印象が，『セネカ論』から読者を遠ざけてきたという事実は否定しがたいであろう。

しかし今や，多年の忘却の淵から『セネカ論』の初版と第2版とを救いだすべき時がきている。

まずこの2作には，ひとりの作家の晩年のほぼ4年間にわたる意識の変容が全面的に表現されている。たとえその形がどのようなものであれ，ひとりの文学者が最後の作品に表現した意識の最終的局面は，他のあらゆる時期の意識の局面と同様に，無視することは許されない。晩年の意識の認識なくして，彼の全体像の把握は不可能だからである。

だが，ディドロにかんしては，問題はそれだけにとどまらない。もしわれわれが『セネカ論』の初版と第2版とを読みくらべるならば，最初は文学者・哲学者・教師・大臣としてのセネカの生涯と著作について語っていたはずのディドロが，いつしか，自分自身の生涯と仕事について語りはじめているという事実に気づくはずである。そしてわれわれは，第2版で改訂増補された部分の重要な主題は，セネカにかんする論議というよりは，むしろディドロ自身による『ディドロ論』——ルソーの『告白』と似た意味でのディドロの『告白』——そのものであることを認識するにいたるだろう。

さらに重要なことは，ディドロはこの第2版の『告白』の部分において，彼の魂の一番底にひそんでいた確信——彼の生涯のすべての行為を支えていた一番深い確信——を最終的に確認したことである。

私の論文は，『セネカ論』初版と第2版とに表現されたディドロの意識の構造を確定し，かつ一読しただけでは必ずしも明瞭ではない彼の意識の深層に光をあてることを目的としている。そしてまた，それによって『セネカ論』初版・第2版がディドロの全作品中で占めている重要な位置——ひいてはフランス文学の伝統のなかで占めている重要な位置——がおのずから明らかになるであ

3) Citation faite par F. Schalk, dans ***Diderots Essai über Claudius und Nero***, Köln und Opladen, Westdeutscher Verlag, 1954, p. 7.

1) CORR LIT, t. XIII, p. 104.

ろう。

方法　『セネカ論』初版と第2版とに表現されたディドロの意識の構造の検討は，初版と第2版との相違点の調査を必要とする。そのためにはまず，両版本間のすべての異同を検出した両版本比較テクストの編纂という基礎作業から開始されねばならない。

両テクストの照合の必要性は，すでに古くから力説されていた。イーヴ・ブノは，1960年に，「散逸した原稿の発見を待つ必要がないにもかかわらず，『セネカ論』の1778年のテクストと1782年のテクストとの照合がいまだになされていない」という「驚くべき事実」を指摘し，両テクストの照合は「ディドロの文体技法の研究のためだけにでも，非常に有益であろう」とのべ[1]，ジャン・ファーブルは1960年夏の国際フランス学会で，「両版本の照合こそ〔すべての『セネカ論』研究の〕基本であり，前提であると思う」と語っている[2]。

私は，1958年にファーブル教授から両テクストの照合作業を行なうことを示唆され，上記の必要性に答えるために，両版本の比較テストを編纂刊行した（1966—1968年）。この論文では，両版本の内容の比較に先立って，まずこの比較テクスト編纂の諸問題を検討しておく。

続いて私は，両版本における著者の意識の構造の比較を考察する。これには，次の3方法が可能性として考えられた。

(1)　両版本比較テクストを基礎として，両テクスト間の形態的異同を逐条的に吟味し，そこから両者の意識の構造の相違を導きだす方法。

もしこの方法を採用することになれば，膨大な作業が必要となる。たとえば，アセザートゥルヌゥ『ディドロ全集』版（22.5×14.5cm）で約400ページにおよぶ『セネカ論』第2版の前書き（5ページ）部分だけにかんしても，初版との間に約90箇の異同が存在するからである。

しかし，私の研究のためには，この方法は採用しがたい。第1，この論文の目的は，両テクスト間の文体論的差異の究明にあるのではなくて，意味の相違の検討であるのだから，語，句，節を単位とする形態的・逐条的比較は，非実際的であり，不必要である。第2，両版本間の意識の相違の検出は，まず両者間の同一部分——すなわち『セネカ論』第2版においても，初版のテクストが

1) Y. BENOT, «Diderot et la politique», TP, p. 45, note 2.
2) «Résumé des discussions», *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, N° 13, Paris, juin 1961, p. 396.

そのまま維持されている部分——の意識の構造の把握から開始されなければならない。だが，両版本の相違部分だけの比較からは，両者の同一部分は検出されえない。

(2) 初版テクストと第2版テクストとの異同箇所を，意味の相違という観点から吟味する方法。

具体的手続きとしては，両テクスト間の異同部分を，幾つかの意味のカテゴリー——たとえば政治観，道徳観，哲学観など——に分類した上で，各カテゴリー内でのディロドの意識の違いを明らかにし，そこから，両版本間全体の意識の構造の差違を導きだす。（後述するボンヴィル『ディドロの「セネカの生涯』は，(1)に近い方法——両版本間の形態的相違〔第2版への長文の付加〕の検討——と，この(2)の方法とを並用・混在させている。）

しかし，この方法も，(1)で批判した第2の欠点をもっているので，私の論文では採用しがたい。

(3) まず最初に，『セネカ論』初版をとりあげ，その意識構造を検討する（検討にあたっては，初版の内容を幾つかの重点的な主題に分ける）。ついで，第2版において，初版に加えられた改訂部分を分析し，同時にこの改訂部分が初版の意識構造にどういう変容をもたらしたかを吟味する方法。

上記3方法の諸条件を考慮すると，(3)が私の研究にもっとも適合していることは明らかであろう。したがって，私は(3)の方法に基づいてこの研究をすすめたいと思う。

『セネカ論』の初版と第2版とをこの方法で比較すれば，1778年から1782年にかけてのディドロの意識の最終的局面が明らかにされるはずである。そして1782年におけるディドロの意識の構造の中心が，「ソクラテス」，「セネカ」，「ディドロ」，「後世」の同一性——連続性——の確信であることが明らかにされるであろう。

しかし，この確信は，1782年になって突如として生まれたものではなく，すでに以前から，彼の心のうちに芽生えていたものであった。それゆえ，私はこの論文の最後で，「ソクラテス」，「セネカ」，「後世」という観念が，ディドロの生涯において，どのようにして形成され，どのような意味をもち続けていたかを解明しておきたいと思う。

したがって，この論文は次の順序をとる。——第一部「テクストの批判」，

第二部「『セネカ論』初版の意識の構造」，第三部「『セネカ論』第2版における意識の構造」，第四部「ディドロの生涯における，ソクラテス，セネカ，後世の意味」。

2. 研究史的回顧

『セネカ論』にかんする特殊研究　先に触れたように，『セネカ論』にかんする独立の研究としては，次の3篇が存在するのみである。以下にこれらの研究を批判的に紹介しておきたい。

(1) Fritz SCHALK, *Diderot's Essai über Claudius und Nero*, Köln, Westdeutscher Verlag, 1956.

(2) J. Robert LOY, «L'Essai sur les règnes de Claude et de Néron», suivi du «Résumé des discussions», *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, N° 13, 1961, pp. 239—254; pp. 386—399.

(3) Douglas A. BONNEVILLE, *Diderot's* Vie de Sénèque, Gainsvile, University of Florida Press, 1966.

(1) シャルク『ディドロのクラウディウスとネロ論』——この論文は，『セネカ論』初版，第2版の成立の由来，反響（友人，敵方，ドイツの読者それぞれの反響），18世紀フランス知識人の古代作家への関心，ディドロにたいするタキトウスの影響，作品の特徴，構成，文体，ディドロにおける，セネカの作品「注解」の意味などを扱っている。（なお，初版，第2版の成立の由来を除けば，すべて第2版について論じている。）

『セネカ論』がドイツ人に与えた影響——ヘルダー，フンボルトへの影響——が比較的詳細に論じられているのが特徴的であって，この部分は，ロラン・モルティエの研究『ドイツにおけるディドロ（1750—1850年）』（1954年）の一項「ディドロ対ジャン=ジャック論争——『セネカの生涯論』」[1] を補足する情報を与えている。

シャルクの主張は，ほとんどすべてその後の研究によって常識化してしまっているとはいえ，彼がこの研究で次の2点を指摘していたことは記憶されるべきだと思う。第1，ディドロが，「18世紀フランスの現実は，常にローマの現

1) «La querelle Diderot—Jean-Jacques : l'Essai sur la vie de Sénèque», Roland Mortier, *Diderot en Allemagne (1750—1850)*, Paris, Presses Universitaires de France, 1954, pp. 197—209.

実と比較可能であり，両者は同一次元の問題に属する」という「仮説」を立て，この「仮説」の上に，タキトゥスのローマ批判を媒介にした，ディドロのフランスの現実にたいする批判が成立したという指摘[1]。第2，ディドロにおける，セネカの著作の「注解」は，「人文主義の文献学的・美学的批評とも，ヴォルテールの『コルネーユ注解』とも，チェザーリの『ダンテの美』ともまったく異なる」独自の性格——すべての問題において自分自身（自分の感情・思考）を尺度にするという性格——をもち，まさにそのゆえに，ディドロはセネカの「注解」を通して，自分の内面の発想の動機を自覚するにいたったという指摘[2]。

私は，ボンヴィルとともに，「フリッツ・シャルクのすばらしい研究が，この作品〔『セネカ論』〕を，作品固有の価値に基づいて研究しようとした，18世紀以来最初の試みである」ことを認め[3]，その先駆的業績に敬意を表するものであるが，次の表現には疑問を感じる[4]。

> Die erste Fassung aus dem Jahre 1778, die nur den Essai über Seneca enthielt, [...] die in der Ausgabe von 1782 den ersten Teil des Buches bildet.

この文言から判断すると，シャルクは，『セネカ論』初版が，「セネカ論」だけから構成されていたのに，第2版ではこの初版の全体（「セネカ論」）が第一部に充当され，そのあとに新たに第二部（「セネカの著作論」）が書き加えられたと考えているようにみえる。

シャルクの誤解はどこから生じたのだろうか。両版本を実際に比較せずに，表題だけから内部の構成を推測したのだろうか。なるほど『セネカ論』第2版が，«*Essai sur les regnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Séneque*» という表題をもっているのに反して，初版は，«*Essai sur la vie de Séneque le philosophe*»（ただし，正式にはこのあとに，«*sur ses écrits, et sur les regnes de Claude et de Néron*» がつくが，この後半部は通常省略されている）と題されており，この表題からは，シャルクのよう

1) F. SCHALK, p. 19.
2) *Ibid.*, p. 23.
3) Douglas A. BONNEVILLE, ***Diderot's*** Vie de Sénèque, Gainsville, University of Florida, 1966, p. 1.
4) F. SCHALK, p. 5.

な推測も可能である。

だが，本論第三部で詳しく説明するように，『セネカ論』第2版第一部は，初版の前半が，第2版第二部は，初版の後半が，それぞれ改訂増補されて成立しているのであり，シャルクの説明は誤解である。

(2) ロイ「『クラウディウスとネロの治世論』」(1960年7月20日，国際フランス学会第12回大会で行なわれた研究発表，およびそれをめぐる討論——ロイの関心は，なぜディドロが，晩年の一時期，すべてを投げうってまで『セネカ論』の執筆に専念したか，という問題に集中される。

友人ドルバックやネジョンのすすめ，ラ・グランジュへの友情（『セネカ論』初版は，ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』の解説である)，および「ローマ史の背徳的であると同時に，情熱をかきたてる時代」[1] にたいするはげしい興味だけでは，ディドロの『セネカ論』への執着は説明できない。（ロイ論文中で，『セネカ論』初版と第2版とを比較している箇所がひとつだけあるが[2]，その他の立論はすべて第2版を対象としている。)

この問にたいして，ロイは「『セネカ論』はディドロが何度も語ってきた道徳論と考えられるだろう」(«l'Essai pourrait être considéré comme ce traité de morale dont Diderot a tant parlé»)[3] という結論を与え，だからこそディドロは晩年の最後の時間をこの大作に集中したのだという。この「道徳論」というのは，いうまでもなくディドロが生涯の最後の仕事として，執筆したいと意図していた体系的な道徳論を指す（スイスの牧師ジャコブ・ヴェルヌあての手紙〔1759年1月9日〕[4]，『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』[5] 参照)。

この結論にたいして，ハーバート・ディークマンは，研究発表後の討論において，はげしい反駁を加え，こうのべている。「私は，ディドロ自身，『クラウディウスとネロの治世論』を，決して道徳論とは考えていなかった，と確信しています。これは，体系的な論文ではないからです。ディドロにとって，道徳論を問題にする時は，いつでも体系的構成が問題になっているのです。〔……〕こ

1) *Cahiers*, p. 241.
2) *Ibid.*, p. 240. ロイは，第2版からの引用として «je lis, je converse, j'interroge (et) je réponds» ということばをあげているが，これは正確には «je lis ou je converse ; j'interroge ou je réponds» である。
3) *Ibid.*, p. 242.
4) CORR, t. II, p. 107.
5) AT, t. II, p. 345.

の論文は，いつも彼の関心をしめていましたが，彼はそれを執筆できなかったのです。」[1]（傍点〔原文イタリック〕はディークマン。）

これにたいして，ロイはこう答える。「『クラウディウスとネロの治世論』が，道徳論ではないという点ではあなたに完全に賛成します。ある意味で，ディドロはこの道徳論を断念しました。セネカとの脈絡のない会話が，この論文の代りをしているのです（«Les conversations décousues avec Sénèque en tiennent lieu»）[2]。

このディークマンの批判には，ある誤解がみられる。というのは，ロイは，研究発表のなかで『セネカ論』が，問題の道徳論「である」（«est»）とは断定しておらず，道徳「であると考えられるだろう」（«pourrait être considéré comme»）と慎重な表現をとっているからである（この表現によってロイは，『セネカ論』が，本来書かれるべき体系的道徳論の代用であった，ということを示唆している）。ロイの真意は次のようなものであったと思われる。――ディドロは，生涯の最後の時期に道徳論――「人間生活のすべての局面――身体的・心理的・知的・政治的・美的・〔……〕社会的――を包含する，この複雑で困難な科学」[3]（ロイ）――を建設することが不可能であると自覚する。彼はついに，この生涯の計画を断念して，「セネカとの脈絡のない会話」のなかに，今までに深めたすべての道徳的省察を投入する。こうして，挫折した道徳論の「代りに」（«tenir lieu»），すなわちその代用として成立した作品が『セネカ論』にほかならない，と。

ロイは，彼の結論を必ずしも明示的に提出しなかったために，ディークマンの誤解と反駁とをまねいたのであるが，彼の真意は承服できるものと私は考えている。その理由は本論第四部で示されるはずである。

では，ディドロは，『セネカ論』においてどのような道徳論的立場に立つのだろうか。ロイの主張によれば，ディドロは，一切の道徳を超越する「天才」（「生物学的」特殊存在）の立場も，同情と本能――すなわち「ルソー的自然人の良心」――に依拠する「人民」の立場もとらず，意志と知性と感情によって，具体的状況のなかで有徳なものを探求し，「実例と経験を通して徳を学ぶ」「理性的人間」，あるいは「善行のひと」（「知性的」存在）の立場を選択した，と

1) *Cahiers*, p. 397.
2) *Ibid.*
3) *Ibid.*, p. 254.

いう[1]。

『セネカ論』において，「天才」，「人民」，「理性的人間」（または「善行のひと」）の3つの立場の検討が行なわれているというロイの主張は容認しうると思うが，ディドロが「理性的人間」の立場に立って，他の2つの立場を切捨てたと単純化することには賛成できない。なぜなら，私が以下の本論で示すように，㈠ディドロはある箇所では，明らかに「人民」の立場に立っているからであり，㈡また「良心」の問題にかんしても，それは，必らずしも「人民」に固有なものではなく，むしろ「理性的人間」においてこそ，この「良心」の意味が強調されているからである。（ディドロは，そのはげしいルソー攻撃にもかかわらず，彼の非常に近くにいることは，本論第二部が示す通りである。）

(3) ボンヴィル『ディドロの「セネカの生涯」——改訂された白鳥の歌』——この本は，『セネカ論』の初版と第2版との内容の相違を検討した最初の研究であって，その結論に賛成する，しないにかかわらず，著者の立論は注目に値する。

彼は『セネカ論』の初版と第2版について説明した（第1章）あと，両版本における表題の変化を考察し（第2章），ついで，一番長い一章（第3章）の全部をあてて，第2版への長い挿入文6箇（最長挿入文は第2版で93ページ，最短挿入文は第2版で28ページ）が，初版にたいしてどのような意味の変化を与えたかを分析する[2]。

論文後半（第4章から最終第10章まで）では，第1版への短い挿入文（それぞれの長さは「1～2文から数節におよぶ」）を，「社会・政治的，道徳的，哲

1) *Ibid.*, pp. 252—253.

2) ボンヴィルは，第2版への全挿入文のうちから，もっとも長いもの6箇を選んでいる。それらを長さの順によって示すと，次の通りである（版本名略号は，第一部，第Ⅰ章参照）。

㈠ CN, t. II, pp. 283—321 ; HN, t. II, pp. 186—210 ——『セネカ論』初版がうけた批判にたいするディドロの自己弁護（BONNEVILLE, pp. 10—12）

㈡ CN, t. II, pp. 40—64 ; HN, t. II, pp. 29—45 ——ディドロの文学者セネカ弁護（BONNEVIILLE, pp. 16—17）

㈢ CN, t. I, pp. 251—274 ; HN, t. I, pp. 164—179 ——ディドロのセネカ弁護（BONNEVILLE, pp. 13—16）

㈣ CN, t. I, pp. 88—109 ; HN, t. I, pp. 57—74 ——仮空のセネカ非難者とディドロとの問答（BONNEVILLE, pp. 12—13）

㈤ CN, t. I, pp. 126—140 ; HN, t. I, pp. 84—93 ——ディドロのルソー批判（BONNEVILLE, pp. 8—10）

㈥ CN, t. II, pp. 253—267 ; HN, t. II, pp. 166—174 ——ディドロのセネカ『自然の問題』をめぐる考察（BONNEVILLE, pp. 17—19）

このほかにも，なお十数篇の重要な挿入文が存在するが（第三部参照）まずもっとも長い挿入文の意味だけを検討するというボンヴィルの立場に立てば，彼の選択は妥当である。

学的，文体的，および個人的」[1] な意味のカテゴリーに分けて（ただし「個人的」カテゴリーはさらに細かく分けて），それらが第2版に与えた意味の変容を検討する。

ボンヴィルが以上の吟味からひきだした結論は，「第2版において，構造上も内容上も基本的な変化は存在しない」[2] ということであった。

私は，ボンヴィルの主張に反して，『セネカ論』全体は，初版から第2版にかけて，大きな意味の変化―― ディドロの意識の構造の変化（意識の中心の変化）が――あったと考えているが，この点でのボンヴィル批判は，以下の論文全体によって示されるはずである。

なお，ボンヴィルの研究には，方法の点で2つの疑問を感じる。第1，彼は最初の部分（主に第3章）では，両版本の相違を形態の次元――第2版で付加された「長い」「挿入文」という第2版の形態的変化の次元――でとらえ，各挿入文が初版に与えた意味の変化を，ばらばらに分析している。これに反して，後半（第4章から最後まで）では，最初から意味の次元に立って，残余の付加文を分類した上で，それらが初版に及ぼした意味の変容を検討している。そのため，長い挿入文の «ad hoc» な分析と，後半の短い挿入文の体系的な分析とがはっきり結びつかず，第2版での意味の変化・無変化の実体が一貫したイメージを与えにくくなっている。

第2，先に「方法」の項で簡単に触れたが，ボンヴィルは両版本間で同一の部分――すなわち第2版でもそのまま維持された初版のテクスト――の意味の構造を最初に検出するという手続きをとっていない。彼は第2版への挿入文を初版の関連部分と比較するだけで立論を展開している。そのために，第2版への挿入文と直接的関連をもたない，初版中の多くの論点が，ボンヴィルの視野から脱落し，その結果，第2版固有の変化にかんしても，幾つかの見落しが生じることになったと考えられる。

ただ，これらの不満にもかかわらず，ボンヴィルの研究は，今後の『セネカ論』研究の重要な基本的文献としての価値を失っていない。

『セネカ論』の初版と第2版にかんする解説　以上の3研究のほかに，最近刊行されたレヴァンテール編集の『セネカ論』初版と第2版のはじめに，編者

1) BONNEVILLE, p. 20.
2) *Ibid.*, p. 6.

レヴァンテールの作品解説が収録されている。

(1) Roger LEWINTER, «Introduction» à l'*Essai sur la vie de Sénèque le philosophe, sur ses écrits, et sur les règnes de Claude et de Néron. Œuvres complètes de Diderot*, p. p. Roger Lewinter, Paris, Le Club Français du Livre, 1971, t. XIII, pp. 502—507.

(2) Roger LEWINTER, «Introduction» à l'*Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque*, p. p. Roger Lewinter, Paris, Bibliothèque 10/18, 1972, t. I, pp. 9—31.

このほか，レヴァンテール編『ディドロ全集』第12巻（『セネカ論』初版収録）の序，すなわちジャン・グルニエ「ディドロ」，および，近く刊行される予定の同上全集第13巻（『セネカ論』第2版収録予定）の序，すなわちジャン・スタロバンスキー「ディドロと他人のことば」（独立の論文として雑誌『批評』1972年1月号に発表）の2篇が，『セネカ論』の初版と第2版にそれぞれ言及している。

(3) Jean GRENIER, «Diderot», préface du t. XII des *Œuvres complètes de Diderot*, p. p. Roger Lewinter, le Clud Français du Livre, 1971.

(4) Jean STAROBINSKI, «Diderot et la parole des autres», dans la *Critique*, N° 296, janvier 1972, Essai déstiné à préfacer le t. XIII des *Œuvres complètes de Diderot*, p. p. Roger Lewinter, Le Club Français du Livre.

レヴァンテールは，1969年から刊行されはじめた，新『ディドロ全集』の編集者である。レヴァンテール編全集は，ディークマン，ファーブル，プルーストを監修者とする「〔フランスの〕国家的版本となるはずの校訂・全集版（レヴァンテール版は，これとよく混同されている）」[1]（ロラン・デスネ）がやがて刊行されるまでの間に，暫定的価値をもつ全集版であるが，これにたいするディドロ研究者たちの評価は，むしろ否定的であるといえる。たとえば，ロラン・デスネは，レヴァンテールが，この全集のなかで，もっとも厳密な校訂をへた幾つかの重要なテクストを再録した功績は認めつつも，なおかつ次のよう

1) Rolan DESNÉ のレヴァンテール編『ディドロ全集』の書評。*Dix-huitième siècle*, N° 3, 1971, p. 380.

にのべている。「今日では時代遅れになり，かつ入手しがたくなったアセザとトゥルヌゥ編全集版(全20巻，1875—1877年)よりも，さらに完全で確実な版本をついに手に入れることができたという読者の感激は，批評家の失望によって帳消しにされている。批評家は，——ああ，なんと残念なことだ——(「書簡」の部分を除いて）信頼できる注をただのひとつも見出すことができず，したがって，〔レヴァンテールの〕テクストの確定にかんしてなにか不信の念を抱くかもしれないのである。」[1] 新版『ディドロ全集』の編者レヴァンテールにたいするデスネの，むしろ否定的ともいうべきこの批判にもかかわらず，『セネカ論』初版と第2版の解説者レヴァンテールは，この2作品にかんするきわめて興味ある解釈を提出している。レヴァンテールの解釈にたいして，賛否いずれの立場をとるにせよ，これを無視することはできないと思うので，以下にこれを批判的に紹介しておきたい。

(1) レヴァンテールの『セネカ論』初版の解説——彼は，この作品の意味を，ディドロの政治観の発展・転換と，セネカ観の発展・転換という2つの軸の交差のなかに位置づけて解釈し，次のように主張する。

ディドロの政治観の発展・転換——ディドロは，ロシア旅行の帰途，オランダのハーグに滞在して，『諸君主の政治原理』(1774年)，『ナカズ（立法議員あての女帝陛下の訓令）にかんする意見』(同年)，『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』（同年）を執筆し，ここではじめて，すべての啓蒙専制主義が本質的に悪であるということを立証する。なぜなら，啓蒙専制君主は，たとえ彼がどれほど「よい」人物であったとしても，結局は上からの統治によって人民の自発性を奪いとってしまうからである。ディドロは，この理論の当然の帰結として，「唯一の正しい政府の形態」すなわち「共和制」の選択に進み，ここから「共和制」の擁護者レナル神父『両インド史』への執筆協力がはじまる。レヴァンテールによれば，ドルバックがディドロに『セネカ論』の執筆を依頼したのは，まさにディドロの政治観のこの転換期と重なっていたのである。

ディドロのセネカ観の発展・転換——他方，ディドロがセネカについて最初に言及したのは，シャフツベリの自由訳『人間の真価と徳論』（1745年）の注のなかであるが，そこでディドロは，セネカを，ネロと妥協した政治家，理論

1) *Ibid.*

と実践とが乖離した人物として断罪している。ディドロのこのセネカ観は以後一貫して変らなかったのであるが，エカテリーナの宮廷——「ほとんどローマ的な専制政治」[1] が支配する宮廷——の体験が，ディドロのセネカ観に変化をもたらす。すなわち，ネロの宮廷でのセネカの位置とエカテリーナの宮廷での自分の位置との類似性の自覚を通して，ディドロはセネカの立場の困難さが了解できるようになり，かつての断罪を取り消すようになったのである。ドルバックのディドロにたいする執筆依頼はまた，この時期とも重なっていた。

レヴァンテールは，こうしてディドロの『セネカ論』初版の執筆の時期を，ディドロの政治観の転換とセネカ観の転換とが交差する点に位置づける。したがってこの作品は，ディドロにおいて，これらの立場の転換から生じる2つの矛盾を表現している。——第1は，啓蒙専制君主に絶望しながら，同時に暴君を導く哲学者の使命を弁護せねばならないという矛盾。第2は，セネカにたいする以前からの偏見——断罪——がまだ完全には捨てきれていないにもかかわらず，同時に彼の立場の困難さが，エカテリーナの宮廷における自分自身の体験を通して，よく理解できるようになり，セネカの生涯をなんとか弁護したいという矛盾。

レヴァンテールによれば，この矛盾にひきさかれたディドロの「この作品は，慎重に彼の歴史的，客観的証人，スエトニウス，タキトゥスの欄外に〔いわば彼らの作品の欄外の注釈として〕構成されている。哲学者〔ディドロ〕は，まだ主体的反省によって，スエトニウス，タキトゥスから，自分をひきはなす勇気をもっていない」[2] という。つまり，初版はまだ，スエトニウス，タキトゥスに依拠したセネカの生涯の客観的解説にすぎず，自己の最晩年の確信を表にだした主体的考察の展開が見られないというのである。そして彼はこう断定する。「作品の内在的意図は，まだ実現，あるいは開花していない。その意図とは，≪市民≫〔ルソー〕にたいして，≪哲学者≫〔ディドロ〕を弁護することである。」[3]

レヴァンテールは，ディドロが，この初版のためらいと矛盾とを乗り越え，かつて自分自身と同一化していた純粋の象徴ソクラテスから離脱して，現実的・政治的世界において，時には妥協も辞さない——それによって自分の名声

1) *Ibid.*, p. 505.
2) *Ibid.*, p. 506.
3) *Ibid.*, pp. 506—507.

を犠牲にしても他人の不幸を救う——実践者セネカと完全に同一化し，その立場からルソー（=ソクラテス）にたいして，ディドロ自身（=セネカ）を弁護しはじめる時，はじめて『セネカ論』の「内在的意図」が成就される——すなわち第2版が成立する——と考えているのである。「『セネカの生涯論』〔『セネカ論』初版〕は，事実ひとつの模索，すなわち来たるべき〔自己〕投影の場の調査である。」——これが，レヴァンテールの結論である。

(2) レヴァンテールの『セネカ論』第2版の解説——レヴァンテールは，すでに初版の解説のなかで明らかにしていたように，第2版の意味を，ディドロ的生き方（セネカの立場）とルソー的生き方（ソクラテスの立場）との対比という視点から照らしだそうとする。

まずレヴァンテールは，『セネカ論』初版，および特に第2版におけるディドロの意図が，ルソーの『告白』中に見られる，ディドロにたいする「攻撃を弱める」こと——「〔『告白』と〕相反した内容の覚書を執筆して，ルソーを反駁すること」[2]——にあったと主張する。

では，1742年に出あって以来，1757—1758年にいたるまで，17年間にわたってもっとも親密な交友関係を続けたディドロとルソーは，なぜ最後には決定的に別れねばならなかったのか。レヴァンテールは，2人の親友の訣別の出発点に，両者に共通のヴァンセンヌ体験をおいている。

いうまでもなく，ルソーのヴァンセンヌ体験——ヴァンセンヌに入獄中のディドロを訪問し，その時に，学問・芸術の進歩は，人間を道徳的に堕落させる，という『学問芸術論』の着想をえたという体験——は，以後の彼の一生の歩みを決定する。他方，ディドロのヴァンセンヌ入獄体験は，彼にはじめて「身の危険」と精神的「苦悩」とがどのようなものであるかを実感させる[3]。レヴァンテールによれば，かつてシャフツベリの翻訳の注のなかで，ソクラテスと同一化した立場に身をおいて，セネカの妥協を断罪したディドロは，この体験を通して，セネカへの断罪を撤回するにいたる（逆説的なことにディドロが，獄中で政府に屈服したまさにその時に，彼はプラトン『ソクラテスの弁明』の翻訳をはじめたのである）。

政府に恭順を誓って出獄したディドロは，自分自身の目にはもはやソクラテ

1) *Ibid.*, p. 507.
2) LCH_2, p. 10.
3) *Ibid.*, p. 16.

スではありえなくなっているにもかかわらず，世間のひとびとの目には真理のための受難者ソクラテスとして映っていく。ここからディドロの「二重性」[1]——人格と社会的役割との分裂——がはじまる。しかしディドロは，これ以後自分の人格の純粋な統一性（ルソーの立場）を犠牲にしてまでも，他者の利益につくす道を選択する。『百科全書』の編集，執筆，レナル神父『両インド史』への執筆協力など。彼の人格の統一性は分裂し，状況に応じた役割を演じざるをえなくなる。

レヴァンテールによれば，ディドロとルソーとの「分裂」の原因は，まさにこの点にあるという。「ルソーは，人格と役割とを統一させることによって，自己を限定する。この統一の歩みは，論理的に自伝——存在と外見との≪私小説≫における融合——にいたる。」[2]（原文のイタリック体は傍点で示す。）だがディドロは逆である。「ディドロは，人格と役割とを分裂させることによって，自己を多様化する。この二重性は演劇にいたる。そこでは，個性のない，実際的なことばが語られ，それは他者〔観客〕によって現実のなかに統合される〔現実的意味が与えられる〕。」[3]

それでは，なぜディドロは生涯の最後に，特にセネカを主人公にした作品を書いたのか。レヴァンテールは，この問にたいして次のように答える。「美しいページを書くこと」（ルソーの立場）を断念し，現実世界での行為を選択した人間（ディドロの立場）は，常に悪意ある中傷にさらされている。特に，行

1) *Ibid.*
2) *Ibid.*, p. 19.
3) *Ibid.* この分析は正しい。ほぼおなじ趣旨のことを，鷲見洋一氏もそのすぐれた博士論文中の一節で主張している。«Quand le "promeneur solitaire" raille délibérément l'idée de transparence et repousse les apparences comme fausses, la sociabilité de l'auteur du ***Neveu de Rameau***, au contraire, ne s'exerce que dans cette conviction que le péril de l'extériorité est moins grave qu'on ne le croit et que l'homme, au lieu de s'engloutir dans l'indolence de la solitude, doit prendre intérêt aux gestes et aux expressions de l'individu, dont la connaissance exacte et profonde, à elle seule, permettrait de fonder une véritable sémiologie des comportements humains et d'établir, d'une façon ou d'une autre, le juste équilibre entre le moi profond et le moi sociable, c'est-à-dire entre le dedans et le dehors. Ainsi le problème de la connaissance de soi apparaît-il chez Diderot non comme aspiration véhémente à l'état immédiat, à une transparence sans obstacle —comme en témoigne l'œuvre de Rousseau—, mais comme une tactique médiate dont le moyen détourné n'exclut pourtant pas l'idée de sincérité. Cette tactique, inventée sans doute au plus profond de la solitude, consiste d'ailleurs à se rapporter à autrui — bien que provisoirement — de la solution du problème, c'est-à-dire à chercher ailleurs qu'en soi-même des indices, des signes, des marques qui révéleront un jour le secret de l'âme.» Yoichi SUMI, «Autour de l'image du jeu d'échecs chez l'auteur du ***Neveu de Rameau***», dans les ***Recherches nouvelles sur quelques écrivains des lumières***, sous la direction de Jacques Proust, Genève, Droz, 1972.

為が，その行為を生みだした状況から切り離されて評価される場合は，必ず誤解をまねく。「それゆえ，行為の状況を正確な光のもとで，哲学的な演出〔意図〕のもとに上演する〔描きだす〕ことが重要である。そのためには歴史的事実が範例となる。セネカの過ぎさった生涯は，ディドロの現在の生き方が解明される鏡である。」[1] さらにディドロは，『告白』のルソーが，セネカの中傷家スイッリウスのようにディドロの中傷家にならないように，自分から進んで自分自身のタキトゥス――『年代記』のなかで，スイッリウスの中傷にたいしてセネカを弁護したタキトゥス――になって，未来のひとびとの前で自己弁明をしなければならない。こうして，『セネカ論』第2版は，ディドロの「遺言，根元的，最終的な意志の表明」[2] となる。

ルソーは「具体的行為」を断念することによって，自己の「統一性」，「美的」，「抽象的統一性」をまもった。それならば人格と役割との「分裂を生きる」という「真に哲学的な勇気」をもったディドロは[3]，ついに分裂したままで終るのであろうか。（多様な役割りを通して，すべてのひとに善行をつくそうと望む人間は，その人格と役割の分裂のゆえに，「彼は善人なのか，悪人なのか」という疑問をひとびとに抱かせざるをえない。レヴァンテールによれば，ディドロはそのことを自覚しているという。そしてこの問題を「私生活の次元で」演劇化した作品が[4]，『彼は善人なのか，悪人なのか』〔1781年，初版『脚本と序幕』は1777年〕にほかならないという。）ディドロは，この分裂を現実の世界で統合することを断念して，両者の統合を「来たるべき実存的な次元，後世」[5] に託している，とレヴァンテールは主張する。

こうして，『告白』がルソーの表現の世界を閉じたのとおなじように，『セネカ論』第2版がディドロの表現の世界を閉じる。ただ両者の違いは，ルソーが自我から出発し，自我が他者から遠ざかる歩みを常に第1人称で語るのに反して，ディドロは，他者を排除せず，むしろ自我を語るために，他者についてのべようとする[6]。ディドロにおいてはあらゆる場合に，他者は「自我の開花の場所」[7] なのである。このようにして，『セネカ論』第2版を，セネカを口実

1) *Ibid.*, p. 26.
2) *Ibid.*
3) *Ibid.*
4) *Ibid.*, p. 22.
5) *Ibid.*, p. 26.
6) *Ibid.*, p. 28.
7) *Ibid.*, p. 30.

にしたディドロの『告白』として読む，というのがレヴァンテールのこの作品にたいする解釈である。

このレヴァンテールの解釈は，数多くの示唆を含んでいるが，以下に若干私の意見をのべておきたいと思う。

(一) レヴァンテールは，『セネカ論』両版本の「内在的意図」は，「≪市民≫〔ルソー〕にたいして，≪哲学者≫〔ディドロ〕を弁護すること」であると断定し，初版をこの意図が，「まだ実現，ないし開花していない」段階と規定している。しかし，初版をたんに第2版の胚種段階としてしか理解せず，作品固有の自律的価値を忘れることは納得できない。

レヴァンテールのこの視点は，恐らくディドロが，ルソーの『告白』への反撃を意図して『セネカ論』第2版のみならず，初版をも執筆したと考える誤った想定から生まれたものであろう。たとえばレヴァンテールは次のようにいう。「『哲学者セネカの生涯』〔『セネカ論』初版〕と，さらに『クラウディウスとネロの治世論』〔第2版〕において，ディドロが試みたのは，デピネ夫人がディドロとグリムの協力をえて『ド・モンブリアン夫人回想録』で意図したこと，すなわち，〔『告白』と〕相反する内容の覚書を執筆して，ルソーに反駁することであった」[1]と。

しかし，以下私の論文第二部が示すように，少なくとも『セネカ論』初版の全体は，「ルソーを反駁すること」――レヴァンテールのいう「内在的意図」――を動機として執筆されたものではない。（もちろん，そのことはディドロが，初版執筆中にルソーを意識していなかったということを意味しない。むしろ逆であった。）本論第二部でのべるように，初版における，ルソーにかんする注は，初版のテクスト全体が一応完成したあとで付加されたと推測すべきものなのである。

レヴァンテールは，このような視点に立つことによって，『セネカ論』初版に固有な多面的な特徴――セネカ弁護において示されたディドロの立場，ディドロの道徳論・政治論――の検討と，その意味づけを欠落させてしまっている。

(二) レヴァンテールは，第2版を，先述した「内在的意図」の開花として把握するのであるが，第2版全体の意味を，ディドロのルソーにたいする反応という視点だけから解釈することは無理である。

1) *Ibid.*, p. 10.

ここでもまた第2版に固有な多面的な特徴が無視されてしまっている。このような『セネカ論』解釈は，次のようにして成立したものであると推測される。——ルソーは，『学問芸術論』以来，一貫して「存在」と「外見」との一致を追求し続ける（「もしも外見が，いつも心の状態を映しだしているとしたら，われわれが一緒に生活することはなんと楽しいことだろう」『学問芸術論』[1]）。ところで，ディドロの生涯における最終的な意志の表明である『セネカ論』第2版には，ルソーを攻撃した長い挿入文が付加され，そこにはディドロの反ルソー的立場が表明されている。レヴァンテールは，この反ルソー的立場を，「存在」と「外見」との分裂——ただしレヴァンテールは，ディドロにおけるこの分裂を「人格」と「役割」との分裂といいかえる——の正当化であると解釈し，そこにディドロの世界観の窮極的表現，あるいはその全面的開花，を読みとる。そしてこの最終的にに顕在化した世界観——「人格」と「役割」との分裂の正当化——を，その世界観の潜在的段階に遡源して一元的に分析するところにレヴァンテールのディドロ解釈——および『セネカ論』初版の解釈——が成立したと考えられる。この解釈が，支持しがたいという具体的根拠については，本論第三部を参照されたい。

㈢ レヴァンテールは，晩年のディドロの意識のうちに，ディドロ（=セネカ）対ルソー（=ソクラテス）という対立を想定している。彼によれば，この対立は，若い日に非妥協的で純粋な存在ソクラテス（=ルソー）と同一化していたディドロ——ルソーとの友情の時期のディドロ——が，やがてこの同一化を捨て，現実と妥協しつつ他者の幸福のためにつくすセネカとの同一化に移行した結果生まれたものであると主張する。

しかし，ディドロの意識のうちに，ソクラテスからセネカへの移行を検出することは不可能である。ディドロは，『セネカ論』のなかで，はっきりソクラテスとセネカとを同一化して考えている。これについては，本論第二部，第三部，第四部の私の分析を参照されたい。

㈣ レヴァンテールは，ディドロとルソーとの分裂，相違の局面だけを指摘している。たしかに2人は，「敵対」している。しかし彼らは，同時に敵対する「兄弟」——«deux frères ennemis»——であった。問題は，2人がたんに「敵対」している点にあるのではなく，「敵対」しつつもなおかつ「兄弟」と

1) J.-J. ROUSSEAU, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, p. 7.

しての類似性を示していた点（あいは，類似性を示しつつも敵対していた点）にある。その点の検討が無視されているため，彼の分析は一面的すぎるように思う。

以上私は，レヴァンテールの所説にたいして若干の批判をのべてきたが，それにもかかわらず，彼の解釈は『セネカ論』のもつ特徴の一面を鮮明に浮かびあがらせたという意味で，注目に値するといえるだろう。

(3) グルニエ「ディドロ」——レヴァンテール編全集第12巻所収の諸作品全体につけられたこのグルニエの序の後半は，『セネカ論』の初版と第２版に言及しているが，それはきわめて断片的なものにとどまる。彼はまず，初版のルソーにかんする短い注が，第２版で長い攻撃の文章となって本文に挿入されるにいたった由来を説明する。そして，ディドロは，ルソーの『告白』のなかで，自分が直接非難されていないことを知っていたがゆえに，もっぱら「他人のための復讐者」として振舞うことができたと主張する[1]。

当時の「哲学者」には，ルソーを除いて，３種類の敵が存在していた。「君主」，「裁判官」，「僧侶」である。グルニエによれば，「君主」は，「ルイ15世へのあてこすりにもかかわらず比較的見逃がされており」，「裁判官」は「容赦なく裁かれており」，「僧侶」は「きわめてきびしくとり扱われている」という。この評価に誤りはないが，ただ「〔ディドロにとって〕フリードリヒとエカテリーナ（ディドロの保護者）が哲学者たちを保護したことを忘れるのは困難であった」[2]と，フリードリヒとエカテリーナを無差別に扱うことには問題があるように思う。ディドロは，はっきり２人を区別しているからである（本論第二部参照）。

ディドロが，セネカにおいてもっとも高く評価したのは生活と思想との一致であった。この点でストア派の哲学者は，18世紀の僧侶の対極にいる。ただ，「無神論者」ディドロは，ストア主義のなかにある，宗教と哲学との一致——神がすべてに遍在し，すべての原因をなすという考え——に「困惑して」いるとグルニエはいう。そして «De plus Diderot est par excellence un “contestataire” et non un conformiste !» とつけ加える[3]。確かにその通りである。だが『セネカ論』第２版のストア主義の解説として——ほかの中心的論点にま

1) LS, p. X.
2) *Ibid.*
3) *Ibid.*, p. XI.

ったく触れず——恐らくディドロが「無神論者」であるという理由だけから，この末節の問題のみをとりあげて紹介するというのは余りにも «conformiste» ではないか。

最後にグルニエは，ディドロの独創的な創作法について語り，彼は頭のなかにひとつの観念が浮かんでくるとそれを反芻し，「湧きおこった断想を，ちょうどパスカルがしたのとおなじように，順序もなく紙の上に書きとめる（ディドロがパスカルとつながりがあるのはこの点だけである）」[1] と書いている。だが，「ディドロがパスカルとつながりがあるのは，この点だけ」ではない。『ファルコネとの論争書簡』中には，「厳密な論証の真理」と対比された「心情の真理」という「パスカル的語彙」[2]（ジョルジュ・メ）があり，そのほか「後世」の称賛にたいする自分の確信の正しさを立証するために使った，パスカルの「賭けにおける分け前の理論」と類似の論証も存在する（本論第四部参照）。以上のべたような理由から，グルニエの『セネカ論』の解説にたいして，高い評価を与えることはできない。

(3) スタロバンスキー「ディドロと他人のことば」——この20ページにおよぶ，レヴァンテール編全集第13巻（近刊）所収の諸作品全体につけられるはずの序のうち，『セネカ論』第2版を直接の対象とした部分は6ページ余りにすぎない。しかしスタロバンスキーはこの論文全体のなかで，スタンヤン『ギリシア史』の翻訳（1743年）——この翻訳は普通ディドロの最初の仕事として扱われるシャフツベリの『人間の真価と徳論』の翻訳（1745年）に先立つ作品である——から，最終作『セネカ論』第2版（1782年）にいたるディドロの仕事全体の意味を体系的に解明している。

スタロバンスキーは，ディドロ初期のスタンヤンの翻訳，ジェイムズ『内科学・外科学・化学・植物学総合辞典』の翻訳，シャフツベリの翻訳，『百科全書』の諸項目という作品群と，後期の『生理学の基礎』，レナル神父『両インド史』への協力部分，『セネカ論』という作品群との間には，「偶然の類似」以上のものが存在しているという。すなわち，これらの諸作品は，すべて広い意味での「翻訳」にかかわっている。スタロバンスキーによれば，この「翻訳」とのかかわり方のなかに，ディドロの「世界，言語，文学にたいする関係

1) *Ibid.*
2) Georges MAY, ***Quatre visages de Diderot***, Paris, Boivin, 1951, p. 146.

の特徴的な形式」[1] が見いだされるのである。ディドロ自身が，シャフツベリの翻訳の「序言」のなかで「彼の作品を一読，再読した。体中が，彼の精神でみたされた。いよいよ〔翻訳の〕ペンをとる時には，いわば本を閉じてしまった〔ように原文にこだわらなかった〕。これほど自由に，他人の作品を利用したことはなかった」[2] と書いているように，彼は，他人を「模倣」することによって，かえって「自由」を実感する。

『セネカ論』（スタロバンスキーは，初版・第2版を特に区別せずに，その共通点を問題にしている）においても，ディドロのこの態度はそのまま維持されている。いうまでもなく，今度は，模倣，あるいは同一化の対象は，セネカである。セネカは，当時非キリスト教的——「啓示」に基礎をおかない——道徳を構想していた「哲学者」たちが依拠しようとした権威であり，そのために教会および「反哲学者たち」の攻撃の的であった[3]。ディドロは，このセネカのなかに自分との類似点を発見する。すなわち，セネカがネロの廷臣であったように，自分もエカテリーナの宮廷の滞在者であったこと，ともに地方出身者であること，ともに父から哲学の勉強を反対されたこと，セネカがコルシカに追放されたように，自分もヴァンセンヌに投獄されたこと，しかも2人とも権力者にその後の服従を誓って許されたこと，などである[4]。ここから，ディドロにおけるセネカのための「弁明」の二重性——「反哲学者たち」にたいする「哲学」の「弁明」と，ディドロ自身の自己「弁明」——が生まれる。

スタロバンスキーは，『セネカ論』に見られるような，他者（セネカ）に託して自分の思想を語るディドロの手法を，「ことばの転移」（傍点は，原文イタリック体の語）と名づけ，次のようにいう[5]。「このことばの転移の運動は，ディドロ自身が登場するすべての作品において認められる（ただし，それと引き替えに，彼は自分の代りに語っているすべての人物のことばを，好きな時に，いつでも中断するという権利を留保する）。」このようにしてディドロは，セネカに語らせておきながら，必要とあればいつでも「批判的介入」を行なって，彼の話を断ち切るのである。では作品の「連続性」はどうなるのか。スタロバ

1) *Critique*, pp. 3—4.
2) AT, t. I, p. 16.
3) *Critique*, p. 7.
4) *Ibid.*
5) *Ibid.*, p. 11.

ンスキーによれば，それは対象であり，「本」——セネカの作品——そのものの「連続性」と，ディドロの「魂」の「連続性」の両方によって保証されているという[1]。

「魂」の「連続性」を通じてディドロの自画像があらわれる。だがディドロは，『セネカ論』の初版のなかで，ネジョンにたいして，「私の作品を好きなように扱ってください。賛成しようと，反対しようと，付加しようと，削除しようとあなたの自由です」と書いて，彼にいわば無制限の編集権を与えてはいなかったか。このような自己「放棄」(「疎外」) によって，自画像は歪められないだろうか[2]。この疑問にたいして，スタロバンスキーは，ディドロは，この「信頼にみちた寛大さ」という彼独特の特徴によってこそ，「自分自身を確立する」と主張する[3]。ただし，同時に彼は，ディドロのうちに「他人の責任によってまもられ」たいという，「アリバイ」をもとめる心理がひそんでいることも否定しない[4]。

ディドロのうちにあるこの，「信頼にみちた寛大さ」は，彼に自分自身の名声につながる「美しいページ」を書くことを犠牲にしてまでも，他人への「親切」を選択させるにいたる。この問題を主人公アルドゥアン (=ディドロ) を通して演劇化したものが，『彼は善人なのか，悪人なのか』にほかならない[5]。

ディドロの思考は，常に外部に向って進行する。『ラモーの甥』の冒頭で，パレ・ロワイヤル公園の娼婦の歩みのなかに，ディドロの思考はまず自己を「外化」したが，それはついでレジャンス・コーヒー店のチェスをするひとのなかに，ついでラモーの甥のなかに，自己を「外化」する[6]。甥の口を通して，ディドロ自身の「もっとも辛辣な批判」が語られるのは，この理由による。これと同一の思考の歩みは，『ダランベールの夢』3部作にも検出される。ディドロ自身は，第1の対話にしか登場しないのに，彼自身の考えは，第2の対話では夢を見ているダランベールによって，第3の対話では医師ボルドゥーによって語り継がれる。「ことばの移転が，今度の場合従っている法則によれば，科学的思考の表現は，一切の正しい精神によってうけいれられ，再び伝達され

1) *Ibid.*, p. 10.
2) *Ibid.*
3) *Ibid.*, p. 11.
4) *Ibid.*
5) *Ibid.*, pp. 11—12.
6) *Ibid.*, p. 14.

うるのである。その結果，「他人のことばが万人のことばになる」とスタロバンスキーはいう[1]。

「外部に向うディドロの思考表現の窮極の目的は，自然の秘密を外化することである。」[2] 『生理学の基礎』において，それは「魂と肉体との質的差異」による人間の説明を捨て，神経の「交感作用」による一元的・物質的説明としてあらわれる[3]。たとえば「記憶」は，脳中にある蠟のように柔らかい物質が，外界からの刺戟によって受けた変形であると説明される。この変形した脳はいわば「本」のようなものである。ではこの「本」を読む「読者」はどこにいるのか。「読者」は外にいるのではなく，感じる「本」自体だとディドロは答える[4]。こうして一切の外の世界がすべて記憶としてわれわれのうちにはいりこんでくる。その時，「私」と「われわれ」との区別は意味を失い，ただ「全体的現存の働き」があるのみだと，スタロバンスキーは，ジョルジュ・プーレにならっていう[5]。これは個人の「意識の働き」ではなくて，むしろ世界のほうから個人の前にあらわれてくることである[6]。ここに，「内面性と外面性との一切の区別が消失する」。だから「もし一切のことばが他人のものであるとすれば，それはまたわれわれ自身のものになる」[7]。続いて，ディドロは，感覚をもった原子から人間にいたるまでの連続的全階梯を構想する[8]。この壮大な「宇宙生物学的」世界のなかで，「意識」は，「身体的原因」から生まれる[9]。だが，それにもかかわらず，ディドロは「絶滅にさらされている自然的存在〔死ぬべき肉体〕と，一切の恐怖から解放された意識との間に距離をおく可能性」を確認している[10]。「ひとたび普遍的決定論とわれわれの死すべき必然性とが確認された以上，われわれには一切を失ったひとびとの，抑えがたい最後の力が残されている。すなわち，真理のすべてを話し，語る力である。」[11]こうして「再建された主体性」が，今や「自由」の観念を獲得する，とスタロバンスキ

1) *Ibid.*
2) *Ibid.*, p. 15.
3) *Ibid.*, p. 16.
4) *Ibid.*, pp. 17—18.
5) *Ibid.*, p. 18.
6) *Ibid.*
7) *Ibid.*, p. 19.
8) *Ibid.*
9) *Ibid.*
10) *Ibid.*, p. 20.
11) *Ibid.*

ーはいう[1]。そして彼は，この展望のなかに，改めて『セネカ論』を位置づけ，それが先にのべたような，たんなる「弁明」の書であるのみならず，同時に暴君にたいする「批判」の書であり，暴力の正当性を問題にした書であり，哲学者に決して沈黙してはならないことを教える書でもあることを明らかにしているのである[2]。

ディドロは，生涯の間すべての他者にかかわり続け，他者を通して自分を語らせ，そして「他者を模倣する身ぶり」を通して，語り続けてきた。彼はこの独特の道によってついに皆の耳を傾けさせることができた。そして彼の作品のすべてが今やわれわれに答えを迫っている。「他人のことばを執拗に考慮し続けたために，ディドロは，彼のもっとも大切な望みが，ついにかなえられるのを見ることができた。彼の後世であるこのわれわれが彼を永遠の対話者に選んだのである」[3] と最後にスタロバンスキーは結論している。

この論文は，ディドロにおける「ことばの転移」という仮説によって，彼の仕事全体の意味を統合的に説明した試みとして，最近のディドロ研究史上きわめて注目すべき業績であると考えられる。彼の試みは，次の方法によって成立する。まず彼は，ディドロの全生涯を通して，他者のうちに自分を「外化」する「絶えざる〔心理的〕傾向」[4] が存在していたことを事実として検出し，次いで『ダランベールの夢』3部作から『生理学の基礎』にいたる作品のなかで，人間の意識の自己「外化」の様相が，今度は理論的に，すなわち神経生理学的に基礎づけられたと考える。ところで，この意識の徹底的な自己「外化」は，最後には，意識にたいして，その「内面性」と「外面性」との区別を消失させ，自己と他者との区別の意味を失わせるにいたる。こうしてディドロにおける，自己の「ことば」の他者への「転移」が，理論的にも正当であったことが証明され，ここにディドロの世界が完結する，とスタロバンスキーは主張するのである。

『セネカ論』にかんしていえば，スタロバンスキーは，この作品を，上述のようなディドロの世界の完成期の意識の表現として把握する。

ここでも，またスタロバンスキーは，『セネカ論』のもつ「弁明」の側面を，

1) *Ibid.*
2) *Ibid.*, p. 21.
3) *Ibid.*, p. 22.
4) *Ibid.*, p. 3.

まず，セネカへの「ことばの転移」によるディドロの自己弁護という事実のなかで把握し，ついで，この作品におけるディドロのストア主義的「自由」の哲学の成立の理論的根拠を明らかにする。すなわち「内面性」と「外面性」との区別を失った意識は，宇宙の普遍的必然的な秩序を認識したあとに，ふたたびすべてを対象化する「主体性」を獲得するにいたる。その時に生まれる「自由」が，『セネカ論』における圧制への批判を支える「自由」にほかならない，と主張する。

この『セネカ論』の把握がきわめてすぐれたひとつの仮説を提出していることは否定できない。だが，最後にひとこと批判をのべれば，ディドロにおける「自由」の問題は，晩年の彼の意識のなかでは，理論の問題であるよりもむしろ実践の問題であり，論証の問題であるよりもむしろ心情の問題であり，書物のなかの問題であるよりもむしろ経験の問題であった。（スタロバンスキーが，『生理学の基礎』が，「観察」と「実験」によってではなく，もっぱら他人の「ことば」と「書物」のみに依拠して成立した，と書いていることは，この点できわめて示唆的である）。

確かに，『ダランベールの夢』3部作で確立されたディドロの決定論は，晩年にいたっても揺がなかったかのように見える。たとえば，スタロバンスキーが幾度か言及した『生理学の基礎』第6章「意志」において，ディドロは次のようにいう[1]。「意志は意志自体を動かし，決定する原因から生じた結果である。原因のない，意志の行為というものは幻影である。自然においては，なにひとつ飛躍によって起こったりはしない。そこでは，一切が連なりあっている。動物も，人間も，一切の存在が，この一般的法則に従っている。」

しかし，ディドロのうちには，同時に，この決定論を承認しない次のような「自由」の心情もまた生き続けていたのである[2]。「もし私が，あなたを自由に愛していると考えるなら，それは間違いです。事実はそうではありません。〔……〕私は忌々しい哲学と称するやつに足をとられて，かっとなります。精神は，哲学を承認せざるをえないとしても，心情はそれを否定せざるをえないのです。」（1769年9月末と推定されるモー夫人あての手紙。）

この「自由」の心情は，『セネカ論』初版・第2版においては，実践的行為

1) EP., p. 262.
2) CORR, t. IX, p. 154.

のうちに，経験的に直観される「自由」として，真正面から，肯定的に描きだされる。そこでは，人間の「自由」にかんする，理論的——あるいは「形而上学」的——究明は，ディドロ自身によって完全に捨て去られ，もっぱら歴史的状況における行為者の「実践的自由」が——したがって，その「自由」にともなう責任が——問われている。したがって私は以下において，スタロバンスキーが，彼の体系的説明のなかで強調した，ディドロにおける「自由」の観念の「理論」と，「論証」と，「書物」に基づく根拠を問うことをやめ，ディドロの意識により忠実に，その「心情」的，「実践」的，「経験」的根拠を問いたいと思う。その時，ディドロの姿のすべてはスタロバンスキーの解釈とはやや異なった相貌のもとにあらわれるであろう。

諸研究・解説の総括　最後に，『セネカ論』にかんする上記7研究・解説の特徴を，総括的に検討しておきたい。これらの諸研究・解説は，大別して2つの傾向を示しているように考えられる。

(1)　作品が提示する多面的な特徴を，作品そのものに即して浮かびあがらせようとする研究・解説。——シャルクの研究，ボンヴィルの研究，グルニエの解説がこの傾向を示している。（ただし，先述した通り，グルニエの解説は，ほとんど研究の名に価せぬ，きわめて安易な紹介にすぎない。）

(2)　作品全体の意味を，なんらかの仮説によって一元的に解釈しようとする研究・解説。——ロイの研究発表，レヴァンテールの初版の解説，同第2版の解説，およびスタロバンスキーの研究が，この傾向を代表している。ただし，ロイ，レヴァンテール，スタロバンスキー3人の解釈は，3様に異なる。

すなわち，ロイは，『セネカ論』初版・第2版を，ディドロの道徳論として意味づけているのに反して，レヴァンテールは，それをルソーにたいするディドロの自己弁護として解釈している（初版は，この自己弁護の意図が潜在化している段階を，第2版はこの意図が顕在化した段階を示すと考える）。他方，スタロバンスキーは，それをセネカ弁護を通したディドロの自己弁護の側面と，暴君批判との2面をもった作品であると特徴づけている。

しかし，『セネカ論』初版・第2版の意味を，道徳論，あるいはルソーにたいするディドロの自己弁護として把握することが，一面的すぎることは，すでにのべた通りである。ロイ，レヴァンテール，スタロバンスキー3者の解釈のうちでは，最後のスタロバンスキーのものだけが，この作品の2つの重要な側

面を指摘しており，その点ディドロの意図をより正確に把握しているということができる。（ただし，ディドロの暴君批判は，彼の道徳論のひとつのあらわれであって，この作品の道徳論としての側面を，暴君批判という一面だけに単純化することには疑問がある。）だが，それにもかかわらず，彼は，作品自体の多面的特徴をまずテクストに即して検討するという手続きをとらず，むしろディドロの全作品にかんする彼の体系的説明のなかに，この作品を位置づけることに主眼点をおいたため，『セネカ論』初版・第2版において，「心情」，「実践」，「経験」がもつ，重要な意味を見落してしまっている。

したがって，私は以下の本論において，前記(2)のような解釈法をとらず，むしろシャルク，ボンヴィルによって開始された——そして特にボンヴィルによって開拓された——ディドロのテクストにより忠実な(1)の接近法をとっていきたいと思う。ディドロのもつ多面的な豊かさを明らかにするには，まずテクストの具体的な読みとりからはじめねばならないのは当然であろう。

本　　論

第一部　テクストの批判

第Ⅰ章　原稿断片と諸版本

原稿断片　『セネカ論』初版，第2版の原稿は，今日ともに散逸してしまっており，現存するのは次の2枚の自筆稿断片だけである。これらはともに，ヴァンドゥル原稿群に属するものであって，パリ国立図書館原稿室に収蔵されている（分類番号 N. a. fr. 24932 f_1）。

この断片について，ハーバート・ディークマンは次のようにのべている[1]。

> 『クラウディウスとネロの治世論』（アセザートゥルヌゥ編『ディドロ全集』第3巻，4ページ参照）の初版『哲学者セネカの生涯と著作，およびクラウディウスとネロの治世論』の自筆稿（恐らく初稿）の2断片（15.5×20 cm）。2枚の紙片は，この『論』の1，2ページと9，10ページを示している。紙片全部にディドロ自身の筆跡による多数の訂正のあとをとどめている。原稿の残余が残されている形跡はない。

1) Herbert DIECKMANN, *Inventaire du fonds Vandeul et inédits de Diderot*, Genève, Droz, 1951, p. 4.

この２断片は，まだどの版本にも収録されていないから，以下にこれを印刷する。２断片各紙片の裏面第２ページは，大括弧内の数字〔２〕で指示する。テクスト中の大括弧は，原稿中の抹消，インクの染み，文字の脱落などの箇所を示し，その内容は脚注に下段記載する。（ただし，染み，脱落などで，明白に復元可能なものは復元しておく）。脚注冒頭の数字は，テクストの左欄外に印刷した行数を示している。原稿の正字法，句読点，大文字，小文字の別はそのまま維持する。

脚注上段には，初版，第２版との異同を指摘する。（ただし，正字法，句読点，大文字と小文字，注の部分における語形の一部省略などにかんする異同は指摘しない。）異同の記載にかんしては，次の原則に従う。

〔...〕――大括弧内は語，句，節の変更を示す。

＜...＞――鍵括弧内は語，句，節の付加を示す。

＜－＞――鍵括弧内の－記号は，語，句，節の削除を示す。

なお，第１断片中の『セネカ論』初版の表題，および各断片の注（星印を付した第１断片の注も含む）は，もとの原稿においては，本文の右側に記入されているが，ここでは注の説明に際して起こりうる混乱を避けるため，それぞれ断片冒頭，および末尾に印刷した。各断片には，『セネカ論』初版，第１版，およびアセザートゥルヌゥー版（第３巻）との対応（巻）章，ページを付記しておく。

第１断片（S, §. 1, pp. 1—5; CN, t. I, §. 1, pp. 10—12; AT, chap. I, pp. 15—16）

(1) *a*

Essai sur la vie de Séneque le philosophe, sur ses écrits, et sur les regnes de claude et de néron-

(I/1) Lucius annæus Séneque naquit à cordoue, ville célèbre de l'espagne
5 ultérieure, aggrandie, sinon fondée par le préteur Marcellus, l'an de rome, 585, Colonie patricienne qui donna des citoyens, des senateurs, des magistrats à la république, privilege accordé aux provinces de l'empire qui en jouissoient

4	S	[§. I.] Lucius
	CN	[§. 1.] Lucius
7	CN	privilege [dont les] provinces
7	CN	l'empire ⟨—⟩ jouissoient

4 (I/1)――あとから書き加える。

encore sous le regne d'Auguste.

[ ]

10 [ ] Le surnom d'*Annæ* que portoit la famille, signifie ou la vieille famille, ou la famille des vieillards, des bonnes gens dont la rencontre etoit d'un heureux augure.

[ ]

3. on apelloit *Ibrides** les enfants [d']un pere etranger ou d'une mere
15 etrangere. [c'et]oient des especes de citoyens [bât]ards, dont le vice de la naissance se réparoit [p]ar le mérite, [ ] les services, [ ] les alliances, [ ], la faveur, ou la loi. La famille annæa fut-elle espagnole ou ibride, on l'ignore.

[ ] Le pere ou même l'ayeul de Seneque fut de l'ordre des chevaliers. La
20 premiere illustration de ce nom ne remonte pas au dela, et les Seneques etoient du nombre de ceux qu'on apelloit *hommes nouveaux*.

[ ]

14	S	〈—〉 on apelloit
	CN	〈—〉 on apelloit
14	CN	On apelloit [Ybrides]
16	S	les alliances, 〈—〉 la faveur
	CN	les alliances, 〈—〉 la faveur
17	CN	ou la loi 〈(1)〉.

9	大括弧内——最初に引いた横線を線で消す。
10	大括弧内——最初に書いた数字を線で消す。
13	大括弧内——最初に引いた横線を線で消す。
14-17	節全体——最初に書いたこの節全体を線で消し，消した各行の上に，新しく全体を書き直す。
14	***Ibrides***——最初に書いた ***hybrides*** の ***hy*** を線で消し，上の行間に I を書き加える。
14	enfants——最初に書いた別の語を線で消し，上の行間に書き加える。
14	[d']——インクの染みで脱落。
14	etranger——行中に上向きの鉤印（∧）があり，これに対応する上の行間にこの語を書き加える。なおこの行の右欄外に，この訂正にかんして注意を喚起するために，changer への記入がある。
15	etrangere——最初に書いた etrangeres の語尾の s を線で消す。
15	[c'et]——インクの染みで脱落。
15	[bât]——インクの染みで脱落。
16	réparoit の語尾の oit——最初に書いた語尾を線で消して，上の行間に書き加える。
16	[p]——インクの染みで脱落。
16	大括弧内——最初に書いた par を線で消す。
16	大括弧内——最初に書いた par を線で消す。
16	大括弧内——インクの染みで脱落。それに続く数箇の文字は判読不可能。
17	la faveur——上の行間に書き加える。
17	ibride——最初に書いた hybride の hy を消して，上の行間に i を書き加える。
18	横線——消し忘れ。
19	大括弧内——最初に書いた数字を線で消す。
22	大括弧内——最初に引いた横線を線で消す。

[ ] Le pere se distingua par ses qualités personnelles et par ses ouvrages. il avoit recueilli les harangues grecques et latines de plus de cent orateurs
25 fameux sous le regne d'Auguste, et ajouté a la [2] [ ] fin de chacune, un jugement severe, des dix livres de controverses qu'il ecrivit, il [ ] nous en est parvenu environ la moitié, avec quelques fragments des cinq derniers. Sa memoire étoit prodigieuse, il pouvoit répéter jusqu'à deux mille mots dans le même ordre (1) qu'il les avoit entendus.

30 [ ]

[ ] Sur ce que l'on blamoit, apparemment, le chevalier romain Blandus, de donner des leçons d'art oratoire, fonction qui jusqu'alors n'avoit été exercée que par des affranchis, " Je ne conçois pas, " disoit-il, comment il est honteux " d'enseigner ce qu'il est honnête " d'apprendre (2).

26	CN	jugement severe, 〈Cent orateurs fameux sous le seul regne d'Auguste! Quelle épidémie! Depuis la renaissance des lettres jusqu'à nos jours, l'Europe entiere n'en fournirait pas autant.〉 des dix livres
26	CN	controverses [que Séneque le père] ecrivit
26-27	CN	il 〈ne〉 nous en est parvenu 〈qu'〉 environ
28	S	deux mille mots 〈(2)〉
	CN	deux mille mots 〈(2)〉
29	S	dans le même ordre 〈—〉 qu'il
	CN	dans le même ordre 〈—〉 qu'il
31	S	Sur ce que l'on blamoit... d'apprendre (2). の節と次の Soit que la plaisanterie ... qu'on n'en put obtenir の節の順序を入れかえる。
	CN	Sur ce que l'on blamoit... d'apprendre (2). の節と次の Soit que la plaisanterie ... qu'on n'en put obtenir の節の順序を入れかえ，両節の間に次の節を挿入する。— 〈Le discours de Cestius est à regretter. Ce serait une chose instructive et curieuse que la réfutation de Cicéron par un orateur de ce temps.〉
31-32	S	[Sa réflexion sur la dignité de l'Art oratoire, dont le chevalier romain Blandus donna le premier des leçons], fonction qui jusqu'alors
	CN	[Rien de plus sensé que la réflexion de Séneque le pere sur la dignité de l'art oratoire, dont le chevalier Romain Blandus donna le premier des leçons], fonction qui jusqu'alors
33	S	par des affranchis, 〈est très sensée :〉
33	S	" Je ne conçois pas, [dit-il],
	CN	" Je ne conçois pas, [dit-il],
34	S	d'apprendre [(3)].

---

23 大括弧内——最初に書いた数字を線で消す。
23 Le pere——最初に書いた文字を線で消して，上の行間に書き加える。
25 大括弧内——最初に書いた a la の二語を線で消す。
26 大括弧内——最初に書いた ne を線で消す。
26 en——上の行間に書き加える。
27 environ la moitié, avec——最初 est parvenu のあとに que を書き，この que を消して，上の行間に書き加える。
27 des cinq derniers——上の行間に書き加える。
30 大括弧内——最初に引いた横線を線で消す。
31 大括弧内——最初に書いた数字を線で消す。
33 que——上の行間に書き加える。

35 [ ]

[ ] Soit que la plaisanterie des republicains en général, soit dure; soit que Seneque le pere fut d'une humeur caustique, un jour (3), il entre dans l'ecole du professeur en eloquence Cestius, au moment ou il se disposoit à refuter la miloniene. Cestius, après avoir jetté sur lui même un regard de complai-
40 sance selon son usage, dit "Si j'étois gladiateur, je serois fuscius; Panto-
"mime, Batyle; Cheval, Mélission", et "comme tu es un fat, ajouta Seneque,
"tu es un grand fat". on eclate de rire. on cherche des yeux l'écervelé qui a tenu ce propos. Les éleves s'assemblent autour de Seneque et le supplient de ne pas tourmenter leur maître. Seneque y consent, a la condition que
45 Cestius declarera juridiquement que Ciceron etoit plus eloquent que lui, aveu qu'on n'en put obtenir.

[ ]

*(en note au bas de la page)

(hybride ou Ibride vient [ ] du grec ὕβρις, tache, honte; celui dont l'origine
50 étoit tachée, honteuse; ainsi l'on disoit d'un chien, d'un animal engendré de deux especes, d'un stile mêlé de plusieurs idiomes, d'un mot composé de mots empruntés de deux langues, qu'ils etoient *hybrides*; ou du latin *umber*, mestif, dont on fit *imber*, *iber*, *ibrida*; et pourquoi pas de *Iberus* espagnol? ainsi l'ibride etoit un enfant né [ ] ou d'un pere espagnol et d'une mere romaine,

---

	CN	d'apprendre [(4)].
36	S	en général [ait quelque chose de dur,] soit que Seneque le pere
	CN	en général [ait quelque chose de dur,] soit que Seneque le pere
37	S	un jour [(4)], il entre
41	S	Mélission 〈—〉. Et 〈—〉 comme tu es ... un grand fat".
	CN	Mélission ...". 〈—〉 Et comme ... tu es un grand fat 〈—〉.
44	CN	à 〈—〉 condition
45	CN	juridiquement [qu'il est moins éloquent que Cicéron], aveu
49	CN	hybride ou [Ybride] vient
52	CN	qu'ils etoient [Ybrides]
54	S	né 〈—〉 d'un pere
	CN	né 〈—〉 d'un pere

---

35 大括弧内——最初に引いた横線を線で消す。
36 大括弧内——最初に書いた数字を線で消す。
38 professeur——最初に書いた語を線で消して，その上の行間に書き加える。
44 maître——最初に書いた語を線で消して，その上の行間に書き加える。
47 大括弧内——最初に引いた横線を消す。
48 *(en note au bas de la page)——最初に書いた部分（3行）を線で消し，その下にこの註全部を書き直す。
49 大括弧内——最初に書いた字を線で消す。
52 mestif——上の行間に書き加える。
54 大括弧内——最初に書いた字を線で消す。

ou d'un pere romain et d'une mere espagnol.)

——

(2) homme d'une naissance équivoque ou dont les parens étoient de nature et de condition differentes, se trouve dans plusieurs bons auteurs latins. voyez horace, *Satyr. 7. vers* ... Hirtius, *de Bello african. cap. 19.* martial, *lib. 6. epig. 39. lib. 8. ep. 22.* et valere maxime, *lib. 8 cap. 6 num. 4.* on peut consulter surtout l'ancien scholiaste d'Horace sur le passage [in]diqué ci dessus, à la page 324. Edition de Basle de l'an 1555. (addition de l'Editeur)

notes

(1) voyez la préface du premier livre des controverses. pag. 63. 64. tom. 3. Edit. varior.

(2) [ ] Senec. controvers. Lib 2. præfat. pag. 146, tom. 3. Edit. cit.

(3) excerpt. ex lib. 3. controvers. pag. 428, 429.

57	S	[[ ] ⟨Ce mot, employé pour signifier en général un⟩ homme d'une naissance équivoque ... (addition de l'Editeur) [ ]]
	CN	[(1)] ⟨Ce mot, employé pour signifier en général un⟩ homme d'une naissance équivoque
59	S	Satyr. 7. vers [2]
	CN	Satyr. 7. vers [2]
60	CN	epig. 39. ⟨29 ;⟩ lib. 8 ep. 22

60 on peut consulter——最初に書いた voyez を線で消して，上の行間に書き加える。
61 [in]——消えている。
66 大括弧内——apud を線で消す。
66 tom. 3.——上の行間に書き加える。

第2断片 (S, §. VII, p. 16—§. VIII, p. 19 ; CN, t. I, §. 7, p. 19—§. 8, p. 21 ; AT, chap. VII, p. 21—chap. VIII, p. 23)

biens du prince que de l'exercice de la magistrature, et prefera la fonction d'intendant du palais ou de publicain, au titre de consulaire. trop d'ardeur a recueillir la fortune de son fils, Lucain, après sa mort, souleva contre lui fabius romanus, intime ami du poète. Romanus contrefait des Lettres sur lesquelles le pere et le fils sont soupconnés [sic] d'être les complices de

1 biens du prince ... intime ami du poète——最初左端各行につけた引用符を消す。
1 de l'exercice——上の行間に書き加える。
4 ami——上の行間に書き加える。
5 les——最初に書いた語を消して，上の行間に書き加える。

Pison. ces Lettres sont presentées a mela, par les ordres de neron avide de ses richesses. mela a qui l'experience de ces tems avoit appris quel etoit le but, et quelle seroit la fin de cette affaire, la termina par le moyen le plus + court et le plus usité ; ce fut de se faire couper les veines ; il mourut de la
10 meme mort que son frere, avec autant de courage, mais avec moins de gloire, laissant par son testament de grandes sommes a Tigellin et a Capiton son gendre, afin d'assurer le reste a ses heritiers legitimes. (21) Si la liaison du poete Lucain, avec un scelerat tel que Romanus, vous surprend ; si vous ne pouvez ni supposer que Lucain, qu'un homme d'une aussi grande penetration
15 se soit aussi grossierement trompé dans le choix d'un ami, ni que la conformité de caracteres les ait attaches l'un a l'autre ; Interrogez les manes d'acilia. (22)

·9· Annæus mela auroit été aussi un homme d'un merite distingué [2] s'il
20 etoit permis d'en croire un pere qui parle a son fils. ses eloges ne sont quelquefois que des conseils adroitement déguisés. Le pere de Seneque ecrit a son fils Mela (23) " vous avez la plus grande aversion pour les fonctions " civiles, et pour la bassesse des demarches, sans lesquelles on n'y parvient " pas. votre passion est de n'en avoir aucune, pour vous livrer sans re-

6	S	par [ordre de] néron
	CN	par [ordre de] néron
7	CN	avide de [sa dépouille].
8	CN	quel etoit le but [de cette affaire, & quelle en seroit la fin,] la termina
12	CN	le reste ⟨de ses richesses⟩ à ses heritiers
12	S	legitimes. [(23)]
	CN	legitimes. [(23)]
14	S	si vous ne pouvez ⟨—⟩ supposer
	CN	si vous ne pouvez ⟨—⟩ supposer
17	S	les manes d'acilia. [(24)]
	CN	les manes d'acilia. [(24)]
18	S	⟨—⟩
	CN	⟨—⟩
19	S	[§. VIII.] Annæus
	CN	[§. 8.] Annæus
20	CN	qui parle a son fils [, & dont les] eloges ne sont
21	CN	adroitement déguisés. [Seneque le pere]
22	S	a son fils Mela [(25)]
	CN	a son fils Mela [(25)]

10 frère——最初に書いた語を消して，上の行間に書き加える。
19 ·9·——最初に書いた数字を消して，上の行間に書き加える。

25 " serve a l'etude de l'eloquence, de cet art qui facilite l'accès a tous les autres,
" et qui instruit ceux memes qu'il ne s'approprie pas. n'imaginez pas que j'use
" de finesse, a dessein de vous arracher a un travail qui vous reussit.
" Satisfait du rang de votre pere, mettez a l'abri du sort la meilleure partie
" de vous meme. vous avez plus d'elevation dans l'esprit que vos freres.
30 " a un talent superieur, pour les bonnes connoissances, vous reunissez une
" belle ame. vous pourriez etre corrompu par l'excellence même de votre
" genie. vos freres se sont livrés a des soins ambitieux, en se destinant au
" barreau, —ils ont poursuivi des honneurs dont il faut redouter jusqu'aux
" avantages qu'on s'en promet. il fut un tems ou je me sentois un attrait
35 " violent, vers la meme carriere. J'en etois l'apologiste. J'en connoissois les
" dangers, et cependant J'exhortois vos freres a la suivre ; mais

notes

(21) tacit. annal. lib. 16, cap. 17.

(22) voyez ci dessus le passage de tacite cité note 19.

40 (23) voyez la préface du second livre des controverses de Séneque le pere ; pag. 145. 146. tom. 3. Edit. varior.

---

26 CN ceux mêmes qu'il ne s'[attache] pas
26 CN n'imaginez [point] que j'use
27 CN a dessein [d'irriter votre goût pour] un travail
35 CN J'en etois [le panégyriste].

上掲2断片は，ディークマンが指摘するように，『セネカ論』初版の「恐らく初稿」と推定される自筆稿であるが，以下もう少し詳しくその特徴を説明しておきたい。

(1) 第1断片1ページの表題『哲学者セネカの生涯と著作，およびクラウディウスとネロの治世論』は，初版のそれである。内容も第2版よりは初版に近いが，初版との間にもかなりの異同がある。

(2) 初版にたいする両断片の異同の種類は次の通りである。——㈠構成にかんしては，節の配列の順序（第1断片 l. 54—l. 84 間の2節の順序の逆転），注番号（両断片）の相違。㈡表現にかんしては，本文（両断片），注（第1断片）の相違。

(3) 両断片にくらべて，初版の表現は，はるかに明晰になっている。たとえば第1断片から一例をあげよう。

第1断片	初　版
Sur ce que l'on blamoit, apparemment, le chevalier romain Blandus, de donner des leçons d'art oratoire, fonction qui jusqu'alors n'avoit été exercée que par des affranchis, "Je ne "conçois pas, disoit-il, "comment il est honteux "d'enseigner ce qu'il est "honnête d'apprendre.	Sa réflexion sur la dignité de l'Art oratoire, dont le Chevalier Romain Blandus donna le premier des leçons, fonction qui jusqu'alors n'avoit été exercée que par des affranchis, est très sensée: "Je ne conçois pas, dit-il, "comment il est honteux "d'enseigner ce qu'il est "honnête d'apprendre.

(4) 第1断片と第2断片とを比較すると，第1断片のほうに訂正のあとが多く，初版との異同もこちらのほうに多い。あるいは，第1断片のほうが，第2断片より以前の段階を示しているのかもしれない。

(5) 両断片（特に第1断片）はまだ原稿としてかなり不備であり（消すべき節の番号の消し忘れ，節と節との間の横線の消し忘れ，注における詩の参照行数の未記入などが認められる），初稿のかなり初期の段階を示していることは明らかである。（ただディークマンのように両断片を，無差別に「恐らく〔初版〕の初稿」といい切るには，若干の躊躇を感ぜざるをえない。）

諸版本　現在『セネカ論』の版本としては，初版系3種類，第2版系7種類が刊行されている。これらを出版年代順に次に掲げる。（各版本冒頭に，私がこの論文中で使用する略号を記載する。）

(1) 初版系の諸版本

S:　*Essai sur la vie de Séneque le philosophe, sur ses écrits, et sur les regnes de Claude et de Néron. Œuvres de Sénque* traduites en françois par feu M. La Grange, T. VII, Paris, De Bure, 1779, in-12.

L : *Essai sur la vie de Sénèque le philosophe, sur ses écrits, et sur les règnes de Claude et de Néron*, avec des notes, Tours, Létourmi jeune, an III [1795], in-8°.

LS : *Essai sur la vie de Sénèque le philosophe, sur ses écrits, et sur les règnes de Claude et de Néron. Œuvres complètes de Diderot*, p. p. Roger Lewinter, t. XII, Paris, Le Club Français du Livre, 1771, in-8°.

(2) 第2版系の諸版本

CN : *Essai sur les regnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Séneque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe*, Londres [Bouillon], 1782, 2 vol., in-12.

N : *Essai sur les règnes de Claude de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe. Œuvres de Denis Diderot*, p. p. Jacques-André Naigeon, t. VIII et IX, Paris, Desray, 1798, in-8°.

B : *Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe. Œuvres de Denis Diderot*, t. VI, Paris, Belin, 1819, in-8°.

D : *Vie de Sénèque, ou Essai sur les règnes de Claude et de Néron, par Diderot*. Nouvelle édition enrichie de notes par Naigeon, Paris, A. Delalain, 1820, in-12.

BR : *Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe. Œuvres de Denis Diderot*, t. XI et XII, Paris, J. L. J. Brière, 1821, in-8°.

AT : *Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe. Œuvres complètes de Denis Diderot*, p. p. J. Assézat [et Maurice Tourneux], t. III, Paris, Garnier frères, 1875, in-8°.

LCN_2 : *Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque*, p. p. Roger Lewinter, Paris, Bibliothèque 10/18, 1972, 2 vol., in-12.

以上が現在までに刊行されている『セネカ論』のすべての版本である。このなかでディドロの生前に出版されたのは，SとCNの2版本にすぎない。しかしS系列，CN系列それぞれの内部においても，後続諸版本は，SとCNにたいして，それぞれかなりの異同を示している。

CN系列においては，特にBRがCNの編者ネジョンの注を新たに収録し，その点でBRがその後現在にいたるまでの諸版本のテクストを決定したということができる。

なお上記の諸版本に続いて，CN系の次の版本が近く刊行される予定である。（前掲 LCN_2 は，この LCN_1 の普及版であって，注の大部分——出典の指示——が省略されている。）

LCN_1: *Essai sur les règnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les écrits de Sénèque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe. Œuvres complètes de Diderot*, p. p. Roger Lewinter, t. XV, Paris, Le Club Français du Livre.

付論　翻訳　『セネカ論』の翻訳としては，私の知る限り次の3つのドイツ語訳が存在する。

(1) *Übersetzung einer Stelle aus des Herrn Diderot Versuch über die Regierungen des Claudius und Nero, nebst einigen Gedanken über dieselbe*, in *Das Journal von Tiefurt*, 27. Stück septembre 1782 [匿名で発表されるが，訳者は Prinz August von Gotha].
[上掲翻訳の再版] *Schriften der Goethe-Gesellschaft*, VII, von Eduard von der Hellen, Weimar, 1892, S. 193 ff.

(2) *Leben des Seneka, nach Diderot*, von F. L. Epheu [Garlieb Hankerの偽名], Dessau und Leipzig, 1783, petit in-8°.

(3) *Essay über die Herrschaft der Kaiser Claudius und Nero sowie über das Leben und die Schriften Senecas—zur Einführung in die Lektüre dieses Philosophen.* Denis Diderot, *Philosophische Schriften*, aus dem Französischen übersetzt von Theodor Lücke, Bd. II, Berlin, Europäische Verlagsanstalt, 1967, in-8°.

(1) アウグスト・フォン・ゴータ訳——私はこの翻訳と，(2)のエーフォイの翻訳とを参照することができなかったが，ロラン・モルティエ『ドイツにおけるディドロ

(1750年—1850年)』(1950年) が両者にかんして詳細な説明を与えているので，以下にこれを紹介する[1]。

アウグストの翻訳は，『セネカ論』第2版の「ディドロとルソーとの争いに関係する部分」(第1巻§.61—§.67) を訳したものである。この抄訳は，アウグスト王子周辺の貴族階級仲間の雑誌『ティーフルト日報』(1782年9月) に，彼自身の序文と解説をつけて発表された。(なおこのあとに，ルソーからディドロあての手紙2通と，ルソーからマルゼルブあての有名な手紙4通の翻訳をそえている。)

アウグストにこの翻訳と解説のペンをとらせたのは，『セネカ論』第2版のなかで，ディドロがルソーにはげしい攻撃を加えているのを読んで，内心に起こってきた「自分の英雄〔ルソー〕を弁護したい」[2] というやみがたい欲求であった。しかし彼は，ルソーの崇拝者であると同時に，ディドロの愛好者でもあった。だから彼は，ディドロのルソー非難——ルソーは独創的思想家ではない，セクトの首領になっている，孤独な生活で人間が悪くなった，矛盾した言説をはく，「好色小説〔『新エロイーズ』〕」を書いた，など——を逐一反駁すると同時に，ルソーの非とすべき点，特に晩年の狂気をはっきり認めている。さらに2人の周囲にいる悪意ある人間たちの告げ口が，2人の関係を悪化させたと主張する。作者は最後に，ディドロがもし自分の説明をきいてくれれば，彼は即座にルソーの墓地にかけつけ，「バラの花と月桂樹を捧げ，墓を涙でぬらす」[3] に違いないと断定している。アウグスト・フォン・ゴータのこの翻訳と解説は，死んだルソーとディドロとを和解さす試みであった。

(2) エーフォイ訳——エーフォイは，アウグスト・フォン・ゴータとまったく違った立場に立つ。モルティエは，この翻訳を，「ディドロに敵意を抱いたエーフォイが，〔原作に〕完全に手を加え，大量に注をつけた縮訳版」[4] と性格づけている。モルティエによれば，訳者は長文の序と，多数の注のなかで，ディドロにはげしい攻撃を加えているという。訳者がディドロにたいして特に許せなかったのは，「善良で愛すべき J.-J. ルソーにたいする，どの点からいっても不正で卑劣な攻撃」[5] (エーフォイ) であった。怒りにかられた訳者は，原作からルソーを非難した部分——「非人間性と人間嫌いの記念碑」(エーフォイ) ——を削除してしまう[6]。

原作の改竄はそれだけにとどまらない。モルティエによれば，訳者は上記の削除以外にも，原作の対話体を普通の敍述体に変えたり，筋の順序を逆転したり，章の構成を変更したりしているという。さらに訳者は，ディドロの考えが，専門家たちの説と

1) R. MORTIER, pp. 200—203.
2) *Ibid.*, p. 201.
3) *Ibid.*, p. 203.
4) *Ibid.*, p. 431.
5) *Ibid.*, p. 205.
6) *Ibid.*

矛盾している場合には，「断わらずに原文を修正した」（エーフォイ）とさえいっている[1]。

したがって，われわれは「ほんとうのところ，ここでは翻訳ではなくて，翻案が問題なのである」[2] というモルティエの断定を承認せざるをえないであろう。

(3) リュッケ訳——これは，AT 版を底本とした『セネカ論』第2版の全訳である。ただし，AT版は第2版 CN が含むディドロとネジョンの注以外に，テクストの解明に不可欠なブリエール，アセザの注を含んでいるが，リュッケはこれら4種類の注を，相当数省略している。

(4) その他の，アセザの調査による翻訳書——アセザは，ウタンジェ『伝記的書誌』を調査した結果，次の2種類の独訳が存在するという[3]。

——Garlieb Hanker の翻訳，Dessau, 1788, in-8°.

——F...L...Epheu という仮名訳者の翻訳，Leipzig, in-8°.

アセザが伝える情報と先に紹介したモルティエの主張とは若干食い違うようであるが，エーフォイ（すなわちハンカー）の訳が2種類の形で発行されたという可能性は充分考えられる。ただし，モルティエが伝える エーフォイの翻訳は，Leipzig, 1783 であり，依然として疑問は残る。しかし，私は現在これ以上のことを調査する手段をもっていない。

アセザは，さらに Eusèbe Salverte が，共和国9年（1801年）に M. Ducket による英訳の刊行を予告したむね伝えている[4]。しかし，これについても今のところ，詳細は不明である。

第2章　『セネカ論』初版—第2版比較テクストの編纂

比較テクスト　私は，S と CN とを比較する基礎資料として，両版の対照テクスト，あるいは比較テクストとも称すべきものを編纂し，次の形で刊行した（冒頭に略号を掲げる）。

HN:　Denis DIDEROT, *Essai sur Sénèque*—Texte comparé de l'édition de 1778: *Essai sur la vie de Séneque le philosophe, sur ses écrits et sur les regnes de Claude et de Néron*, et de celle de 1782: *Essai sur les regnes de Claude et de Néron, et sur les mœurs et les*

1) *Ibid.*
2) *Ibid.*, p. 204.
3) ŒTTINGER, *Bibliographie biographique*. AT, t. III, p. 7.
4) *Ibid.*

écrits de Séneque, pour servir d'introduction à la lecture de ce philosophe, avec une présentation, des notes et des relevés de variantes, par Hisayasu Nakagawa, t. I et II, Tokyo, Librairie Takeuchi, 1966—1968.

正確な文献資料の提供を目的として，ある版本を刊行する際，その異本文をも巻末の注，あるいは脚注の形で，同時に採録することは，従来から原則的に行なわれていることである。しかし，私が当面の主題として扱うSとCN間におけるような大規模な改訂を問題にする場合には，たんにS，あるいはCNを基礎テクストとし，これにたいする異本文を，脚注，あるいは巻末の注として採録したのでは，注が繁雑すぎて，資料としての実用的価値はとぼしいといわざるをえない。2つ，あるいはそれ以上のテクストを比較検討するための基礎資料として，まず要求されるものは，その実用的価値——具体的にいえば，テクスト相互間の異同が，視覚的に一挙に把握しうるという性格——である。

このような実用的価値を根本原則として編纂された，文学作品の比較テクストの試みとして，われわれは，戦前すでにガブリエル・ルルゥーの手になる『ボヴァリー夫人』の，初稿から完成稿にいたる諸段階の原稿の比較テクストをもっており[1]，また戦後には，フィリップ・ヴァン・ティーゲムによるルソー『告白』の「ジュネーヴ原稿」と「ヌゥシャテル原稿」との比較テクストとを所有している[2]。

1) *MADAME BOVARY—Ebauches et fragments inédits recueillis d'après les manuscrits*, par Gabrielle Leleu, Paris, Louis Conard, 1936.
この版本は，ルーアン図書館所蔵の3種類の『ボヴァリー夫人』の原稿——(一)下書き（最高12段階の書き直しがある），(二)自筆稿（前の⅔は書きこみ，削除が多く，後の⅓はきれいな清書），(三)筆記者による完成稿（1856年10月から12月にかけて，6回にわたり『パリ評論』に連載された際の底稿）——を，まとめて比較している（コナール版『全集』所収『ボヴァリー夫人』との異本文をも同時に指摘し収録する）。
ページ内の諸テクストの配列様式は，ルイ・コナールの発案になるものであって，記号と，活字の字体の変化によって，6種類の性格を異にする文章を区別し，同一行上に順次印刷している。
私の「比較テクスト」では，直接の比較対象は2種類であったから（ただし，CNにたいする後続諸版本の異本文は別に処理する），このような逐次的印刷方法をとらず，ページの左と右の2欄に，2つのテクストをそれぞれ配分することを試みた。比較対象が2つの場合は，私の採用した方法が，——印刷空間は余分に必要であるにせよ——視覚的により明瞭だと考えられるからである。ただし，比較対象が多数になる場合は，コナール方式によらざるをえまい。

2) J.-J. ROUSSEAU, *Confession I-IV—Texte définitif du manuscrit de Genève avec les variantes du manuscrit de Neuchâtel*, par Philippe van Tieghem, Paris, Centre de Documentation Universitaire, 1957.
『告白』第4巻の約¾（1730年の出来事まで）のところで放棄された「ヌゥシャテル原稿」と，

私が作製したディドロ『セネカ論』の「S—CN 比較テクスト」（以下「比較テクスト」と略称する）は，このヴァン・ティーゲムの試みに教えられるところが多かったが，処理すべき問題は，さらに複雑であった。以下に「比較テクスト」編纂に際して解決せねばならなかった諸問題，および編纂の方針についてのべておきたい。

Sに加えられた4種類の変更　CN は，Sにたいして次の4種顔の変更が加えられて成立したものと考えられる。

(1)　Sに存在しなかった語，句または節の付加。

(2)　Sに存在していた語，句または節の削除。

(3)　Sに存在していた語，句または節の変更。

(4)　Sの文脈の変更——Sの語，句または節の，別の箇所への転移。

もちろん，(4)は原則的には，(3)の分類中に編入されるべき種類の変更ではあるが，テクストの視覚的把握を容易にするという記載上の方針から，私は特に(4)の分類をもうけた。

このような本文および注本文の4種類におよぶ変更に応じて，巻，章，ページおよび注に付せられた番号の変更が同時に生じてくるのであるが，これらもまた本文内容の変更の分類に準じて，4種類に区分した。

基準テクストの選択　ところで，「比較テクスト」作製に際して，まずとりあげねばならないのは，SとCN両者のうち，どちらを基準テクストとして採用すべきかという問題である。もちろん，ディドロの創作の時間的順序に従え

『告白』の決定稿「ジェネーブ原稿」とを対照したテクストがこれである。
ページ左欄に，基準テクストとして「ジュネーヴ原稿」（略号 MC）を印刷し，右欄には「ヌゥシャテル原稿」（略号 MN）のうちで，基準テクストと異なる部分のみを，次の4種類の記号によって表示している。

左欄（MC）	右欄（MN）	異本文の内容
[……]	[……]	語句の変更
[……]	[—]	MC の語句，MN 中になし
／	／……	MN の語句，MC 中になし
[……]	[(……)……]	MN の括弧内の語句（第一段階）が，括弧外の語句（第二段階）に訂正される——ついで MC で変更

ただし，次の変化は顧慮されていない。——㈠句読点の相違。㈡改稿にともなって生じた句読点の相違。㈢大文字と小文字の相違，および句読点の変化にともなう大文字と小文字の変化。㈣改稿にともなって必然的に生じた形容詞，動詞の形態上の変化。㈤正字法の相違。
なお，ルルゥー，ヴァン・ティーゲム以外に私が教えをうけた研究は，渡辺一夫『ラブレー研究序説』，東京大学出版会，1957，をはじめとして，数多く存在するのであるが，ここでは，私が採用した方法にもっとも遠いものと，もっとも近いものとをあげるにとどめた。

ば，まず1778年のSが生まれ，これが発展して1782年のCNになったものであり，したがってその基準点がSにあることはいうまでもない。しかし私は，次にのべる諸点を顧慮して，CNを基準テクストに採用した。——㈠『セネカ論』の後続諸版本N，BRおよびATにおいて，底本となっているのはいずれもCNであり，したがって，この「比較テクスト」をもとにして『セネカ論』を検討する場合，これらの版本への関連づけが容易でなければならない。㈡上記4版本は，同一内容をもつべきであるにもかかわらず，テクスト相互間に食い違いがあり，現在にいたるまでなおその校訂版は刊行されていない。したがって，この「比較テクスト」がある種の存在価値を主張しうるためには，同時にCN系諸版本間の異本文をも採録しなければならないだろう。そのためにも，基準テクストはCNでなければならない。㈢以下にのべる私の採用した印刷様式において，もしSを基準テクストとした場合は，ページの基礎的部分（ページの左欄）に大きな空白ができ，通読することが非常に困難になる。テクストとしては，通読が容易であることが望ましい。

ページ内におけるSとCNとの配置　私はこの基準テクストCNの全体を，ページの左欄（正確には左欄および中央におよぶ部分，ページ全体の約⅔を占める）に印刷した。資料的価値をそこなわないために，基準テクスト中にたとえ誤謬が存在する場合でも，これをそのまま印刷し，私の脚注で指摘しておいた。「比較テクスト」のページ数とCNのそれとは，いうまでもなく一致しないから，後者は大括弧内にゴシック体で記入し，基準テクスト本文中にあるCNページ冒頭の語の前に挿入した。

これにたいして，Sにはページの右欄（ページの約⅓）をあて，Sの全文ではなく，CNと相違する部分のみを，印刷する（したがって，Sは断片的にあらわれる）。Sにみられる誤謬の扱いは，CNの場合となおじである。Sにおけるページの区切りは，Sの全文が印刷されていない右欄中に表示することが不可能であるから，左欄のCN本文中，相当箇所に縦の2本線を挿入してこれを指示し，そのページ数は該当2本線が存在する同一行上，右欄の左はしに印刷した。また，Sの本文中にあらわれる注番号は，基礎テクストの相当箇所と同一行上，右欄の右はしに表示する。

ただし，Sの章番号（ならびにSとCNとの巻数の相違）のみは，基礎テクストCNにあてられた左欄の左欄外に印刷した。これは，SとCNとの章構成

の差異を検討する際の比較を容易にするという実用的顧慮に基づく。

SとCNとの注本文は，もとの形では前者が各ページ下部に，後者が巻末に，それぞれ印刷されているが，この「比較テクスト」では，CNの方式を踏襲する。ページ内でのSとCNとの配置は，本文の場合の原則にそのまま従う。

ただし，Sの注の冒頭におかれていた注番号は，この巻末の注においては，S本文中の章番号に準ずるものとして扱い，左欄の左欄外に表示する[1]。

本文中に使用した記号と表示法 (1) 左欄のテクストCNにおいて，語，句または節をかこむ記号＜　＞，および右欄のテクストSの部分にあらわれた記号＜—＞は，CN中の該当語，句または節がS中に存在しておらず，CNにいたって付加されたものであることを示す。

(2) 左欄のテクストCNにあらわれた記号＜—＞，および右欄のテクストSにおいて，語，句または節をかこむ記号＜　＞は，S中に存在していた該当語，句または節が，CNにいたって削除されたことを示す。

(3) 左欄のテクストCNにおいて，語，句または節をかこむ記号〔　〕と，右欄テクストSにおいて，語，句または節をかこむ記号〔　〕は，S中の該当語，句または節が，CN中の該当語，句または節に訂正されたことを示す。

(4) 左欄のテクストCNにおいて，語，句または節をかこむ〔　〕*，および，なおじくCN中にあらわれてこれと対をなす記号〔*〕は，Sにおいては，該当語，句または節が，記号〔*〕の存在する箇所におかれていたことを示す。すなわち，Sの文脈に変更が加えられた場合がこれに相当する。——それと同時に，右欄のテクストSの部分にも，この対をなす記号を（左欄で〔　〕内に記入されていた語，句または節を省略して）印刷した。

もしS中のある語，句または節が，CNの同一ページ上ではなく，別のページ，あるいは時として別の巻に移されている場合は，右欄の〔　〕*および〔*〕のあとにそれぞれ括弧をつけ，対記号が存在する箇所の，巻およびページを記入する。

本文中の注番号に使用した記号と表示法 (1) 一般に，本文中に使用した記号と表示法をそのまま適用する。ただし，注番号の場所の移動にかんしては，右欄の右はしに〔　〕*および〔*〕の対記号を印刷することをさけた。実際上，

1) 以上のべた，ページ内におけるSとCNとの配置を，左から順次示せば，次の通りである——㈠Sの章番号（巻末の注では注番号），㈡CNの本文，㈢Sのページ番号，㈣Sの本文，㈤Sの注番号。

特にその必要があると考えられないから，繁雑さを回避した。

(2) 左欄テクストにおいて，注番号をかこむ記号≪　≫，および右欄右はし，Sの注番号部分にあらわれる記号≪—≫は，CN中に存在する該当注全体が，S中に存在しておらず，CNにいたってはじめて付加された注であることを示す。

(3) SとCNとの注番号が一致している場合でも，これを右欄の右はしに印刷して，検索の便を顧慮した。

章番号に使用した記号と表示法 (1) 一般に，本文中に使用した記号と表示法とをそのまま適用する。

(2) 左欄テクストCNにおいて，章番号をかこむ記号≪　≫，および左欄の左欄外にあらわれる記号≪—≫は，CN中に存在する該当章の本文全体がS中に存在しておらず，CNにいたって新たに付加された章であることを示す。

(3) 左欄のテクストにあらわれた＜†＞，および左欄の左欄外において，章番号をかこむ記号＜　＞は，S中に存在していた該当章区分が消滅したことを示す（ただし，章区分の消滅であって，その章内容をなす本文は削除されていない）。

(4) 注番号の場合に準じて，SとCNとの章番号が一致している場合でも，これを左欄の左欄外に印刷した。

「比較テクスト」において特に指摘しなかった両版本間の相違点 この「比較テクスト」において，Sにかんしては，CNと相違する部分だけが印刷された。したがって，ページ右欄の空白部分は，すべて左欄に印刷されたCNに合致しているとみなされるべきである。ただし，次にあげる相違点だけは，特に指摘しなかった。

(1) 大文字と小文字との使用法の相違。（Sにおいては，普通名詞の綴りの最初に，大文字が使用されている場合がある。）

(2) 句読点の相違。（SとCNとにおいて完全に同一な文章にあっても，時として句読点が違っている。Sにおける句読点の使用法は，CNにくらべてより恣意的であり，特に人物の発言を指示する引用符の使用法にこのことがいちじるしい。この種の引用符は，CNにおいてすらなお非常に不完全であり，後続の諸版本N, BRおよびATの各編者の手で，順次整備されていく。）

(3) 正字法の相違。（固有名詞，およびその他の語に系統的な綴りの違いが

見られる。)

(4) 段落の区切り方。(S中の節の削除，およびSへの節の付加が行なわれた場合に限って，CN中の段落の区切りが，Sのそれと違ってくる場合がある。)

(5) 印刷上の体裁の相違。

以上5種類の変更を，もし完全に網羅しようと思えば，SとCNとの相違点を全部列挙するか，それとも両テクスト全体を並列的に印刷するか，どちらかの方法をとらざるをえない。しかしその場合は，いずれにしても，私が最初に強調した実用的価値は，失なわれていくだろう。もちろん，実用的価値は，資料としての厳密な正確さという，より高次の価値に従属すべきであることは，ここであらためて断わるまでもない。もし，私の「比較テクスト」がディドロの原稿に直接依拠して作製しえたものであれば，私は躊躇なく，今いう実用的価値をも犠牲にしたことであろう。

しかし，ディドロ生前の刊本SとCN，およびこれと同一の編者ネジョンの手になる次の版本Nの3者を比較検討してみると，大文字，句読点ならびに正字法の使用法が，まったく編者（あるいは印刷者）の自由裁量に委ねられていることが明らかであるから，これを顧慮しなかった。また，段落の区切り方は，ディドロの指示にそのまま従ったと考えられるが，SとCNとのこの種の相違が，両者の意味内容に，非常に大きな変更をもたらしうるとは考えがたいから，これもまた特に指摘しなかった。

したがって，以上の諸点を考慮の外におけば，この「比較テクスト」のページの左欄（CN）と右欄（S）（正確には，右欄と左欄の左欄外）とを対照することによって，Sをほぼもとのままの形に再構成しうるはずであり，同時にSからCNへの変更の実情が，一見して容易にとらえうるはずである。私のめざすところはこれにつきる。

『セネカ論』中のラテン語からの翻訳箇所　この「比較テクスト」中において，SとCNとの句読点にかんする相違は無視するといったが，これにはひとつ例外がある。それは，ディドロがSおよびCNにおいて，主としてタキトゥス『年代記』から，また時にスエトニウス『12皇帝列伝』から翻訳を行ない，これを本文中に挿入している場合である。その際ディドロは翻訳箇所の前後に引用符をつけているのであるが，SとCNとを比較してみると，概してS中の

引用符のほうが，より正確に原典からの翻訳箇所を指示している。したがって，この場合に限り，SとCNとの引用符の相違を指摘した。もちろん，タキトゥスおよびスエトニウスの原典とディドロの翻訳箇所とを照合してみると，Sにおける引用符の使用すらも，なお正確さを欠いているのであるが，CNよりも，より正確だという意味で，これを指摘した。

なお，ディドロがタキトゥス，スエトニウスおよびその他のラテン作家から翻訳して引用した場合，また彼らに叙述の素材をえた場合は，すべてSおよびCNの注に明記してある（注からもれているものにかんしては，できうる限り私の脚注で示しておいた。ただし，CNの注においては，上記2つの場合を区別せず，たんに原典名および巻，章を記載するのみであるが，Sの注では両者が区別されており，たんに素材だけをラテン原典に借りた場合には，原典名の前に «Voyez» の指示が付せられている。

この翻訳箇所の問題にかんして一言つけ加えれば，ディドロがラテン原典から翻訳した部分を全部指摘することは，原典との照合によって可能であると考えられるかもしれない。しかし，ディドロの翻訳は，最初のシャフツベリ訳以来，常に自由訳とも称すべきものであり，この『セネカ論』においても，彼の翻訳は，その翻訳態度に応じて，次のごとく性格を異にするものを含んでいる。——㈠原文の大意をくんだ訳。㈡原典の一部を省略した訳。㈢原文のなかに，ディドロ自身のことば（主として，原典でのべられている事態にたいするディドロの主観的感慨の表白）をおりこんだ訳。㈣原典の文章の順序をいれかえた訳。㈤原典の2箇所をまとめて，その大意をくんだ訳。

したがって『セネカ論』中の翻訳部分を指摘するためには，まずどの次元までのものを，いわゆる「翻訳」とみなすかという原則を決定しておかねばならない。それゆえ，これをたんなる引用原典の指示問題として処理することが不可能であったから，この「比較テクスト」では，これに触れることをさけた。『セネカ論』におけるディドロのラテン原典翻訳問題は，フォルキエルスキーが，「ディドロの英語」で，その英語翻訳問題を扱かったごとく[1]，別箇のひ

1) W. FOLKIERSKI, *L'anglais de Diderot*, dans la *Revue de littérature comparée*, avril-juin, 1960.
従来，ディドロの思想形成の出発点は，SHAFTESBURY, *An Inquiry concerning Virtue or Merit* にたいしてなされた自由訳——*Les Principes de la philosophie morale ou Essai sur le mérite et la vertu par Mylord S****, Amsterdam, 1745, 1 vol., petit in 8°.——のうちにあると考えられ，それ以前に彼が試みた次の2つの翻訳（特に前者，スタンヤン『ギリシャ史』）は，ディドロの思想展開史とかかわりのない，たんなる金もうけ仕事であり，したがって精密な検

とつの主題を形成するであろう。

CNにたいするN, BRおよびATの異本文 CNを底本とした後続諸版本としては，現在までのところN, B, D, BR, AT, LCN_2が存在する。このうちで厳密な校訂をへて出版されたテクストは，N, BR, ATであるから，私はCNにたいするこの3版本の異同を「比較テクスト」に採録する。その際，まず最初に考慮しなければならないのは，N, BRおよびATがそれぞれ印刷された時，各編者は1782年に印刷されたCNに依拠したのか，それとも同時にCNの原稿そのもの（自筆稿あるいは筆記者に清書させた写稿）をも参照したのか，という問題である。

Nを刊行した際のネジョンについては，いずれとも決定しがたい[1]。ブリエ

討に値しないものと断定され，これらを無視することが定説化していた。——*Histoire de Grèce, traduite de l'anglais de Temple Stanyan*, Paris, Briasson, 1743, 3 vol., in 12; *Dictionnaire universel de médecine, de chimie, de botanique, d'anatomie, de pharmacie et d'histoire naturelle, etc.*, ..., précédé d'un *Discours historique sur l'origine et les progrès de la médecine, traduit de l'anglais de M. James par MM. Diderot, Eydoux et Toussaint, revu et augmenté par Julien Busson*, Paris, 6 vol., in folio.

当然ながら，ネジョンにはじまり，アセザとトゥルヌゥをへて，最近のレヴァンテールにいたる正統なすべてのディドロ全集において，ディドロの最初の作品として収録されているのは，シャフツベリの翻訳である。これら全集の編集者の，上記2翻訳にたいする共通の評価は，アセザートゥルヌゥ版編者が，スタンヤンの翻訳についてくだした断定——«ouvrage oublié et digne de l'être» (AT, t. I, p. XL, note 1.)——に要約されうるだろう。

この定説化した偏見を最初にうちこわし，のちに豊かに開花するディドロの思想の重要な萠芽を，特にディドロの最初の翻訳のうちに発見した功績は，デデイヤンのソルボンヌ講義（1957—1958年）に帰されねばならない。——DEDEYAN, *L'Angleterre dans la pensée de Diderot*, Centre de Documentation Universitaire, 1958.

フォルキエルスキーの上掲論文は，デデイヤンが最初に指摘したこの道を，さらに先まで開拓したものである。彼は，今後新資料が出現する可能性はあっても，その蓋然性はきわめて低い，1732年から1742年にいたるディドロの思想形成史の暗黒部分を照らしだすことを意図している。しかし，この論文の事実上の主題をなすものは，デデイヤンの場合とおなじく，ディドロ訳『ギリシャ史』の一部におけるディドロの翻訳表現の検討であって，ディドロの訳文の個性的特徴，省略，付加，誤訳，およびこれらの特色を生みだした要因などが概観されている。これらの考察が，ディドロの思想形成史全体のうちに綜合されるのは，なお今後の問題であろう（フォルキエルスキーが，この論文を «ce premier chapitre d'une vaste étude» とよんでいる箇所があるから，彼自身このことを直接意図した著書を準備しているのかもしれない。

一般に，ディドロの翻訳（英語もラテン語も含めて）と，その思想形成との関連は，きわめて重要な研究課題をなすものであると私は考えるのであるが，ラテン原典翻訳問題にかんする研究は，私の知る限りいまだに皆無である。

1) ネジョンが，N中でCNの原稿に言及している箇所は皆無である。

現存の，ネジョンが作製したディドロの原稿目録（一枚の用紙の表裏に書かれており，若干の作品名のあとに «mss.» の記入がある）——*Ordre dans lequel on pourrait ranger les ouvrages de Mr. DIDEROT* (H. DIECKMANN, *Inventaire du fonds Vandeul et inédits de Diderot, pp.* 167—169)——の表ページ第2行目に «Vie de Sénèque» の記載がある（表題のあとに «mss.» の記入がないから写稿であろう）。もちろん，この表題だけからは，この写稿がSのそれか，CNのそれかを決定することができないが，『セネカ論』の決定版はCNであり，N自体も，Sではなくて CNを収録しているという点たら見て，これがCNの写稿と考えるほうが自然であろう。

ところで，ディークマンが精密に考証しているように，この目録の内容と，ネジョン編『ディドロ

ールは，少くともネジョンが『セネカ論』の注として用意していた原稿類は手に入れていたと推測できるが，ディドロのCN原稿そのものを参照しえたかどうかは，まったく不明である[1]。最後のアセザは，恐らく原稿に目を通す可能性をもたなかった，と推測されるが，これにかんしても確定的証拠はない[2]。

このように，CN原稿そのものについては，現在ほとんどなにも語ることができない。しかし，原稿によるにせよ，1782年の刊本によるにせよ，とにかくN, BRおよびATの3版本がCNに依拠していることに変りはないのである。CNにたいするこれら3版本の異本文にかんする脚注はすべてアルファベットで，その他の脚注は数字で指摘する。ただし，次の相違点は顧慮しない。——㈠大文字と小文字。㈡句読点。㈢正字法。㈣段落の区切り方。㈤印刷上の体裁。（これらはいづれも，編者の自由裁量に委ねられたために生じた相違か，それとも本文の意味内容に重大な変更をもたらさない相違であると考えられるから，とりあげなかった。）

S, CN, N, BRおよびATの注の処理　注の総数は，SからATにいたるまで順次増大していっている。特にBRおよびATでは，それぞれの編者がつけ

著作集』の所収作品とは，完全には一致していない（*Ibid.*, pp. 155—156）。つまり，全集編集の時期と目録作製の時期とは一致していない，と考えざるをえないのである。したがって，この目録を根拠に，ネジョンがNを刊行した際，CNの原稿を手にしていたと推測することは不可能である。

逆に，ネジョンが全集準備の時期に，写稿を所有していなかった，と仮定しよう。——その場合，写稿はヴァンドゥル夫人の手もとにあったはずである。

ヴァンドゥル夫人の作製した目録（所載作品中には，«manuscrits»の記入をもつものがある）——*Liste des ouvrages de mon père* (*Ibid.*, pp. 169—173)——には，«No. 38 Essai sur Sénèque»（写稿）の記載がある。さらに，筆記者がこの目録を補訂作製した目録（«mss.»の記入をもつ作品も含まれる）——*Liste des ouvrages de M. DIDEROT* (*Ibid.*, pp. 173—177)——にも«No. 38 Essai sur Sénèque»（写稿）の記載がある。したがって，ヴァンドゥル夫人が，ある期間CNの原稿（写稿）をもっていたことは確実であるが，それがいつのことなのか，またその間のいつ，これらの目録が作製されたのか，まったく不明である。

しかし，今ネジョンがNの刊行準備中に，このCNの写稿が，夫人の手もとにあったと仮定しよう。その際，ネジョンは夫人のもとにあるCNの写稿を参照しえたであろうか。情況証拠は否定的である。両者の関係は，当時すでに悪化しており，こういう可能性を考えることはできない（筆者の小論『ディドロの3原稿群の歴史，名古屋大学教養部『紀要』第6輯，pp. 138—139, pp. 141—142）。

1) BRの«Avertissement des nouveaux éditeurs»の末尾に，次のごとく書かれている——«Il nous reste à faire connaître que nous avons eu le soin [···] d'enrichir notre édition d'un grand nombre de notes inédites de Naigeon.» したがって，ブリエールは，なんらかの，現在では不明の径路から，ネジョンの原稿（CNへのネジョンの注）を手にいれていたことは明らかである。しかし彼が，BRを準備している時期までヴァンドゥル家にCNの写稿が存在していたかどうかは不明であり，また存在していたにしても，ブリエールがこれを参照したかどうかは不明である。ブリエールがこれに言及していないところをみると，否定的推測をくださざるをえない。

2) 上の注の後半と同じ理由が，アセザにもあてはまるから，これにも否定的推測をくださざるをえない。

た注が相当数にのぼっている。

「比較テクスト」本来の目的は，SとCNとの比較にあるのだから，編者としてはSとCNとの注（あるいはこの両者と，同一編者ネジョンの手になるという理由で，Nに新たに付加された注も加えて）だけを採録し，N, BR およびATの注のこれにたいする異本文だけを指摘すれば，それで充分だと考えられるかもしれない。しかし私は，N, BR およびAT中の注のなかに，『セネカ論』研究に逸することのできない貴重な資料が多数含まれていることを考慮して[1]，これらすべてを「比較テクスト」中に収録した。現在普通に手にすることができるATに，もしこれらの注が全部いれられているなら，これも余計な試みであるといえるかもしれないが，現実には少なからぬ注がATで省略されているのであるから，あえてこの方針をとった。

各版の注を採録するに際しては，次の方針をとった。

(1) SとCNとの注は，先にのべたように，各巻末に印刷し，かつその相違箇所は，本文における相違の表示法によって記載する。

(2) そのあとに次の3種類の注を順次印刷する。——㈠Nではじめて付加された注。㈡ BR ではじめて付加された注。㈢ AT ではじめて付加された注。

(3) SとCN以外の版本で新たに付加された注であっても，その内容がSとCNとの異同にかんするものであり，かつそれが，この「比較テクスト」自体によって明らかにされうる場合に限り，これを削除した。ただし，どの版本のどの注を削除したかは「比較テクスト」の脚注に明記した。

(4) 各版本を通じて同一の注に付せられた注の筆者名の指示に非常な混乱がある。したがって，この「比較テクスト」では，各注のはじめにその注を収録している版本名，およびそのあとの括弧内にその版本で指示されている筆者名を，SからATにいたるまで，それぞれ略号で示した。また，ある版本中に，その注が欠如している場合はSからATにいたる略号表示中，その版本名があらわれるべき場所に，記号—をおいた。また，注がディドロの使用した原典の指示である場合に，ある版本中では，これが独立の注としてではなく，本文中におかれていることがあり，この場合は版本名と筆者名の略号とをイタリック

1) CNは，初版Sにたいする批判への応酬を含んでいるが，具体的にCN中のどの箇所が，当時のどの批判文書の，どの箇所への返答であるかを全般的に調査し，これを注，および「緒言」で示したのは，ブリエールの功績である。この分野にかんする限り，アセザが新しい調査結果を加える余地はほとんどなかった。その点で，ATがBRの注の若干を省略しているのは遺憾である。

体においた。

(5) ある版本における注が，後続諸版本の注と，なんらかの相違を示している場合（付加，削除を含む——ただし独立した注の付加は(2)にすでに含まれる）は，後者をその注の異本文として脚注に示した。また脚注に印刷された付加文が，筆者名指示をもっている場合は，先の(4)の原則に従って記載することにした。

今後の問題 私が作製した「S—CN 比較テクスト」は，今までのところ S, CN それぞれにかんしてもっとも厳密な校訂テクストといえるはずであるが，なお次のような問題点を残している。——(一)基礎テクストにたいするディドロの自筆稿2断片の異同が採録されていない。(二)S系統の2版本，L, LS の異同が採録されていない。(三)CN 系統の B, D および近く刊行予定の LCN の異同が採録されていない。

私は現在，クレルモン・フェラン大学の Jean Ehrard 教授と協力して，これらの残された問題を解決した，新しい S—CN 比較校訂版を編纂中であり，これは，ハーバート・ディークマン，ジャン・ファーブル，ジャック・プルーストを監修者として目下刊行準備中の『ディドロ全集』の一巻として出版される予定である[1)]。

したがって，この論文においては，いうまでもなく HN を底本として使用する。その際 S, CN からの引用ページ数は，S, CN および HN によって示すが，それと同時に一般ディドロ研究者の便宜を顧慮して AT のページ数をも記載する。

第二部 『セネカ論』初版の意識の構造

第I章 初版の成立

ラ・グランジュの翻訳 ディドロの友人ドルバック男爵は，2度目の妻シャルロット＝シュザンヌ・デーヌとの間に生まれた子どもたちの家庭教師として，1760年以来ラ・グランジュという人物を雇っていた。

1) ***Annuaire internationale des dix-huitièmistes***, 1971 によれば，私たちとは別に，先に紹介した ***Diderot's*** Vie de Sénèque の著者，フロリダ大学の Douglas A. Bonneville が CN の校訂版を準備中とのことである。ただし私たちの試みは，S-CN 比較校訂版であって，CN だけの校訂版ではない。

ラ・グランジュは，一時ボーヴェ中学校の教師をしたことのある，古典語・古典文学に深い造詣をもった青年だった。

当時のドルバック邸は，ディドロを中心とする哲学者たちの集会所——「自由思想家，あるいはむしろ極端な自由思想家たちの一種のアカデミ」[1]（ダミロン）——であり，そこにはドルバック，ディドロのほかに，エルヴェシウス，レナル，マルモンテル，サン＝ランベール，モルレ，ガリアニ，ネジョンたちの顔が見られたが，ラ・グランジュはその才能をみこまれて，すぐにこの集まりに加わることを許される。こういう扱いは，当時，一家庭教師にたいしては異例のことであった[2]。

ディドロののちの協力者で，彼の死後正統的な最初のディドロ著作集の編集者になる，ジャック＝アンドレ・ネジョンは，その当時ドルバックの秘書をしていた。ラ・グランジュは，哲学者たちの仲間に加えられると，やがてネジョンと協力して，ドルバックの著述の手助けをするようになり，それとともにディドロからも目をかけられるようになっていく。

間もなく彼は，ディドロとドルバックにすめられ，彼自身の仕事として，ルクレティウス『事物の本性について』のフランス語訳を行なった。グリムの『文学通信』1768年8月15日号は，「公衆の関心を奪った，古典作品2冊の新訳」の第1として，ラ・グランジュが，ドルバック家の家庭教師の仕事の「余暇に行ない，完成した」[3]この翻訳について，詳細な紹介をしている。（「2冊の新訳」の第2は，ラ・ブレトリ神父によるタキトゥス『年代記』の翻訳である。）

なお，この翻訳の一部は，実はディドロが行なったのだという噂が当時流れていたらしく，グリムはこうつけ加えている。「ド・ラ・グランジュ氏の筆以外の筆が，この翻訳に加わっているというのは真実ではない。なるほど，ディドロ氏が，訳者と協力して，印刷前の訳稿に目を通したというのは事実であるが，もし彼がルクレティウスの美しい詩篇の幾つかを翻訳していたのであれば，少しでも鑑識眼のある読者なら誰でもすぐそれに気づいたはずだと思う。」[4] 訳本は大版の豪華本2種類と小型廉価本1種類の形で，書店から発売された。

---

1) Jean-Philibert DAMIRON, ***Mémoires pour servir à l'histoire de la philosophie au XVIIIe siècle***, Paris, Librairie philosophique de Ladrange, 1858, t. I, p. 96.
2) Pierre NAVILLE, ***D'Holbach et la philosophie scientifique au XVIIIe siècle***, Paris, Gallimard, 1967, pp. 103—104 ; pp. 103—104 ; pp. 128—129.
3) CORR LIT, t. VII, p. 151.
4) ***Ibid.***, p. 153.

ラ・グランジュは，やはりドルバックにすすめられて，ルクレティウスのあと，すぐにセネカの著作の翻訳に着手しはじめた。しかし，不幸なことに彼は翻訳を一通り完成すると，訳稿に手を入れる余裕もなく，1775年9月に病死してしまう。ディドロは，『セネカ論』（初版，第2版）のなかで，セネカに呼びかけながら，ラ・グランジュの死を惜しんでいる。「われわれが，なにか偉大なことをなしうるようになった時には，もう人生の歩みは半ばを過ぎてしまっている。そして，あなた〔セネカ〕の著作をフランス人の目の前に示して，彼らにあなたを賛美させようと企てていたひと〔ラ・グランジュ〕は，その仕事を完成する前に死んでしまった。」[1)]

『セネカ論』の執筆　遺稿を前にしたドルバックは，ネジョンに翻訳の完成——訂正，注解，編集——を依頼する。ネジョンは，古代の文学と哲学——特にエピクロス，ルクレティウス，セネカ——にたいして強い関心をもち，同時に古典語にかんする深い知識をもっていたから，この仕事にはまさに適任だった。ただ彼には，自然科学の知識が不足していたので，セネカの自然論である『自然の問題』の注解にかんしては，ドルバックの協力をえることにした[2)]。ディドロは『セネカ論』（初版，第2版）のネジョンへの献辞のなかで，この努力に言及して次のようにのべている。「あなたの毎夜毎夜が，彼〔ラ・グランジュ〕の仕事を補足・注解したり，あるいは多くの箇所で彼の翻訳を原文の真意に近ずけたりして，過ぎさっていく間，われわれの親しいラ・グランジュ〔の魂〕があなたのランプの周囲をさまよっているのが私にはありありと見える。私の耳には彼のことばがきこえてくる。そうだ，はっきりときこえてくる。『未知のひとの見捨てられていた灰を壺のなかにおさめるひとは敬虔な行ないをしたことになる。友人のために，記念碑を建てるひとは，この敬虔に輝きを加えることになる。私の名誉を高めることに専心しているあなたにたいして，私はいったいどれほど多くの恩恵をうけていることだろう』と。」[3)]

ところで，ドルバックとネジョンはラ・グランジュ訳の『セネカ著作集』に注解をつけるだけで満足せず，さらに別冊として，セネカの伝記と作品解説を加えることを計画した。彼らが執筆者に選んだのが，ディドロであった。こうして，ディドロ最後の大作『セネカ論』の初版の執筆が開始されるのである。

1) S, pp. 452—453; CN, t. II, pp. 220—221; HN, t. II, p. 145; AT, t. III, p. 334.
2) P. NAVILLE, *D'Holbach*, p. 129 et note 1.
3) S, pp. (10)—(11); CN, t. I, p. 7; HN, t. I, p. 9; AT, t. III, p. 12.

ディドロの娘ヴァンドゥル夫人の『ディドロ回想録』は，この間の消息を次のように伝えている[1]。

〔ロシアから〕帰国すると父は幾つかの小品に没頭したが，出版はしなかった。ハーグでは，エルヴェシウスの作品〔『人間論』〕を反駁することで心をまぎらせていた。2つの短い小説『運命論者ジャック』と『修道女』，および数篇のコントを執筆した。だが，父にまだ残っていた体力を消耗させ，失わせてしてしまったのは，『クラウディウスとネロの治世論』と，ひとりの友人から依頼された仕事〔レナル神父から依頼された『両インド史』への執筆協力〕だった。父は，セネカが純粋で，正しく，偉大で，セネカ自身の教訓にふさわしい人物であることを確めようと固く決心していたから，この哲学者の名前があげられている本で，彼が読まないものはなかった。

ディドロ自身は，『セネカ論』執筆の状況を回想して，のちに作品冒頭のネジョンへの献辞（初版，第2版）のなかで，こう書いている[2]。

この作品は，私の仕事の，というよりはむしろ私の余暇の，成果である。〔……〕私はその当時，いなかで，ただひとり，気がかりや不安から解放されて暮していた。

事実，ディドロはロシア旅行から帰って以来，パリ市内のタランヌ街の家よりも，郊外のセーヴルに借りた家屋で日を過ごすことが多くなっていたが，『セネカ論』は，もっぱらこのセーヴルの部屋にひきこもって執筆されたのである[3]。

1777年春には，彼が協力したレナル神父の『両インド史』第3版が出版される。それ以後，ディドロが『セネカ論』に専心していることは，ほんのわずかの傍証からではあるが，確かめることができる。

たとえば，ジュネーヴの医師フランソワ・トロンシャンがディドロに送った手紙（推定——1777年6月16日）には，はやくも『セネカ論』への言及が見られる。「私はまた，間もなく出版されるはずのセネカにかんする本をはやく入

1) Mme de VANDEUL, «Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de Diderot». AT, t I, p. LIV,
2) S, p. (1); CN, t. I, p. 1; HN, t. I, p. 5; AT, t. III, p. 9.
3) これは，金銀細工師ベルからディドロが借りたもので，セーヴルに現存しているはずである。André BILLY, *Vie de Diderot*, Paris, Flammarion, édition revue et augmenté, 1943, pp. 380—381. Lester G. CROCKER, *A Life of Denis Diderot*, Michigan State College Press, 1954, pp. 429—430.

手したいと待ちこがれています」[1] と。

これについて，ディドロ『書簡集』第14巻からの編集者ジャン・ヴァルロットは，トロンシャンが1777年初頭のパリ旅行の際にディドロを訪問し，ディドロが彼に，『セネカ論』が「間もなく出版されるはず」だと「軽卒にも」[2]（ヴァルロット）もらしてしまったと推測している。しかしトロンシャンは，このあとなお1年半も待たねばならないのである。

おなじ1777年に，ディドロがネッケル夫人にあてた手紙（日付不明）のなかでも，『セネカ論』の執筆を暗示する次の一節がある。「しかし，私のテーブルの上には，きびしい人物で，ストア派に属する，ある古代の哲学者がいて，私にもうやめるように，あまり喋りすぎないように，と警告しています。」[3]

ディドロが書簡のなかで，『セネカ論』の執筆を暗示しているのは，わずかにネッケル夫人あての手紙のこの1箇所だけである。

1778年6月6日，ディドロは『セネカ論』初版の大部分を，友人ポル＝クロード・ムールトゥに読んできかせる。ヴァルロットは，この事実から，『セネカ論』初版の完成を，この日以前だと推測している[4]。（ただし，7月2日にルソーが死に，明らかにそのあとで追加された部分があるが，これは例外である。）

同年10月下旬，あるいは11月上旬（ヴァルロットの推測）[5]，ディドロはグランヴァルのドルバック邸で，ネジョンあての手紙をしたため，このなかで，『セネカ論』の執筆をすすめ，かつそのための協力をおしまなかったネジョンとドルバックにたいして次のように感謝している[6]。「あなたがた，すなわちあなた〔ネジョン〕と B. d. H.〔ドルバック男爵〕にいつまでも感謝したいのは，〔……〕私の心に限りなく好ましく思える仕事を，私にすすめてくださったことです。」また特に，「〔ディドロ自身の〕仕事ほどには楽しくない仕事」，すなわち『セネカ論』の注解の作製をひきうけてくれたネジョンにたいしては，彼の学識を称賛した上，「学者も善意のしろうとも，ともにあなたの功績を高く評価した」と記録している。

1) CORR, t. XV, p. 68.
2) *Ibid.*, p. 66.
3) *Ibid.*, p. 79.
4) *Ibid.*, p. 98.
5) *Ibid.*, p. 111.
6) S, pp. (7)—(8); CN, t. I, pp. 5—6; HN, t. I, p. 8; AT, t. III, pp. 11—12.

この手紙は，のちに『セネカ論』初版（および第2版）の冒頭に，A MONSIEUR N*** という見出しをつけて，編注者ネジョンへの献辞の形で収録される。

1778年11月12日，メトラの『秘密通信』は『セネカ論』の出版が間近いことを報道する[1]。「われわれは，興味深い数冊の新刊書を期待している。まず有名なド・ビュフォン伯爵の『自然の体系』。〔……〕ついでディドロ氏の，多数の注をつけた『セネカの生涯』。これには非常にすぐれた部分と，多くの悪趣味な部分とが含まれているに違いない。最後がルーシェ氏の詩『歳月』〔……〕」

11月25日，ようやく検閲官コクレ・ド・ショスピェールの出版許可がおりる[2]。

許　可

国璽尚書閣下の命により，セネカ著作集の続篇『セネカの生涯と著作論』を閲読した結果，印刷を許可してもよいと判断する。

パリ，1778年11月25日

コクレ・ド・ショスピエール

1778年12月，『セネカ論』初版は，ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』の最終第7巻として，パリのド・ビュール書店から刊行された。正式表題は，『哲学者セネカの生涯と著作，およびクラウディウスとネロの治世論』という。扉ページには，1779年と印刷されているが，事実は1778年12月の発行である。

意図　ディドロはどういう意図をもって『セネカ論』初版を執筆したのだろうか。彼は作品冒頭のネジョンへの献辞のなかで，「一切が消滅する時期が間近に迫った私は，自分の良心と数人の友人の賛成しかほしいと思わなかった」と，作品執筆当時の心境を明らかにしたあと，彼自身の意図を次のように語っている[3]。

私は〔読者を〕面白がらせようとは思わなかった。いわんや〔読者の〕喝采を博そうなどとは考えてもみなかった。私はもっと立派な意図をもっていた。それはセネカの生涯と著作とを公平に検討し，中傷された偉人の仇を討ち，万一，彼が有罪だと思

1) CORR, t. XV, p. 124.
2) *Ibid.*, p. 125.
3) S, pp. (2)—(3), CN, t. I, pp. 2—3; HN, t. I, pp. 5–6; AT, t. III, p. 9 (S≒CN〔以下 CN において，Sのテクストが改訂されている場合は，この記号で表示する〕。)

える場合には，彼の過失を嘆き，さらに，彼の賢明で力強い教訓から多くを学ぶことであった。私が〔この作品を〕書いたのは，こういう気持ちからであった。だから読者もこういう気持ちで私の作品を読んでほしいと思う。

このディドロのことばは，一見矛盾した2つの意図を示しているように見えるかもしれない。すなわち，今日のわれわれの普通の考えからすれば，「セネカの生涯と著作とを公平に検討」することは，セネカから離れた立場にたって，彼を裁くことであるのに反して，「中傷された偉人の仇を討ち」，「万一，彼が有罪と思える場合には，彼の過失を嘆く」（傍点中川）ことは，セネカの側にたって彼に味方し，ひいては彼の代理者として復讐までもひきうけることを意味しているからである。

しかし，ディドロ自身は，この2つの事柄を，決して矛盾するものとは考えていなかった。なぜなら彼が『セネカ論』を執筆しはじめた時には，セネカの徳行と無罪は彼にとってもはや否定しようのない確信になっていたからである[1]。したがって，ディドロにおいては，「セネカの生涯と著作とを公平に検討」することは，直ちに彼の徳行と無罪をすべてのひとの目に，証明することを意味していた。

それだけではない。ディドロは，セネカの生涯の背景として「クラウディウスとネロの治世」を描きだすのであるが，このローマ史の諸事件すら，この作品のなかでは，セネカの行為の正しさを明らかにする目的で叙述されているのである。このことを，ディドロは次のようにいっている。「私は，クラウディウスとネロの治世のうち，哲学者〔セネカ〕が行動する場面だけを集め，この偉大な人物だけを描きだすこともできただろう。だが，情景のまっただなかに身をおいてみれば，セネカが果たした役割の困難さと尊厳とが，もっとはっきり実感できるように思えたのである。」[2]

このように，「セネカの生涯と著作とを公平に検討」し，かつ「クラウディウスとネロの治世」の全体的「情景」を描きだすディドロの終局的な目的は，歴史的世界における行為者・思索家セネカを，彼自身の人格と歴史的状況の相関のなかでとらえ，彼の行為と言説の正しさ，純粋さをすべての読者の前で弁

1) 先に引用したヴァンドゥル夫人『ディドロ回想録』中の次のことばを想起されたい。«Il avait tellement résolu de trouver Sénèque pur, juste, grand, digne de ses préceptes [･･･]» AT, t. I, p. LIV.

2) S, p. (6); CN, t. I, p. 4; HN, t. I, p. 7; AT, t. III, p. 11.

明することであった。ディドロもこのことをはっきり自覚して，次のようにいう[1)]。

> ああ，もし弁護人の能力が事件の重大さに釣り合ってさえいれば，私はどれほど立派な仕事をやりとげたことだろう。セネカのごとき人物の弁護。クラウディウスとネロの治世の情景の描写。なんと困難な問題を扱わねばならないことだろう。

クラウディウスとネロの治世という情景のなかにセネカをおいたうえで，彼の生涯を弁護すること。——これが『セネカ論』初版における，ディドロの意図にほかならなかった。

構成　『セネカ論』初版は，全部で109章からなり，前半がセネカの生涯論，後半が著作論にそれぞれあてられている。109章は次のように構成されている。

〔ネジョンへの献辞〕「N***氏へ」
§. I—§. LXIII　〔セネカの生涯論〕
§. LXIV—§. CIX〔セネカの著作論〕
　§. LXV　「セネカの手紙について」
　§. LXXXI　「マールキア慰藉文」
　§. LXXXII　「怒りについて」
　§. LXXXIV　「寛仁について」
　§. LXXXV　「摂理について」
　§. LXXXVI　「恩恵について」
　§. LXXXX　「魂の平静について」
　§. LXXXXI　「幸福な生活について」
　§. XCIII　「余暇，あるいは賢者の引退について」
　§. XCV　「ヘルウィア慰藉文」
　§. XCVI　「人生の短さについて」
　§. XCVII　「賢者の恒心について」
　§. XCVIII　「ポリュビウス慰藉文」
　§. XCIX　「エピグラム」
　§. C　「かぼちゃへの変貌」
　§. CI　「自然の問題」

1) S, p. 8; CN, t. I, p. 6; HN, t. I, p. 8; AT, t. III, p. 11.

§. CII—CVII　〔セネカにたいする非難とディドロの弁護〕
§. CIX　〔セネカと関係のあるスペインの遺跡〕
〔脚注——ディドロ執筆の脚注とネジョン執筆の脚注〕

私は以下，ディドロの作品構成の順序に従って，まず前半「セネカの生涯論」におけるディドロの主張を調べ，次に後半「セネカの著作論」における彼の立論を検討して，『セネカ論』初版におけるディドロの意識の構造を順次明らかにしていきたいと思う。

第II章　セネカのための弁明

1. 告発された事実の否認(一)——事実の吟味

セネカにたいする告発とディドロの弁護　『セネカ論』初版の前半（§. I—§. LXIII）が語るセネカの生涯は，決して平穏なものではなかった。属州ヒスパニアに生まれた彼は，青年時代，一家とともにアウグストゥス治下のローマに移住する。まず弁護士として社会に登場し，ついで哲学者，財務官になる。たちまちクラウディウスの命令によってコルシカ島に追放され，メッサリーナの死後，新たに，クラウディウスの皇妃となったアグリッピーナの助力によって，ようやく許されてローマに戻る。やがて幼いネロの家庭教師に，ついで彼が帝位につくとその大臣に任命される。ネロは，5年間の善政ののち，堕落の道をたどりはじめる。宮廷における，彼の乱行につぐ乱行。殺害につぐ殺害。ついにセネカは腐敗した宮廷から引退を決意し，自分の屋敷に引きこもるが，彼のそれまでのネロへの奉仕は，最後に強制された自殺によって報いられる。

彼の生涯は，「あらゆる帝王中で，もっとも邪悪な帝王の傍で，生命を失うか，それとも犯罪を是認するかのどちらかしかないという苛酷な二者択一のなかで」[1]過ごされたのであった。進むことも，退くことも不可能なような事態が，次から次へと彼におそいかかる。この苛酷な状況のなかで，常により善なる道を選びつつ，「自己の良心の証言を頼りに，強く意志を固め，〔……〕彼の徳と才能とを攻撃する幾人かの市民の中傷の声のまっただなかを，誇りたかい勇気をもって歩いていく人物」[2] こそ，ディドロがえがきだすセネカの姿であった。

1) S, p. 77; CN, t. I, pp. 62—63; HN, t. I, p. 44; AT, p. 51.
2) S, p. 219; CN, t. I, p. 226; HN, t. I, p. 148; AT, p. 158.

だが，セネカの行為の選びは，はたしてそのすべてが倫理的に是認しうるものであるかどうか。——これをめぐって，彼の生前から死後にいたるまで賛否両論が交錯する。プブリウス・スイッリウス，ディオン・カッシオス，クシフィリヌスにはじまり，18世紀まで続く非難者の群。タキトゥス，ジュストゥス・リプシウス，モンテーニュにはじまり，ディドロの同時代人にいたる称賛者の群。セネカの非難者たちの攻撃は，セネカの危機的状況における身の処し方，生活態度から，ひいては，彼の人格にまでむけられていくのであるが，これらの攻撃は主に次の5点に集約される。——㈠彼はゲルマニクスの娘ユーリアと姦通したという非難。非難者たちは，セネカのコルシカ島追放はこれが原因であったとする。㈡追放解除をクラウディウスに働きかけてもらうために，宮廷の有力者ポリュビウスにあてて，阿諛にみちた手紙（『ポリュビウス慰藉文』）を送ったという非難。㈢莫大な財産を不正な手段で築きあげたという，プブリウス・スイッリウスの非難。㈣アグリッピーナ殺害事件においてネロに協力し，かつ事後には，ネロの名前で元老院に送る手紙を代筆し，そのなかでこの殺害を正当化したという非難。㈤ネロから自殺を命ぜられた時，臆病からなかなか決心がつかず，妻のはげましによってやっと死ぬ気になったという非難。

これらの非難にたいして，ディドロはセネカの行為を読者の前で釈明し，彼を中傷のうちから救いだそうとする。そして，「誠実で感じやすい魂にとって，賢者の弁護ほど興味ぶかい主題はほとんど存在しない」[1]という。私は本章において，彼のセネカ弁護の方法を，主として『セネカ論』の前半「セネカの生涯論」を中心に——しかし必要な場合には，後半「セネカの著作論」にも言及しつつ——検討し，それを通してディドロの意識の構造を内面から分析していきたい。

ユーリアとの関係　ディドロは，セネカにたいするさまざまな告発を前にして，まず嫌疑が事実であるかどうかの吟味からはじめる。告発が事実に反していることが判明すれば，それはセネカのための最大の弁明になるであろう。

吟味の第1の対象は，セネカがユーリアと関係があったという罪状である。——「ある者は，彼がゲルマニクスの娘でガーユス〔カリグラ〕の妹にあたるユーリアの〔皇帝にたいする陰謀の〕相談相手だったがゆえに追放されたといい，また別の者は，メッサリーナの不義の相手だったがゆえに追放されたとい

1) S, p. 517; CN, t. II, p. 283; HN, t. II, p. 185; AT, p. 379.

う。」[1]

ディドロは，この告発の真偽を，当時セネカがおかれていた宮廷の状況——さまざまの人間の勢力関係——の吟味と，彼個人の人間の吟味との両面から調査していく。まず，当時の宮廷の状況はどのようなものであったか。——「クラウディウスは，帝位にあっても完全に無力だった。宮廷においても完全に無力だった。自分でもそのことを知っており，自分でもそういっていた。」[2] 彼は淫蕩な皇妃メッサリーナに，完全に支配されていた。宮廷内の政治的実権は，宦官ポシデスと解放奴隷フェリクス，ハルポクラス，カリストゥス，パッラス，ナルキッススの手に占有されていて，皇帝の知らぬ間に，官職は売買され，裁判官の決定すら金銭に左右されていた。

このような状況のなかで，有徳の人物セネカの存在はすべての権力者にとって，次第に耐えがたいものになっていく。なぜなら哲学者セネカは，ひたすら真理だけを語ろうとするからである。そして彼が「一般的道徳率」を口にする時，それは悪意ある廷臣によって，必ず特定の個人への攻撃であると曲解された。たとえば彼が「ふしだらは人間の品位を傷つける。特に婦人の場合は，一切の貞淑の感情をそこなう」と語る時，それは直ちに皇妃への攻撃とうけとられた。こうして権力者の側にセネカへの憎悪が蓄積されていく。

では，メッサリーナはどのような状況におかれていたか。彼女は，夫クラウディウスが追放から呼び戻したユーリアにたいする嫉妬と，ユーリアの友人セネカにたいする憎悪と恐怖にさいなまれている。特に明敏なセネカが「〔皇帝の〕家庭内の乱脈と，解放奴隷たちの犯罪」とを，皇帝の耳にいれはしないかと危惧していた[3]。

危険を逃れ，恨みをはらすために，メッサリーナは，ユーリアとセネカの2人を一挙にほうむることを決意する。彼女は，カリストゥス，パッラス，ナルキッススを召集する。2人をどういう理由で告発すればよいか。セネカのひんぱんなユーリア邸訪問を，2人の不義という罪状にしたてあげることが彼らの間で決定される。——これが，ディドロの描きだす，ユーリア事件の歴史的状況の真相である[4]。

1) S, p. 34; CN, t. I, p. 33; HN, t. I, p. 25; AT, p. 31.
2) S, p. 47; CN, t. I, p. 43; HN, t. I, pp. 31—32; AT, p. 38.
3) S, p. 48; CN, t. I, p. 43; HN, t, I, pp. 31—32; AT, p. 38.
4) S, pp. 48—49; CN, t. I, pp. 43—44; HN, t. I, p. 32; AT, pp. 38—39.

では，セネカの人間は，はたしてユーリアと不義を犯すような可能性をもっていただろうか。ディドロは次にこの点を吟味する。事件の当時，「彼は40歳に達しており，賢明，慎重，かつ病弱だった」[1]。愛する妻をもち，妻子もまた彼を熱愛していた。さらに，家族，友人たちのみならず，同国人のすべてから，「敬意と尊崇」をうけていた。もし彼が，「徳行をよそおう偽善者」であれば，すべてのひとが一致して，彼に尊敬の念をいだくというようなことはありえない。だから，「セネカは，ユーリアの愛人でもなければ，陰謀の相談役でもない」[2]。

こうして，事件を状況と人間の両面から吟味した結果，ディドロはセネカの無罪を明らかにする。無実のセネカがコルシカ島に追放されたのは，「ひとりの破廉恥女〔メッサリーナ〕と，ひとりのまぬけ男〔クラウディウス〕と，3人の悪漢〔カリストゥス，パッラス，ナルキッスス〕の仕業であった」。この3人の悪漢が作りあげた虚偽の証言を，「廷臣たちの悪口，町での曖昧な噂，スイッリウスのごとき男〔後述〕のやかましい叫び声」が支持していた[3]。

「だが，こんな権威が，セネカという人物の性格にどういう傷をつけえようか。」[4]——これが，ディドロの最後の結論である。（ディドロは，この事件にかんして，セネカがかりにユーリアと不義な関係をもっていたと仮定しても，なおかつ弁護が可能だと主張しているが，これについてはあとで検討する。）

『ポリュビウス慰藉文』 岩ばかりのコルシカ島に流されて8年，セネカはクラウディウスの有力な廷臣である解放奴隷ポリュビウスの兄弟が死んだという情報をうけとる。彼は直ちに，ポリュビウスに慰めの手紙（『ポリュビウス慰藉文』）を送り，そのなかでこの廷臣と皇帝への卑劣な阿諛をふりまく。徳と勇気を説き続けた哲学者として，この矛盾と偽善は許しがたい[5]。——これがセネカにたいする第2の非難の声であった。（この非難にたいして，ディドロはまずセネカがこの手紙を実際に書いたものと仮定した上で彼の立場を弁護し，ついで，この仮定がはたして真実かどうかを吟味しているが，この項では，後者——事実の吟味——を問題にし，前者にかんしては，のちに別項で検討する。）

1) S, p. 49; CN, t. I, p. 44; HN, t. I, p. 32; AT, p. 39.
2) *Ibid.*
3) S, p. 50; CN, t. I, p. 45; HN, t. I, p. 33; AT, p. 39.
4) *Ibid.*
5) S, p. 73; CN, t. I, pp. 60—61; HN, t. I, p. 43; AT, p. 50.

『ポリュビウス慰藉文』とはなにか。ディドロの時代には，それは第1章から第20章までが欠落し，ようやく「第20章からはじまる断片」にすぎなかった[1]。ところで，2世紀のローマの歴史家ディオン・カッシオスは，その『ローマ史』のなかで，セネカはこの作品を執筆したことを恥じて，のちに一切を抹消してしまったと証言している[2]。

では，現存する『ポリュビウス慰藉文』と呼ばれている断片はいったいなにか。「悪意あるひとが，『ポリュビウス慰藉文』が存在しないことを知ると，これにつけこんで，まったく別の作品を〔つくりあげて〕，まんまとそれにおきかえた」とディドロは主張し[3]，そのことを，次の5点から証明する。

(1) 「『ポリュビウス慰藉文』は，効果がなく，また効果があるはずもなかった。」なぜならポリュビウスは，自分よりすぐれた才能の持主の宮廷復帰に尽力するほど好人物でもなく，またアグリッピーナが失脚させたセネカに味方して，皇妃に敵対するほどばかでもなかった。

セネカほど明敏な人物に，こういう事情が見抜けないはずはない。したがって，彼が，現在『ポリュビウス慰藉文』の名で呼ばれているような手紙を，ポリュビウスに送るはずがない，とディドロは断定する[4]。（彼はここで，16世紀オランダの古典学者ジュストゥス・リプシウスも，自分と同意見であると強調している[5]。）

(2) この『慰藉文』におけるポリュビウスの賛辞は，余り度がすぎている。だから手紙をうけとった人間は，ほめられているというより，むしろ愚弄されていると感じるにちがいない。

たとえば，作者は皇帝の一介の秘書にすぎないポリュビウスを「第一級の人物のうちに加え」，「世界の重荷を双肩で支えた」，「ローマ帝国のアトラス」と呼び，ホメロスとウェルギリウスを散文に訳しただけの彼の文学上の業績にかんして，「その文名は永遠の後世にまで伝えられるだろう」とさえ称揚する。だからディドロは，この文書は，誰かがセネカの名を借りて創作したポリュビウスにたいする諷刺文だという[6]。

1) S, p. 470 ; CN, t. II, p. 240 ; HN, t. II, p. 158 ; AT, p. 347.
2) S, pp. 469—470 ; CN, t. II, pp. 239—240 ; HN, t. II, p. 157 ; AT, p. 347.
3) *Ibid.*
4) S, pp. 470—471 ; CN, t. II, pp. 240—241 ; HN, t. II, p. 158 ; AT, p. 347.
5) *Ibid.*
6) S, pp. 471—472 ; CN, t. II, pp. 471—472 ; HN, t. II, pp. 158—159 ; AT, p. 348.

(3) さらに，ディドロはこの『慰藉文』の表現からみても，これがセネカの作品であるとは考えられないと主張する。たとえば，この文書の作者は，死を「最大の不幸」と呼び，「悲しみ」に心を動かされない人物を「冷酷」であるという。だがこれはセネカが信奉するストア派の教説と矛盾する[1]。

(4) 『慰藉文』中に認められる余りにも卑屈な作者の人物像と，ネロから死を命じられて毅然とした態度で死んでいったセネカの姿とは一致しえない。この作者は，「クラウディウス帝がなにとぞ私の無実を認めたまわんことを」と書き，さらに「もし陛下が私を有罪とお考えになる場合でも，その御決定を恩恵とみなすつもりでございます」とさえいっているが，この卑屈さはセネカのものではありえない，とディドロは強調する[2]。

(5) 『慰藉文』の作者は，心の悲しみをまぎらすために，「寓話」を書くことをポリュビウスにすすめる。そして彼は，「寓話」は「ローマ人がまだ手をつけたことがないジャンルである」とのべている。

しかし「文学者セネカ」，「モラリスト・セネカ」がファイドロスの寓話やホラティウスの寓話（「町のねずみといなかのねずみ」）の存在を知らなかったとは考えられない，とディドロはいう[3]。

ディドロは以上のような論拠をあげたうえで，セネカと『ポリュビウス慰藉文』とは無関係であると結論するのである。

自殺における妻のはげまし ディドロの同時代人ド・サシは，『名誉論』のなかで，いくつかの罪状をあげてセネカを告発している。その罪状の多くは，ド・サシ以前にすでに幾度も繰り返されてきたものであるが（これらの罪状については，のちに検討する），ただひとつ新しいのは，「セネカは，死ぬ決心をするのに，妻のはげましを必要とした」[4]という非難である。しかも，ド・サシによれば，この「はげまし」とは，セネカより先に死んでみせること（死の「手本」を示すこと）を意味する。

ド・サシは，タキトゥス『年代記』第15巻，第63節の一部からこの非難をひきだすのであるが，ディドロもまたおなじテクストを根拠に，ド・サシの非難が，誤ったタキトゥス解釈に基づいていると反駁する。タキトゥスの問題箇所

1) S, p. 476 ; CN, t. II, p. 247 ; HN, t. II, p. 162 ; AT, p. 351.
2) S, p. 477 ; CN, t. II, pp. 247—248 ; HN, t. II, pp. 162—163; AT, p. 351.
3) S, pp. 479—480 ; CN, t. II, p. 249 ; HN, t. II, pp. 163—164 ; AT, p. 352.
4) S, p. 236 ; CN, t. I, p. 238 ; HN, t. I, p. 156 ; AT, p. 166.

は次の通りである[1]（ディドロのかなり自由な翻訳に対応すると思われる箇所を，イタリック体で示した）。

> Vitæ, inquit, delenimenta monstraveram tibi, *tu mortis decus mavis: non invidebo exemplo.* Sit hujus tam fortis exitus constantia penes utrosque par, *claritudinis plus in tuo fine.*

ディドロによれば，«le grand exemple que vous allez donner, en préférant librement une mort glorieuse à une vie amusée, est une gloire que je ne puis avoir, & que je ne vous envierai point»（「おまえが，空しく生き続けるよりも，名誉ある死を進んで選びとって，私に示そうとしてくれている立派な手本は，私にはまねのできない名誉であって，その名誉をおまえからとりあげる気はない」）と訳すべき箇所を，ド・サシのように «je consens que vous m'en donniez l'exemple»（「おまえが，死の手本を私に見せてくれることに同意する」）と訳すのは，「セネカの魂と，タキトゥスの言語とを，ともに知らない」ことだという[2]（ただし，ディドロは，私が次に引用するセネカの死の描写中では，問題の部分を，«vous préférez une mort glorieuse, je ne vous envierai point l'exemple»）〔「おまえは名誉ある死を選びとったのだから，その名誉をおまえからとりあげる気はない」〕と訳している。）

ディドロのこの主張は，ラテン語の翻訳の問題の次元に限定する限り，やや無理があるように思われる。なぜなら，«non invidevo exemplo» という否定形の原文を，ド・サシのように «je consens que vous m'en donniez l'exemple» と肯定形に変えて訳すのはごく自然だからである。

しかし，タキトゥス『年代記』（第15巻，第62～第63節）が語る情景は，毅然として死にのぞむセネカの姿を示しており，ド・サシの非難が根拠のないものであることは明らかである[3]。

> 彼はこういう話〔遺言〕と，その他2，3の話とを傍の一同〔ローマ郊外のセネカの別荘で会食していた友人たち〕にし終えると，妻を抱擁した。強い態度をその時も

1) Tacite, ***Annales***, Classiques Garnier, Livre XV, LXIII, p. 378.
3) S, pp. 236—237 ; CN, t. I, p. 238 ; HN, t. I, p. 156 ; AT, p. 166.
2) S, pp. 198—200 ; CN, t. I, pp. 204—205 ; HN, t. I, pp. 134—135 ; AT, p. 142. なお，この場面にかんして，レヴァンテールは，次のように指摘している。「セネカの死は，ディドロがなん度も計画したソクラテスの死の作劇法によって配列されている。」LS, p. 506.

もち続けてはいたが，やさしい声になり，こう妻に願い，頼んだ。悲しみをおししずめ，いつまでも悲しまないで，清らかな楽しみを見つけ，徳に捧げられた夫の生涯を思いだして，失った夫への哀惜を和らげるように，と。パウリーナは，これにたいして，死の宣告は夫婦ともどもにうけるべきものです，と抗弁し，血管を切る執刀医の手を請う。セネカは妻のこれほど気高い決心には反対しない。かけがえなく大事に思う妻を深く愛していたのと，彼女をひとり残した場合に，さまざまな侮辱をこうむりはしないかと恐れていたからだ。彼は妻にいった。「さっきは，生きて心を慰める方法をおまえに教えた。しかしおまえは，名誉ある死を選びとったのだから，その名誉をおまえからとりあげる気はない。心を強くもたねばならない死の時に，2人ともおなじように毅然たる態度を示し，最後が名誉に輝くようにしよう。」……それからすぐ，2人同時に，小刀で腕の血管を切り開く。〔……〕だが，はげしい苦悶が自分の精魂をつきはてさせるのを見て，妻の気力がくぢけるのではないかと恐れ，一方また妻の苦痛を目にして，自分の心が耐えられなくなるのではないかと恐れて，妻を説きふせて別室にひきとらせた。それから秘書を数人呼びつける。そしてわきおこる雄弁にうながされて，最後の瞬間までさまざまな事柄を口述する。

ディドロは，さらに，タキトゥスを典拠にして，「この当時夫の死後に生き残ることを拒否したローマ婦人はひとりも思いだせない」とのべて，セネカの死後，ネロに生命を救われたパウリーナの運命を暗示し，セネカが死に際して妻の手本を必要としなかったことを強調している[1]。「それなのに，ここには，タキトゥスより事情に通じていると思いこんだ人物〔ド・サシ〕がいるのだ。」

「美しい魂」の立場　ディドロは，このように執拗な努力を重ねて，告発された罪状を否認していく。しかし，その努力にもかかわらず，彼の弁明は必ずしも説得的ではなく，今日のわれわれの目から見れば，反論可能な論証が，いたるところに認められる。特に，セネカの人格を論拠とした弁明のなかにディドロの論証の弱点が露出している。

たとえば，ディドロはユーリアとの事件の弁護において，セネカが40歳に達しており，賢明，慎重で病弱だったという。さらに愛する妻子をもち，妻子もまた彼を熱愛していたという事実を強調する。だが，これらの事実が，セネカがユーリアと不義を犯さなかった，という証拠になるだろうか。

また，セネカがすべてのひとびとから敬意をもたれていたということを根拠

1) S, p. 237 ; CN, t. I, p. 238 ; HN, t. I, p. 156 ; AT, pp. 166—167.

にして，「徳行をよそおう偽善者」に，すべてのひとが一致してこのような感情をもつはずがない，だからセネカはユーリアと不義を犯したり，彼女の陰謀の相談相手だったりするはずがないと結論する。しかし，セネカにたいする告発は，彼がこのような敬意をひとびとから払われるような言行を平素示しつつ，しかも実は裏で，不義を犯していた，という点にあるのだから，ディドロの反駁は，意味をもたないであろう。

さらに，ディドロの論証のうちのあるものは，明らかに「論点窃取の虚偽」を犯している。たとえば，彼は，『ポリュビウス慰藉文』中に認められる卑屈な文章は，毅然たる態度で死んだセネカのものではありえないと断定する。しかし，まさにその点こそ，調査すべき論点だったのである。

このように，ディドロの論拠の薄弱さを指摘することは，きわめて容易である。しかし私の課題はそこにはない。私が目的とするのは，これほどまでしてセネカを擁護するディドロの態度が，いったい彼のどのような意識をあらわしているのか，という点である。

ディドロは，セネカのための弁明者としての自分の態度を，次のようにいう。「善行を保証する場合は，不正確でも許される。だが，犯罪の証言をするひとにたいしては，おなじような寛大さが許されているのであろうか」[1] と。

ここには，セネカのうちにある——さらに人間一般のうちにある——善性を信頼し，それを傷つけようとする悪意から，なんとしても，その善性を救いだしたいというディドロの強い意志が読みとれる。

ディドロはまた次のようにいう[2]。

> 2種類の賢明さが存在する。ひとつは人間の誤謬を軽くみなそうとし，もうひとつはそれを誇大に考えようとする。あとのほうの賢明さは，美しい魂よりも，すぐれた知性を示す場合が多い。

ディドロが，この「美しい魂」の立場に立つことは，もはや断わるまでもあ

1) S, p. 487 ; CN, t. I, p. 268 ; HN, t. I, pp. 175—176 ; AT, p. 367. 類似の考えは随所に見られる。たとえばディドロは，ある箇所で読者に呼びかけ，自分はあなたがたがたとえ悪人であっても，「いやいやながらしか」そのことを信ぜず，また善人である場合は「明白な証拠がない限り」悪人になったとは信じない，と書いている。S, p. 239 ; CN, t. I, p. 338, note (340 l) ; HN, t. I, p. 243, (note 340 l) ; AT, p. 167.

2) S, p. 76 ; CN, t. I, p. 298, note (118 e) ; HN, t. I, pp. 202—203 ; AT, p. 50, note 2.

るまい。この「知性」の論証と「魂」の論証との対立は，ディドロにおいてはやくから自覚されており，彼はそれを別のところ(『ファルコネとの論争書簡』)では「厳密な論証の真理」と「感情の真理」との違いという名で呼んでいる(本論第四部参照)。「美しい魂」の論証——「感情の真理」——は，相手の「理性」にではなく，「心情」への訴えを特色としているのである。ディドロのセネカ弁護が，彼の罪状の事実の吟味においてすら，「知性」の問題であるより，むしろ「魂」のそれであることを理解する時，はじめてわれわれは彼の論証の真意を理解しうるであろう。

2. 告発された事実の否認(二)——告発者の人格の信憑性の吟味

スイッリウスの告発　ディドロはセネカにたいする告発を前にして，まず告発内容の調査に基づく事実の否認からはじめた。しかし彼のセネカ弁護は，次に告発者の人間の信憑性の検討にまで進む。告発者の人格が信頼できない場合は，その告発はすべて無効である，というのがディドロのいい分である。

この信用できない告発者とは，プブリウス・スイッリウスである。ディドロが，タキトゥス『年代記』(第13巻，第42節)に依拠して，記述するところによれば，スイッリウスは，ローマの元老院で，金銭づくで訴訟の弁護をひきうけたという理由で処罰されかけると，猛然と皆にくってかかり，さらに次のことばでセネカを告発した[1]。

> 私がゲルマニクス付きの財務官だった時，セネカは，この皇族の娘〔ユーリア〕の誘惑者だった。訴訟依頼人に感謝されて，正直な仕事の報酬をうけとることが，皇帝の娘たちを堕落させるよりも重大な罪なのだろうか。いったいどういう哲学を使って，またどういう賢者の教訓を利用して，彼は4年間に3億セステルティウスもの財産をためこんだのか。彼はローマでは，まるで獲物を網にとりこむように，相続人のないひとびとの遺言状と財産をまきあげた。法外な高利貸で，イタリアと属州の金をしぼりとった。だが，この私は，自分で働いて，ささやかな収入をえているにすぎないのだ。

セネカの莫大な財産と，彼の蓄財欲，奢侈にたいする攻撃は，彼の死後も幾度も反復されるのであるが，ディドロによれば，その種の攻撃の原型はこのスイッリウスの演説であるという。ディドロは，この演説にたいして，「告発の

1) S, pp. 118—119 ; CN, t.I, p. 121 ; HN, t. I, p. 81 ; AT, p. 87.

確実性，不真実性，あるいは虚偽性の信頼度は，告発者の性格，行為，言説，および生活の内容に基づいて決定される必要」があることを強調する[1]。

したがって，スイッリウスの告発にかんしても，まず告発者スイッリウスの人間の調査からはじめなければならない。——プブリウス・スイッリウスは，先に引用した演説でも明らかなように，一時ゲルマニクス付きの財務官だったが，ある事件で告発され，ティベリウスの時代に，元老院の命令でイタリア本土から追放されていた。「金銭次第で動く，恐るべき密告者であり，多数の市民から当然にも蛇蝎のごとく嫌われていた悪漢であり，かつてセネカのために金銭収奪の罰をうけたことを決して許そうとはしない背任行為者，汚職者」だった[2]。

時代が代って，追放が解除されてからも，スイッリウスは以前からの振舞いを変えようとはしなかった。そこでひとびとは，金銭づくで訴訟の弁護をひきうけた人間を処罰する昔の元老院議決と，キンキウス法とを復活して，彼を打倒しようとはかった。これに反撃したのが先に引用した彼のセネカ攻撃演説なのである。そのほかにも彼は，アジア属州の知事をしていた間に，公金を着服・私消し，またクラウディウス治下には，メッサリーナの手先になって，ヴァレリウス・アシアティクスやポッパエアを弾劾している[3]。

ディドロは，このように，スイッリウスの「性格，行為，言説，および生活の内容」を調査したのち，これら一切が彼の告発の虚偽性を証明していると断定する。そしてさらに，こう付け加えている。「スイッリウスのごとき人物，職業的密告者，多数の犯罪で汚され，告発され，処罰された狂暴な人物の非難を信用するためには，誠実な人物にたいするよほどはげしい嫌悪に苦しめられていなければならない。」[4]

ディドロのこの弁明にたいしても，反駁は可能であろう。なぜなら，告発の内容の真偽と，告発者の人格の善悪とは，必ずしも直接的に結びつくものではなく，したがって，悪人の証言だからといって，それらがすべて虚偽であると主張することは許されないからである。しかし，ここでもまたわれわれは，ディドロの弁明の論理的整合性の不備を問題にするよりも，彼の「美しい魂」の

1) S, pp. 121—122, note (191); HN, t. I, p. 84. この部分はCNでは欠落している。
2) S, p. 116; CN, t. I, p. 120; HN, t. I, p. 80; AT, p. 86.
3) S, pp. 118—120; CN, t. I, pp. 121—122; HN, t. I, pp. 81—82; AT, pp. 87—88.
4) S, p. 120; CN, t. I, p. 120; HN, t. I, p. 82; AT, p. 88.

立場に注目すべきであろう。

ディオンとクシフィリヌス　セネカの没後も，プブリウス・スイッリウスの同類――セネカにたいするはげしい弾劾者――が出現する。その第1が，『ローマ史』80巻を執筆した2―3世紀のローマの歴史家ディオン・カッシオスであり，これに続くのがディオンの『ローマ史』の『概要』を作製した，11世紀の東ローマ帝国の修道僧ヨアンネス・クシフィリヌスである。

告発者ディオンの人格の検討――ディオンは，『ローマ史』のなかで次のような理由から，セネカを告発する。「ブリタンニアの動乱が起こったのは，彼がブリタンニア人に貸した金を，分割払いではなく，一度に全部をとりたてようとした，その苛酷なしうちのせいである。」[1)]

ディドロは，この告発にたいしても，告発者が信頼できない人格の持主であることを暴露し，それによってこの告発内容そのものを否認する。

「このディオンという男は，小アジアのビチニア国，ニカエアの出身で，自分の気にいらない有徳者を一生の間中傷し続けた」人間であり，歴代の皇帝のもとで「陰謀家，廷臣，御機嫌とりといういやしい役目」をはたし，その報酬として，地方総督，執政官に任命されている[2)]。

クルヴィエは，ディオンを「すべての有徳なローマ人の永遠の中傷家」と呼ぶ。ディドロによれば，ディオンは，根拠もなしにキケロを娘と近親相姦を犯した人物であると非難し，さらに，もっとも有徳なカッシウスとブルートゥスを，自分自身の「判断と道徳の，いやしがたい退廃」（ジュストゥス・リプシウス）のゆえに中傷しているという[3)]。

したがって，ディオンのセネカにたいする非難は信用できない。むしろ，「彼が特にセネカを攻撃した」というこの「喜ばしい特別扱い」こそ，セネカが有徳者であったという事実を示すなによりの証拠である，とディドロは結論する[4)]。

告発者クシフィリヌスの人格の検討――クシフィリヌスもまた，ディオンの『ローマ史』の『概要』のなかで，セネカの蓄財を非難する。

これにたいしてディドロは，クシフィリヌスは「一種の気違い，邪悪な人物，

1) S, p. 210 ; CN, t. I, p. 212 ; HN, t. I, p. 139 ; AT, p. 149.
2) S, p. 211 ; CN, t. I, p. 213 ; HN, t. I, p. 140 ; AT, p. 150.
3) *Ibid.*
4) *Ibid.*

奇怪な精神の持主」であって，その人格的欠陥のゆえに，彼の証言もまた信用できないと断定する[1]。

ディドロは，さらにラモット・ル・ヴァイエと，ジュストゥス・リプリシウスのクシフィリヌス批判を援用して自説を裏づけている。すなわち前者については，「クシフィリヌスの本によると，ディオンは〔『ローマ史』の〕第59巻では，セネカの知恵を絶賛しているのに，そのあとでは彼を中傷して，極端に矛盾したことを語っていることになっているが，これは信じがたい」と批判し，後者にかんしては，「この概要の作者は，スイッリウスの告発か，それとも彼とおなじように邪悪な誰かの告発を，ディオンのほんとうの意見ととり違えたのではないか」と評している[2]。（ディオンにかんする評価については，ラモット・ル・ヴァイエ，リプシウス３者の間に若干の相違がある。）

ディドロは，このように告発者ディオンとクシフィリヌスの証言を，彼らの人格のゆえに否認したあと，ネネカの中傷家たちはいずれも事実を吟味していないという。そしてセネカは蓄財の方法にかんしても，その使い方（貧しい親類と友人のためにしか使っていない）にかんしても，ともに潔白であり，「貪欲あるいは乱費，冷酷，道徳的退廃，傲慢，常規を逸した派手好み，肉体的快楽の嗜好，贅沢な屋敷内部の飾りつけ」などのどれひとつとして彼に非難しうるものはないと弁護している[3]。

タキトゥス　ディドロが，まったく人格的に信用できないセネカ非難者に対抗してもちだすセネカ擁護者がいる。それは『年代記』のタキトゥスである。

ディドロは，なぜセネカの歴史家としてタキトゥスを信頼するのか。これについて，ディドロは，モンテーニュ『エセー』の一節（第２巻，第32章「セネカとプルタルコス弁護」）をひいて，自分の意見を代弁させている。モンテーニュは，ディオンとタキトゥスとを比較して次のようにいう[4]。

> 私はディオンの証言をぜんぜん信用しない。なぜなら，彼は無定見で，セネカをきわめて賢明だとか，ネロの不徳の不倶戴天の敵だとか言うかと思うと，他の箇所では，彼を悋嗇家，高利貸，野心家，卑法者，道楽者，偽りの看板をかかげて哲学者面をす

1) S, p. 212 ; CN, t. I, p. 214 ; HN, t. I, p. 140 ; pp. 150—151.
2) S, pp. 212—213 ; CN, t. I, p. 214 ; HN, t. I, p. 140 ; AT, p. 151.
3) S, pp. 214—216 ; CN, t. I, pp. 214—215 ; HN, t. I, p. 141 ; AT, pp. 151—152.
4) S, pp. 150—151 ; CN, t. I, p. 172 ; HN, t. I, pp. 113—114 ; AT, p. 120. モンテーニュからの引用は，原二郎氏訳による。『モンテーニュ Ⅱ』，筑摩書房「世界古典文学全集」p. 87.

る者と呼んだりするからである。それにセネカの徳は彼自身の著作の中にきわめて強烈に現われているし，金持だったとか，極端な浪費家だったとかいう非難に対する弁解もそこにはっきりと出ているから，私は逆に，いかなる反対の証言も信用する気になれないのである。それにこのような事柄については，ギリシア人や外国人の歴史家を信用するほうがいっそう理にかなっている。ところでタキトゥスやその他の歴史家は，彼の生涯と死について非常な尊敬をこめて語り，彼を何事にもきわめて有能で有徳な人として描いている。そこで私は，ディオンの判断に対しては，次の異論の余地のない非難だけをあげておく。ディオンはローマのことについては，きわめて病的な考え方をもっていて，ポンペイウスをけなしてアントニウスを支持しようとしたと〔傍点は原文イタリック体の語〕。

ディドロは『セネカ論』において，セネカの生涯にかんする史実の大半を，「崇高で深遠な著作家」[1] タキトゥスから借用している。彼は，セネカの死の場面を『年代記』から翻訳したあと，次のようなことばでタキトゥスを賛美している[2]。

われわれは，あえて無謀を犯すのでなければ——，冒瀆を犯すのでなければ，といいかけたところだが——ただの一語といえども彼につけ加えたり，彼から削除したりできなかったろう。もし彼から奪ったものがあるとすれば，それは簡潔さとエネルギーであるが，それもわれわれの意志に反してであることは，読者にもわかっていただけると思う。

『セネカ論』の読者は，脚注のいたるところに，ディドロの次のただし書きを発見する。「タキトゥスは，ここでもまた私の保証人である。私は彼のことばを要約するだけだ」[3] と。そればかりでなく，ディドロはしばしば，断わりなしに，タキトゥスを翻訳して自分自身の本文中に挿入し，現在であれば，おそらく剽窃が問題にされるようなことまでしている。これにかんして，ディドロ死後の版本Nの注のなかで，編者ネジョンは，「ディドロはしばしばタキトゥスを翻訳しているだけだ。彼はそのたびに，そのことを断わるべきだったろう」[4] とさえ書いている。

1) S, pp. 201—202 ; CN, t. I, p. 206 ; HN, t. I, p. 135 ; AT, p. 144.
2) S, pp. 202—203 ; CN, t. I, p. 206 ; HN, t. I, pp. 135—136 ; AT, p. 144.
3) たとえば，S, p. 55, note (87) ; CN, t. I, p. 294, note (85) ; HN, t. I, p. 168, note (85) ; AT, p. 42.
4) N, p. 134, note (1).

ディドロにとっては，この偉大な歴史家タキトゥスおよびタキトゥスを支持するモンテーニュの証言の前には，ディオンや，クシフィリヌスの告発は，いかなる意味ももちえなかったのである。

3. 人間性のための弁明(一)——人間的弱点の容認

ユーリアとの関係　ディドロは，セネカに着せられた罪状の幾つかをまず事実の有無を吟味する立場から反駁，否認した。だがもし，セネカに過失があった場合，彼は罪を犯した人間としてあくまで弾劾されねばならないのだろうか。

ディドロは，その場合においてすら，なおかつセネカのために弁明することが可能であると考えている。この種の弁護を，ディドロは先の２つの告発——ユーリアと不義の関係をもったという告発と，『ポリュビウス慰藉文』を書いたという告発——について試みる。すなわち，セネカの側に告発されるような事実があったと「仮定」した上で，なおかつ彼の立場を擁護するのである。

まず，ユーリアとの関係の問題にかんするディドロの主張から見ていこう。「ユーリアがセネカに愛をうちあけたか，それとも，セネカが宮廷のだて男たちにまじって，ユーリアの心を征服しようと試み，成功した」と仮定した場合，セネカははたして悪人として断罪されるべきかどうか[1]。

ディドロは，彼が悪人であることを否認する。なぜなら，セネカが，生涯の間に１度ユーリアと不義を犯したことがあったとしても，それはたんに，彼にもまた「愚かしい瞬間」，「弱さを見せた日」があったという事実を示しているにすぎないからである[2]。

「人間にたいして，あるいは賢者にたいしてさえ，徳の道で，１度もよろめいてはならないと要求できようか」とディドロはいう。あの賢者ディオゲネスすら，青年時代に貨幣を変造したことがあるのだから[3]。

> 誠実で謙虚なセネカは，自分が真の幸福の道を知ったのはずっとのちになってからであり，道を踏みはずすのにあきたから，真の幸福の道を他人に教えるのだ，と無邪気に告白している。彼の教訓を躊躇せずに学ぼう。情念にうちかち，状況の誘惑に抵抗するために，彼がどれほど努力したかが，経験によって理解できるなら，寛容になろう。そして，自分の同類を見いだすために，誠実なひとよりも，もっと残酷に他人

1) S, pp. 50—51 ; CN, t. I, p. 33 ; AT, p. 40.
2) *Ibid.*
3) S, p. 51 ; CN,t. I, p. 46 ; HN, t. I, p. 33 ; AT, p. 40.

を告発する退廃した人間を模倣しないようにしよう[1]〔傍点中川〕。

このことばのなかで主張されているのは，ディドロ自身の人生「経験」によって獲得された，他者の弱点にたいする「寛容」の立場である。彼のセネカ弁護は，ここではたんなる罪状の真偽の客観的吟味という次元から，より主体的なセネカ擁護の次元にまで深められている，ということができよう。

『ポリュビウス慰藉文』　このディドロの立場は，セネカが『ポリュビウス慰藉文』の作者であると仮定した場合の彼の弁護のうちにもおなじように認められる。

まずディドロは，セネカがこの『慰藉文』を書いた時の状況を想像する。——「波濤に洗われたコルシカの島と岩礁。」セネカは，ある日突然，父，友人，祖国からもぎ離される。病弱な体で，やり甲斐のある仕事も，気晴しの種もない3年間。島では，妻と息子ひとりを失う[2]。

この状況のなかで，セネカは「悲しく辛い生活に圧しつぶされた」にちがいない。その時彼は，ポリュビウスあてに手紙を送り，そのなかで，「皇帝の憐みをひくために，自分の悲惨さを誇張した」のであろう[3]。

ディドロはここで，セネカを告発するひとたちに問いかける。「自然が不幸な人間に思いつかせる以外のことを，なにか彼がしたとでもいうのだろうか」と。そして彼は，「もっとも偉大な人物でさえ，常に称賛に値するとは限らない」という事実を，人間的真理として主張する[4]。ディドロは，別のところで，「人間に余り多くを要求しすぎるのは，彼からなにもえられなくする道ではなかろうか」[5]と，語っているが，これこそディドロのセネカ弁護における「寛容」の立場にほかならない。

4. 人間性のための弁明㈡——裁かれる人間への自己投入

裁く人間の立場への問いかけ　ディドロは，人間的弱点にたいする「寛容」の立場から，『ポリュビウス慰藉文』の作者としてのセネカを弁護したあと，セネカの告発者にたいして，次の忠告を投げかける[6]。

1) *Ibid.*
2) S, p. 74 ; CN, t. I, p. 61 ; HN, t. I, p. 43 ; AT, p. 50.
3) *Ibid.*
4) S, pp. 74—75 ; CN, t. I, p. 62 ; HN, t. I, p. 43 ; AT, p. 51.
5) S, p. 465 ; CN, t. II, p. 236 ; HN, t. II, p. 155 ; AT, p. 344.
6) S, p. 75; CN, t. I, p. 62 ; HN, t. I, p. 44 ; AT, p. 51.

われわれは，豪奢なテーブルを離れると，美事な庭園に足をはこんで花の香をかぎ，木蔭の涼気を味わう。あるいは気候がきびしい時には，充分に暖めた室内で衝立を立てまわし，そのなかに閉じこもる。鳥の綿毛でふかふかにしたクッションに身を横たえて腹ごなしをする。そんな時に，われわれはセネカを裁くのだ。われわれはコルシカ島で生活しているのでもなければ，3年前からそこで生活しているのでもなく，またひとりぼっちでそこで生活しているのでもない。批評家諸氏よ。そんなにきびしい態度をとってはいけない。諸君が，セネカより立派に振舞えたとは思えないからだ。

セネカを告発する「批評家」たちとは逆に，ディドロは常に裁かれるセネカの立場に立とうとする。だから彼は，『ポリュビウス慰藉文』にたいして「極度の軽蔑」を示したある「現代作家」にたいして，こう反論している。「私の考えでは，セネカがこの『慰藉文』を書いたと仮定した場合ですら，もし彼〔この「現代作家」〕が状況を吟味し，コルシカ島に身をおいてみて，哲学者になにを要求しうるかということよりも，人間性がどういう行為をなしうるかということを考察していれば，そんなにきびしい態度はとれなかったろう」[1]と。

ディドロのセネカ弁護は，このように非難者にたいして，セネカの立場に身をおくことを要求することによって，もっとも深い——もっとも主体的な——次元に達している。この種の弁護論の典型的な実例を次に検討しよう。

ネロのアグリッピーナ殺害事件　史上余りにも有名なネロの母親殺し，アグリッピーナ殺害事件において，セネカは次の2点で非難されている。

(1)　ネロは，ミーセーヌム艦隊長官アニケトゥスの意見にしたがって「〔元〕皇妃の居間の，鉛をのせた天井が彼女の頭上に落下し，同時に船倉が彼女の足もとに口を開くような仕掛けをした船」に母親を乗せ，バーイアエ湖の上で彼女を殺害しようと計画する。だが天井は崩壊したものの彼女は「寝台の頑丈な天蓋のために」一命をとりとめ，しかも「船底の仕掛け」がうまく働かなかったためにこの計画は失敗する。狼狽したネロは，セネカと護衛隊長ブッルスを呼びつけ，「おまえたちの首にかけて，事件の始末をつけることを考えよ」と命令する。結局ブッルスが「あなたのアニケトゥスが，あなたに約束いたしましたこと〔アグリッピナ殺害〕を，やりとげてくれないでしょうか」と助言したので，ネロはアニケトゥスに母親殺しをやりとげるように厳命する。——この時セネカ（およびブッルスが），ネロの母親殺しに「弱い抵抗」しか示さなかっ

1) S, p. 468 ; CN, t. II, pp. 238—239 ; HN, t. II, pp. 156—157 ; AT, p. 346.

たという非難[1]。

(2) アニケトウスによるアグリッピーナ殺害が成功したあと，ネロはナポリにひきこもる。——この時，セネカが元老院あてのネロの手紙を口述するというような「不謹慎」をおかしたという非難[2]（すなわち，アグリッピーナを攻撃し，ネロを正当化した「弁明の手紙」を書いたという非難）。

この２点の非難にたいして，ディドロは次のようにセネカを弁護する。

(1) ネロの母親殺しに反対しなかったという非難にたいする弁護——この非難にたいして，ディドロは，ネロから呼びつけられ，母親殺しの計画とその失敗をはじめてきかされ，「恐怖」にとらえられたセネカとブッルスの状態を想像せよという[3]。

> 彼らが相手にせねばならないのがどういう君主だったかということを忘れ，また君主と語る時には友人と語る場合のようにはいかず，ましてネロと語る時には，他の君主と語る場合のようにはいかない，ということを忘れるなら，悪い運命がネロに近づけた正直な人間の立場と振舞いを正しく判断できないだろう。

ネロの前で，セネカとブッルスは「深い恐怖」をあらわしてしまった。この「恐怖」は，それだけで，ネロの母親殺しにたいする道徳的非難を示している。この「恐怖」それ自体で，２人はすでにネロの目には死刑に値する[4]。

「このような状況」のもとでは，「話者の語調，目差し，挙動」までをも思い浮かべなければ，会話のほんとうの重味は理解できない。まずわれわれは，「セネカの顔に驚愕」を，「ブッルスの顔に憤慨」を読みとらねばならないのである。そして，その上でもなおセネカとブッルスに彼らの「弱い抵抗」を非難しうるものかどうか考えてみよ，というのが(1)の非難にたいするディドロの弁護である[5]。

(2) セネカが元老院あての手紙を書くという「不謹慎」をおかしたという非難にたいする弁護——セネカはアグリッピーナ殺害事件のあと確かに，ネロの名で元老院あての手紙を執筆している。そのなかで彼は，次のような理由をあ

1) S, pp. 130—137 ; CN, t. I, pp. 146—153 ; HN, t. I, pp. 97—102 ; AT, pp. 104—109.
2) S, p. 146 ; CN, t. I, p. 169 ; HN, t. I, p. 112 ; AT, p. 118.
3) S, p. 137 ; CN, t. I, p. 154 ; HN, t. I, p. 102 ; AT, p. 109.
4) S, pp. 137—138 ; CN, t. I, p. 154 ; HN, t. I, p. 102 ; AT, p. 109.
5) *Ibid.*

げて，彼女を非難し，かつその死を喜んでいる。

アグリッピーナは，「〔彼女の〕解放奴隷であり，かつ一番の腹心の，暗殺者アゲリヌス」を示唆して，皇帝暗殺を計画したこと。この計画が失敗するや，「〔彼女は〕この犯罪を吹きこんだのとおなじ激情にかられて自殺した」こと。「護衛隊兵士」，「元老院議員と人民」とをすべて自分に服従させようと画策したこと。元老院で，自ら外国使節を謁見し，「自らの意向」を示そうとしたこと。「クラウディウス治下のすべての混乱」の真因は彼女であったこと。したがって「彼女の死は，ローマの幸運」であったこと[1]。

しかし，セネカはどのような意図のもとに，この手紙を書いたのだろうか。ディドロは，ひとたび「この忌わしい大罪」が犯されてしまった以上，残された「救済策」は「暴動と陰謀によって，ひき起こされる別の大罪〔皇帝にたいする反乱〕を，可能な限り防止する」ことだけであったという。なぜなら，元老院，すなわち「親属殺し〔義弟ブリタンニクスの殺害者ネロ〕に祝辞を与えたことのある，権威も，魂も，羞恥も，尊厳もない」元老院はネロの意のままにされていたけれども，「〔その反抗を〕恐れねばならない正直な人間がまだ残っている市民階級」は，事情によっては，ネロに反抗して立ちあがりかねないからであった。こういう状況のもとで市民階級に事態を説明し，内乱を防止すること。これが，元老院あての手紙を執筆したセネカの意図であったとディドロは主張する[2]。

もしこの時，セネカが「弁明の手紙」を書くことを拒否したと仮定しよう。その時なにが生じたであろうか。セネカの殺害にはじまり，大量の虐殺——妻，兄弟，友人，および正直な市民たちの殺戮——が続いたに違いないとディドロはいう。

なぜなら，「教師」，「監察官」として，ネロににらみをきかせていたこの賢者にたいして，「相手をひっかけてやろうと狙いをつけた虎」は，こう考えながら罠をしかけたのである。——「さあ，この男を2つの選択の間に立たせてやろう。拒否すれば死，服従すれば不名誉という選択の間に」と。ディドロによれば，ネロの予想に反して，セネカは生き続け，「徳の権威ある姿」によってネロを苦しめ続ける。「彼は，死ぬよりも生きるほうが，勇気のいる場合が

1) S, pp. 145—146 ; CN, t. I, pp. 168—169 ; HN, t. I, pp. 111—112 ; AT, pp. 117—118.
2) S, pp. 148—149 ; CN, t. I, p. 171 ; HN, t. I, p. 113 ; AT, p. 119.

あることを知っている」のである[1]。

ディドロは，以上の考察を通して，(2)の非難にたいしても，セネカの行為を弁護するのみならず，もし自分がセネカから助言を求められれば，「第1の犯罪〔アグリピーナ殺害〕に第2の犯罪〔セネカ殺害〕を加えても，なんの利益があろう」と答えるだろうとのべて，セネカが元老院あての手紙を執筆したことを，進んで是認しているのである[2]。

裁かれる人間の立場への自己投入　ディドロは，先に触れたド・サシが『名誉論』のなかで，「セネカは，アグリッピーナ殺害を称賛した」と主張しているのにたいして，「この主張には根拠がない」と反駁し，セネカが元老院あての手紙を書いたのは，ただ「アグリッピーナ殺害にひき続いておこる殺害を予防する」意図からであった，と先ほどのべた彼の弁護論を繰り返す。そのあと，彼は次のようにのべている[3]。

> これらの〔セネカの〕行為を，正しく判断できるのは，身の安全が周囲を支配している静かな隠居所の奥や，書見台の前ではない。野獣の巣窟にはいって，目を光らせ，爪をむきだし，半ば開いた，いとわしい口からは母親〔アグリピーナ〕の血をしたたらせている野獣の前に身をおくか，あるいは身をおいていると想像してみなければならない。野獣の前に身をおいたまま，野獣に向ってこういわねばならない。「おまえは，私の体を引き裂こうとしている。きっとそうするだろう。だが私はおまえが命令することをなにもする気がない」と。〔安全な場所から〕ひとの危険にいどみ，大胆になれと命令し，その生命を自分の好きなように扱うのはなんと簡単なことだろう。

ここには，本節冒頭（「裁く人間の立場への問いかけ」）の引用文よりも，さ

1) S, pp. 507—508 ; CN, t. II, pp. 277—278 ; HN, t. II, pp. 181—182 ; AT, p. 375.

2) S, pp. 508—509 ; CN, t. II, p. 278 ; HN, t. II, p. 182 ; AT, p. 375. ディドロは，アグリッピーナ殺害事件を正当化したセネカを，上記のような形で弁護しているのであるが，レヴァンテールはこのディドロの弁護の仕方について次のような批判を加えている。「〔ディドロの証言のなかには〕彼の意に反して，セネカを断罪している箇所が多い。たとえば，〔セネカによる〕アグリッピーナ殺害の正当化を問題にした時のことにしても，〔ディドロは〕国家的理由を口実としてもち出したり，既成事実の追認が問題だったのだと主張したりするが，ほとんど読者を納得させない。そして，読者は，セネカはこのような状況下において，〔……〕まったく場違いな人物だという印象を否定しがたいのである。」(LS, p. 506.) しかし，ここで問題なのは，セネカが「事実」としてアグリッピーナ殺害を正当化したかどうかという点ではない。たとえ「事実」として，セネカが過ちをおかしていたとしても，彼がおかれていた状況を顧慮すれば——すなわち，裁く人間が「裁かれる人間の立場への自己投入」を行なえば——その過ちは「人間性」の名によって弁護可能だという点こそを，ディドロは問題にしているのである。以下の私の説明を参照されたい。

3) S, pp. 234—235 ; CN, t. I, pp. 236—237 ; HN, t. I, pp. 154—155 ; AT, p. 165—166.

らに明確に，裁かれる人間の立場に「身をおく」必要性が語られている。この裁かれる人間との同一化の意識こそが，ディドロのセネカ弁護論の核心であった。裁かれる人間への「寛容」，あるいは告発された事実と，告発者の人格の信憑性の吟味などは，すべて，ディドロのこの基本的意識を前提として，理解されるべきものである。

ボンヴィルは，ディドロのセネカ弁護論の特徴について，次のようにのべている[1)]。

> 一般的にいえば，セネカにたいする攻撃は，彼の行為が善か悪かという割り切った立場からなされており，これにたいしてディドロは相対主義的見地に立つことを要請している。彼の弁護論は，道徳的行為の〔善悪の〕曖昧さと政治的必要性の論議に基づいており，彼はこれらの告発が証拠不充分と，事実の誤解のゆえに却下されるべきであると要求する。

この結論は，その主張自体としては間違っているわけではない。しかしディドロの立場を，たんに「相対主義的見地」と規定することは，「誤解」をまねきかねないであろう。

ディドロのセネカ弁護には，幾つかの次元，あるいは層があり，それらは，たんなる罪状の真偽の客観吟味という表層から，告発者の人格の信憑性の吟味という層をへて，セネカの人間的弱点の弁護という深い層にいたるまで，すべてが最深層にあるもっとも主体的な核——被告セネカとの同一化の意識——を中心として，いわば構造化されているからである。そしてこのセネカのための弁明者ディドロの意識の構造は，以上の私の考察を通して，ほぼ明らかにされたことと思う。

第Ⅲ章　セネカとの対話

1. 道　　徳

セネカとの対話　ディドロは，『セネカ論』初版の前半で，セネカの生涯を検討し，彼の行為の弁護論を展開したあと，後半（§. LXIV—§. CIX）において，セネカの著作を読者に紹介しつつ，ディドロ自身の注釈を加えている。『セネカ論』前半の対象がセネカの行為であったとすれば，後半の対象は彼の思想と

1) D. A. BONNEVILLE, *Diderot's* Vie de Sénèque, p. 15.

言説であるということができるだろう。

ディドロによれば，『セネカ論』の後半の「短い作品要約」の意図は，「セネカの魂の奥底と，私生活の秘密と，彼の思弁哲学と実践哲学の基礎をなす原則とをはっきり示すこと」だという。彼は，セネカの著作について「偏見なしに，公平に」語ろうとのべつつ，同時に「時として彼に異論をはさむ」哲学者の特権を捨てる気がないことを強調する[1]。

> 〔私は〕セネカの道徳率を一般化したり，限定したり　注釈したり，私流に応用したり，時にはそれを確認したり，時にはそれに反駁したりする。ある所では，批評家の前に哲学者〔セネカ〕を立たせて，私はそのうしろに隠れ，また別の所では，逆の役割りをして，私自身が進んで矢面に立ち，セネカを脊後にかばって，余り傷つかないようにする[2]。

このように，『セネカ論』初版後半は，セネカの著作をきっかけとした，ディドロとセネカおよびディドロとセネカの批判者間の一種の対話の様相をおびてくる。そしてまさにこの両者の対話を通して，読者は「セネカの魂の奥底と，私生活の秘密と，彼の思弁哲学と実践哲学の基礎をなす原則」と同時に，より多くディドロ自身の内奥に触れるはずである。

ディドロは，セネカの著作の検討に際しては，ラグランジュ訳『セネカ著作集』における作品の配列順序——編者ネジョンの配列順序——に従うといっている。しかし私は，この外面的順序によらないで，むしろディドロの問題意識の内面的秩序に従って，ディドロ対セネカの対話を考察していこうと思う。

ディドロによれば，「哲学者」の重要な課題は，「宗教，政治，および道徳について，自由に意見を表明すること」であるという。人類が，原始の無知蒙昧の状態を脱して，18世紀の開明された水準にまで到達しえたのは，この3大領域における哲学者の努力の結果であった。このことを，ディドロはさらに具体的に，次のように語る[3]。

「宗教」——もし哲学者が，宗教にかんして18世紀まで沈黙をまもり続けていたとすれば，「諸国民は，いまだにもっとも野蛮で危険な迷信のなかに沈みこんでいるはずである」。

1) S, p. 273 ; CN, t. II, p. 2 ; HN, t. II, p. 3 ; AT, p. 199.
2) *Ibid.*
3) S, pp. 324—326 ; CN, t. II, pp. 83—84 ; HN, t. II, pp. 57—58 ; AT, p. 249.

「政治」――もし哲学者が，政治にかんして18世紀まで沈黙をまもり続けていたとすれば，「われわれはいまだに封建的政府の桎梏のもとに呻吟しているはずである」。全人類は，ほんの小数の「主人」と絶対多数の「奴隷」とに2分されているはずである。人類は「法」をもたないか，それとも「悪法」しかもたない，みじめな状況に追いこまれているはずである。そして「社会の幸福と国家の隆盛にとっての最大の課題」を専心考察したひとたち――アルジャーノン・シドニ，ロック，モンテスキュー――は，18世紀においては，「悪い市民」のなかに数えられているはずである。

「道徳」――もし哲学者が，道徳にかんして18世紀まで沈黙をまもり続けていたとすれば，「われわれは，いまだに徳とはなにか，悪徳とはなにかがわからずにいるはずである」[1)]。

これら「宗教」，「政治」，「道徳」の重要課題に答えるのを禁止することは，「無知と野蛮の支配を強化する」ことになる。そしてこのような悪い状態と戦い，社会に啓蒙と進歩をもたらす努力を重ねるのが，哲学者の使命である。ここに，ディドロにおける哲学のきわめて実践的な性格がある。

私は以下の叙述を，このディドロの問題意識――哲学者の3大課題――を追求しつつ，展開していくつもりである。ただし，若くして神を否定したディドロにおいては，超越的な存在者への関心――宗教――は，もはやその意味を失っている。しかし，だからといって彼の関心は，現実の世界――現実の道徳と政治の世界――だけに埋没してしまっているわけではない。ディドロの視線は，過去の批判を媒介にした現在の批判を契機として，はるかな未来にむけられていく。そして，この現実を離れた未来の世界のなかに，ディドロの「不死」への願望が投影され，そこに後世のひとびとによって自分の名誉が必ず弁護さ

1) ディドロにおいて，道徳と政治は密接に関連している。これにかんして，ルッポルは次のようにいう。「政治とは国家の道徳であり，道徳とは私生活的，個人的政治である，とマブリは語っているが，それはこの時代通有の考え方を表明したものである。道徳の領域を社会関係にまで拡張することは，ディドロにとっても無縁ではない。道徳の原則が政治構造を基礎づけねばならない。それゆえにこそ，彼の所説を私的道徳と公的道徳，個人的倫理と社会的倫理とに区別することが正当化されるのである。」（傍点は原文がイタリック体の語）I. K. LUPPOL, *Diderot*, Paris, Editions Sociales Internationales, 1936, p. 304.
ディドロにおいては，まったく個人的な行為――主として生物学的次元での欲求の充足行為（ただしその行為の結果が他者とかかわりをもってはならない）――にかんしては，道徳は成立しない。したがって道徳は，たとえそれが「私的道徳」であっても，すべて人間の社会生活の次元で成立する。だから，プルーストの次の主張は正当である。「〔ディドロにおいては〕道徳の領域は，人間間の関係の領域――より正確にいえば，社会の存続と統一にとって重要な諸関係の領域――と一致する。そこから，道徳はほぼ完全に，もっとも広義の政治と融合するにいたるのである。」Jacques PROSUT, *Diderot et l'Encyclopédie*, Paris, Armand Colin, 1962, p. 339.

れ，顕彰されるにちがいないという期待が成立する。その時読者は，ディドロにおけるもっとも「宗教的」な問題に触れることができるのである。

道徳への関心　ディドロは，「賢明で開明された人間の生活は，真理の探究と徳の実践のためにすごされる」という[1]。ここでディドロが「真理の探求」という時，それは自然科学的真理の探求であると同時に，より多く，「義務の認識と徳の実践」とに直接的関係をもつ「あの重要な学問」――「道徳」――の真理の探求を意味している[2]。

『セネカ論』初版におけるディドロの関心が，広い意味での「道徳」の問題に集中していることは，ディドロ自身が，この著作の前半末尾ではっきり認めている[3]。

> 〔私が「人生の経験」を重ね，「年令の成熟」を加えてきた晩年に，〕もし誰かが私に「今なにをなさっていますか」ときいたなら，「〔クインティリアヌスの〕『有弁家教育論』を読んでいます」とは答えなかっただろう。そうではなくて，ホラティウスとともに，「真実，誠実，礼譲とはなにかを探求していて，この研究にかかり切りです」と答えただろう。

ディドロが『セネカ論』初版を執筆するにいたった外面的契機は，すでに第一部で検討した通りであるが，彼がこの仕事をひきうけた内面的動機は，セネカの生涯と著作のうちに，「正しく生きる」ことを志し，「正しく生きる」とはなにかを生涯にわたって反省し続けた人間のモデルを発見しようと思いたったからにほかならない。

読者はここに『セネカ論』初版における――そしてより広くディドロの晩年における――道徳への関心の優越を認めるであろう。この道徳への関心の優越は，晩年のディドロにおける「善行のひと」と「天才」との対比，および前者の優越性の確認のなかに，きわめて明瞭に表現されている。事実ディドロは，この作品の末尾で，自分の考えが「天才」に同感されるより，むしろ「善行のひと」に賛成してもらうほうが嬉しいとのべている[4]。

ディドロがその最初の文学者としての仕事，すなわち，シャフツベリの自由

1) S, p. 293 ; CN, t. II, p. 29 ; HN, t. II, p. 22 ; AT, p. 217.
2) S, p. 303 ; CN, t. II, p. 40 ; HN, t. II, p. 29 ; AT, p. 223.
3) S, p. 267 ; CN, t. I, p. 280 ; HN, t. I, p. 183 ; AT, p. 196.
4) S, p. 518 [HN, t. II, p. 185] ; CN, t. I, p. 4 [HN, t. I, p. 7] ; AT, p. 10.

訳『道徳哲学原理，あるいは人間の真価と徳論』（1745年）以来，一貫して道徳の問題に関心をもち続けていたことはいうまでもない（詳しくは本論第四部参照）が，この関心は，彼の最後の作品『セネカ論』において，いわばその極点に達しているのである。

幸福になる道　ディドロは，セネカの著作集を読むうちに，このローマの哲学者が兄ノウァートゥス（ガッリオ）にあてて書いた作品『幸福な生活について』のなかで，次のことばを発見する。「わが兄ガッリオよ，ひとは皆幸福になりたいと願っている。だが幸福がなにからなりたっているかを調べることになると，皆が盲目だ。」[1]

デイドロはこれにたいして，こう注釈を加える。「われわれの哲学者〔セネカ〕は，道徳の真の基礎を偶然にも発見した。厳密にいえば，ただひとつの義務しかない。それは幸福になることだ。またただひとつの徳しかない。それは正義だ」と[2]。この観念は晩年のディドロが，『セネカ論』初版以前に，すでに把握していたものであった。

すなわち，ロシアに滞在中に執筆した『エカテリーナ２世との対談』の覚書（1773年）のなかには上のことばと類似した，次の表現が見られる。「ただひとつの徳しかない。すなわち正義だ。ただひとつの義務がある。すなわち幸福になることだ。ただひとつの結論がある。すなわち時には生命を顧みないことだ。」[3]（またそのあとでは，次のようにいう。「ただひとつの義務しかない。それは幸福になることだ。自然な，克服しがたい，譲り渡すことの不可能な私の傾向は，幸福になることなのだから，それが私の真の義務の唯一の源であり，一切の正しい法制の基礎である。」）[4] さらに『生理学の基礎』（1774—1780年）の末尾にもほぼおなじような次の表現が認められる。「ただひとつの徳しかない。すなわち正義だ。ただひとつの義務しかない。すなわち幸福になることだ。ただひとつの結論しかない。すなわち生命を大事にしすぎないことと死を恐れないことだ。」[5]

ところで，もし「ただひとつの義務」が「幸福になること」であるとすれば，当然どうすれば人間は「幸福になること」ができるかが問われなければならな

1) S, p. 418 ; CN, t. II, p. 185 ; HN, t. II, p. 123 ; AT, p. 312.
2) *Ibid.*
3) OP, pp. 320—321.
4) *Ibid.*
5) EP, p. 308 ; AT, t. IX, p. 429.

い。かつてのシャフツベリの翻訳の結末は，「人間は徳によってしか幸福になることができず，徳がなければ，不幸になるばかりである。したがって，徳は善であり，したがってまた悪徳は，社会と社会の各構成員の悪である」[1] ということばで終っていたが，ディドロは，そのおなじ表現をここでもとりあげ，「徳がなければ幸福はない」と主張する。

彼はまた『セネカ論』初版の別の箇所で，人間が幸福になるための条件を次のような対話で示している[2]。

> 「幸福とはなにか。……それは大衆が決定する問題ではない。」「大衆とはなにか。」「奴隷の群だ。幸福になるためには，自由でなければならない。幸福は自分の義務以外の主人をもつ人間には与えられない。」「だが義務というものは，命令的ではないのか。どうせ誰かに使われるのなら，どんな主人に使われようとおなじことではないのか。」「とんでもない。主人が誰かということは重大な問題だ。義務という主人から解放されようとすれば，必ず不幸に陥ってしまう。人間が他の一切の鎖を断ち切ることができるのは，義務の鎖によってなのだ。」

別のことばでいえば，幸福とは「思考と行為とを，いつも自然法則に一致させること」にほかならない[3]。ディドロは，ここでは，はっきりとストア主義の立場に立っている。そして，ストア主義こそ「ことばの完全な意味における自由論」であると主張する。だからもしこの教説が地球上にあまねく広がっていれば，そこにはもはや「奴隷も暴君も存在しなくなって」いたはずだという。

しかしディドロは，完全にストア主義者になりきってしまうわけではない。セネカが理解するストア主義的「幸福人」は，徳だけを善として追求し，一切の悪徳を悪として退ける。すべての「出来事」に心を動かされることがなく，自分の意志で獲得したり，維持したりできないものを軽蔑する。さらに，このストア主義者にとっては，「官能的快楽の軽蔑それ自体が，官能的快楽」なのである[4]。

確かにこれは「完全な人間」である。だがディドロは，どのような形であれ，人間の自然的欲望や情念が，一方的に禁止されることに反対する。彼はここで，

1) AT, t. I, p. 121.
2) S, p. 422 ; CN, t. II, p. 188 ; HN, t. II, p. 125 ; AT, p. 314.
3) S, p. 423 ; CN, t. II, p. 189 ; HN, t. II, p. 125 ; AT, p. 314.
4) S, pp. 423-424 ; CN, t. II, p. 190 ; HN, t. II, p. 126 ; AT, p. 315.

ストア主義にそむいて，不完全な人間の擁護のために立ちあがる。「〔セネカのいう〕完全な人間は，はたして自然に従って生きる人間であろうか。」[1]

たとえばディドロは，セネカがセレーヌスにあてて書いた『賢者の心の堅固さについて』——「ストア主義の美しい弁護論」であり，しかも「ストア哲学の思弁における厳格さと実践における不可能性の証拠」——のなかで，メガラ派の哲学者スティルポンの次のことばを発見して愕然とする。すなわち彼は，戦乱の災禍に遭遇し，「瓦解した家」からやっと逃れでたあと，「虐殺された同胞の血の川に足をひたし」ながら平然としてこういう。「私は祖国が隷属状態に落ちこむのを見た。娘たちは，私の手もとから奪われていった。〔……〕だが，そんなことがこの私にとってどうだというのだ。」[2]

ディドロは，このスティルポンと，彼の意見に賛成するセネカにたいして，「怒りを感じる」。ディドロによれば，スティルポンが「私はなにも失っていない」というのは，彼が平生から，普通の人間にとっては，大切で神聖なものから，まったく「孤立して」生活していたからだという。もしストア派にとって，肉親や兄弟が，平然と脱ぎ捨てられる衣服程度の価値しかもたないのなら，「私はストア主義者ではないし，そのことを誇りに思う」とディドロは叫ぶ。「おまえのような賢者が，たった一度しか出現しないというのなら，それでも結構だ。だが，もしこんな賢者を模倣しなければならないというのなら，私は決して賢者にならないと誓う。」[3]

ここでもまた読者は，ディドロがセネカにおいて人間的弱点を弁護した時とおなじ立場にであう。「幸福になる」道を探求するディドロは，「自然の法則」への一致という基本的主張において，セネカのストア主義に賛成しつつも，それが人間内部の「自然」を抑圧し，人間内部の「弱点」を無視する時，たちまちそれに反撥する[4]。

> どこから，このストア主義者たちの不寛容が生じるのか。極端な信心家の不寛容とおなじ源からだ。彼らは不機嫌だ。なぜなら彼らは自然と戦い，禁慾して苦しんでいるからだ。

1) *Ibid.*
2) S, pp. 464—465 ; CN, t. II, p. 234 ; HN, t. II, p. 154 ; AT, pp. 343—344.
3) *Ibid.*
4) S, p. 443 ; CN, t. II, p. 208 ; HN, t. II, p. 137 ; AT, p. 326.

ディドロはさらに，なぜ「ストア主義者たち」が，「より厳格さの少ない道徳」を信奉する人間にたいして，「憎悪」を抱き続けているかという理由を説明する。（ここで読者は「ストア主義者」ということばの背後に，厳格なカトリック僧と同時に，ルソーの姿を想起すべきであろう。）それは，自分が禁欲している「幸福」を他人が味っているのを目撃して，「ひそかな嫉妬」を禁じえないからである。のみならずまた，こうして現実の幸福を断念した報酬として，来世でえられる予定の「至福」にたいしてすら，確信がもてないからなのである[1]。

人間の自然の善　ディドロのストア主義的厳格主義にたいする反撥は，なにに由来しているのであろうか。それは，人間の自然（人間性）に内在する善性にたいする，彼の深い信頼に由来している。彼は，「哲学者に泥をかける人間は，一種の不信心家である」というセネカの『ルーキーリウスあての書簡』（第14信）中のことばをうけて，「われわれを侮辱しようとするのは卑劣漢だけ」だから，彼らの称賛に喜んではならないと同時に，彼らの侮辱に傷つけられてもいけない，と主張する[2]。

背徳漢を，彼の内心の「ひそかな恥辱」に委ねておこう，とディドロはいう。だが背徳漢は，「恥辱」を感じるだろうか。――ディドロは，「然り」という。彼によれば，権力者から金をもらって，誠実なひとびとを中傷していたある「雇われ破廉恥漢」でさえ，そんなことをして，自分は決して満足してはいないと彼に告白したという。「過った行為がうける罰のひとつは，自分自身で不愉快になることである。」[3]

しかし，ディドロの人間の善性にたいする信頼は，さらに徹底している。彼は，『セネカ論』初版の前半の終りで，ウィンデックスの反乱が起こり，元老院から「祖国の敵」と宣言されたネロが，お供のエパプロディトゥースの介添によって，ようやく自殺をとげた情景を語ったあと，次のように自問している。「天がセネカを善人としてこの世に生みだした時，〔それだけで〕彼は充分な報賞をうけ，また天がネロを悪人としてこの世に生みだした時，〔それだけで〕彼は充分な罰を受けたというのは，真実だろうか」と。この問にたいしてディドロは，「そうだ，その通りだ」と自答する。そして彼はさらにこう続

1) *Ibid.*
2) S, p. 285 ; CN, t. II, p. 20 ; HN, t. II, p. 15 ; AT, p. 211.
3) *Ibid.*

ける[1]。

> もし私が，幸運な悪人の運命と不運な善人の運命との，どちらかを選択せねばならないとすれば，決して躊躇したりはすまい。これほどはっきりと選択ができる理由はなんだろう。それは，善人になりたいと何度も望まなかった悪人はいないのに，善人は決して悪人になりたいと思ったことがない，という確信である。

人間の行為と言説にたいするディドロのすべての判断は，この確信に支えられている。人間の内部に存在する善性を，自由にのばすこと，そしてこの善性を抑圧するすべてのものと——悪徳と同時に，ストア主義的過度の厳格主義とも——戦うこと。これがディドロの道徳の基本的主張である。

心情の直観　ではこの道徳は，どのようにして学ぶことができるのだろうか。ディドロは，セネカの『恩恵について』に触れながら，「セネカは心情に語りかける。そして〔理性に語りかける場合に〕劣らず説得的である。というのは，心情はその明白な真理をもっているのであるから」という[2]。ここでもまた，先にのべた（本論第II章，1.「美しい魂の立場」の項参照）「魂」の論証と「知性」の論証との対比（「感情の真理」と「厳密な論証の真理」との対比）があらわれる。

ディドロによれば，道徳にかんして崇高で，深遠な事柄は，すべて古代人によって——「断片的に」ではあるが——語られているという。「〔道徳の〕原理を設定し，そこから結論をひきだすのは，熟考の結果ではなかった。それは，強くて偉大な魂の，孤立した突然の飛躍であった。」[3]

したがって，なんの教養もない未開人すら，すでに道徳がなんであるかを心得ているのである。ディドロはそのことを次のような例によって示している[4]。——たとえば，あるカライブ人は，難破したヨーロッパ人が今にも死にかけているのを発見すると，逆巻く波間に飛び込んで，自分の生命の危険をおかしてまで救出にあたったのであった。また，カイエンヌで捕えられた黒人脱走奴隷のひとりは，白人植民者から，もしおまえの仲間たちを絞め殺せば，おまえの命は助けてやろう，だがいうことを聞かなければおまえを殺してやるといわれ

1) S, p. 249 ; CN, t. I, pp. 246-247 ; HN, t. I, p. 161 ; AT, p. 172.
2) S, p. 399 ; CN, t. II, pp. 166—167 ; HN, t. II, p. 111 ; AT, p. 300.
3) S, p. 419 ; CN, t. II, p. 186 ; HN, t. II, p. 123 ; AT, p. 312.
4) S, pp. 419—420 ; CN, t. II, pp. 186-187 ; HN, t. II, p. 123 ; AT, pp. 312-313.

た時，自分で自分の手首を切り落し，血をしたたらせながら，「さあ，私に仲間の首を吊らせてごらんなさい」と答えたのであった。

これらの事実を前にして，ディドロは自問自答する。「誰がこの英雄的な感情を，奴隷の魂に植えつけたのか。学問だろうか。反省だろうか。義務の深い認識だろうか。いやそうではない」と。彼は，さらに次のように主張する[1]。

> 無知な人間にとって，道徳ほど明白で単純な学問はない。逆に，学者にとって，これほど厄介で難解な学問はない。これは原則が確立される以前に，もっとも正しく，進んだ，大胆な結論がひきだされたほとんど唯一の学問である。なぜだろうか。それは理屈がでてくるずっと以前から，英雄〔道徳的行為の実践者〕がいるからである。理屈屋を生みだすのは余暇であり，英雄を生みだすのは状況である。理屈屋は学校でつくられるが，学校が開かれるのはずっとのちになってからである。英雄は危機に際して生まれるが，危機はいつでも存在している。〔……〕庶民がすばやく感じとることを，哲学者が論証しようとすると，しばしば長い論議が必要だろう。

ディドロにおける道徳は，人間の善性への信頼の上に成立しており，しかもそれは教養のない未開人または庶民の心情の直観によって，一挙に把握されるものであった。そしてディドロは，道徳の問題にかんする限り，学識ある哲学者の論証の道よりも，むしろ無知な人間の心情の直観の立場をとろうとするのである。

弱者との同一化　「心情」の直観はどのような形で，ひとつの行為にたいして道徳的判断——善悪の判断——をくだすのであろうか。それは，その行為において，しいたげられ，苦しめられる側の人間と同一化——「連帯」——することによってである。

ディドロは次のような史実を読者に語る[2]。——ローマの政治家ピーソは，馬に飼葉を与えに行った2人の兵士のうちひとりが先に帰ってきた時に，彼が仲間をおきざりにしてきたという理由で，百人隊長に命じて死刑にさせようとした。その時もうひとりの兵士が帰ってくる。2人の兵士は抱きあって喜び，早速百人隊長と連れだってピーソの幕営に向う。だが，ピーソは直ちにこの3人に死刑を宣告する。第1の兵士は，先に死刑が宣告してあったから，第2の

1) S, pp. 421—422 ; CN, t. II, p. 188 ; HN, t. II, pp. 125 ; AT, pp. 313—314.
2) S, pp. 380—381 ; CN, t. II, pp. 142—143 ; HN, t. II, p. 96 ; AT, pp. 283—284.

兵士は，仲間を死刑にさすようなはめに追いこんだから。百人隊長は，第1の兵士をすぐに死刑にしなかったから。

ディドロは，この事実を語ったあと，「あなたの心にどんな気持ちが起こったかいってほしい。怒りが，あなたの心をとらへるのを感じないか」と読者に問う。ディドロは，この3人の人間が殺されるのを見すごすのか，と読者に向って叫ぶ。さあ兵士と一緒に，4人でピーソに飛びかかり，たとえ結果はどうなろうと彼を短剣で刺し殺そうと呼びかける。「少なくとも復讐をしてからでなければ，死なないようにしよう。」ディドロはさらにいう[1]。

> 私は血が煮えたぎるのを感じる。確かに，この瞬間，2000年前に処刑された3人の兵士のもとに私を連れて行き，私を彼らと連帯させるのが情念だということは認めよう。たとえ私が気違いだとしても誰が私の狂気を非難できよう。

ここにもまた，私が先にディドロのセネカ弁護論の特徴として指摘した，弱い——あるいは裁かれる——人間との同一化の意識が表明されていることが明らかであろう。ディドロのセネカにたいするさまざまな弁明が，すべて被告セネカとの同一化の意識を中核として構造化されていたのとおなじように，ディドロの道徳論もまた，そのすべての論証の底にある，この弱者との同一化の意識によって支えられ，構造化されているということができるだろう。そしてこの弱者との同一化の意識こそ，のちに検討するように，ディドロの暴政批判(特にアメリカ革命に立ちあがった人民との連帯)，あるいは過去の批判を媒介にした現在の人間にたいする道徳的批判の源泉をなしているのである。

ディドロにおけるこの弱者との同一化の意識は，上記引用文では，強者や権力者にたいする「怒り」の情念として裏面から表現されているが，正面からいえば，これが弱者への「同情」(«compassion») にほかならないことは，もはや断わる必要もあるまい。したがってディドロは，セネカが，「冷酷」は「厳格」の極端な形態であり，「同情」は「寛大」の極端な形態であると主張する時，はげしくこれに反対する。「苦しんでいる人間を救う時，感じやすい，同情心にみちた人間は，自分自身の心の苦しみを和げているのである。」[2]

このようなディドロの立場は，人間の内なる善性への信頼，無知な人間——

1) *Ibid.*
2) S, pp. 390—391 ; CN, t. II, pp. 155—156 ; HN, t. II, p. 104 ; AT, pp. 291—292.

未開人，庶民――の心情の直観の重視，弱者との同一化の意識といういくつかの特徴において，生涯の論敵ルソーの立場ときわめて類似しているということができる。

認識の価値　ディドロは，『セネカ論』初版後半の冒頭（§. LXIV）で予告した通り，「時には〔セネカの道徳率〕を確認したり，時にはそれを反駁したり」しながら，彼の著作を検討していくのであるが，その際，セネカと意見を異にする大きな論点が２つあらわれてくる。第１が，形而上学の評価の問題，第２が，科学と技術――特に自然科学――の評価の問題である。

形而上学の評価――セネカは，『ルーキーリウスあての書簡集』（第88信）で，「芸術の研究」は賢者にとって無用だとのべたあと，「時間がそれ自体で存在するか。時間は世界より前にはじまったか。時間は事物より前に存在していたか，それとも事物が時間より前に存在していたか」という問題の解釈こそ，賢者にとって重要な意味をもつと主張する[1]。

これにたいして，ディドロは直ちに容赦なく反駁を加える。「はっきりいって，もし知恵にとって，無益で無縁な問題があるとすれば，この問題がまさにそれだ。魂の本性にかんする論議にかんしても，おなじことがいえる」と[2]。

かつて，『自然の解釈について』（1753年初版，1754年第２版），『盲人書簡』（1749年），『ダランベールとディドロとの対話』３部作（1769年）において，宇宙の生成と進化についての壮大な情景を描きながら追求した「時間」の問題。また，かつて，シャフツベリの翻訳『人間の真価と徳論』（1745年），『おしゃべりな宝石』（1748年），『聾唖者書簡』（1751年），『百科全書』第９巻（1795年）の項目≪ライプニッツ哲学≫，『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』（1773年），『ヘムステルホイス著「人間とその諸関係にかんする手紙」の注釈』（1773年），『生理学の基礎』（1774―1780年）のなかで，あれほどの関心をもって解明しようとした「魂の本性」の問題。――『セネカ論』初版のディドロは，これらの形而上学的問題を，「知恵にとって無益で無縁な」ものとして放棄してしまうのである。

科学と技術の評価――では，科学と技術，特に自然科学の認識の評価にかんする，セネカとディドロの対立は，どのようなものであったろうか。

セネカは，『ルーキーリウスあての書簡』（第48信）で，科学と技術の認識

1) S, p. 336 ; CN, t. II, p. 97 ; HN, t. II, p. 67 ; AT, p. 257.
2) *Ibid.*

は，人間の「幸福」にとって不用であると主張する[1]。

> 誰が最初に船を建造したのか。誰が最初に芝居を上演させたのか。アウェンティーヌス丘は，昔からローマの市街区画内にあったのか。この通路は，もっと別の方法で修復すべきではなかったのか。このメダルは，古代のものか，現代のものか。どの時代に鋳造されたのか。——いったいこんなことが，人間にふさわしい研究だろうか。ひとが一生かかって学ばねばならない，幸福になる技術がまだよくわかっていないのだから，こんな愚にもつかないことにかかわりあうくらいなら，いっそなにもしないでいるほうがましではないのか。

この主張にたいしてディドロは，もしセネカの「きびしい判決」を承認すれば，無数の本を焼き捨てねばならないだろうという。彼は最後に，「義務の認識と徳の実践とに直接の関係をもたない研究は，なんでも無視しなければならないのだろうか」という疑問を提出して，それ以上の注釈を加えていないが，彼の真意はいうまでもなく明らかであろう。

かつて，ディドロは『百科全書』の編集者として，『百科全書』第5巻(1755年）の項目≪百科全書≫のなかで，次のように書いていた。「『百科全書』の目的は，地上に散在している知識を集成することである。知識の一般的体系を同時代の人間に提示するとともに，未来の人間にもこれを伝達することである。このようにして，過ぎ去った時代の業績が，来たるべき時代に無用のものとならないようにしたい。われわれの子孫が，より多くの知識を獲得すると同時に，より有徳でより幸福になるようにし，またわれわれ自身が人類にふさわしいことをしおえたのちに死んでいくようにしたい。」[2]

この立場は，『セネカ論』初版においてもほとんどそのまま維持されている。ディドロにとっては，「義務の認識と徳の実践とに直接の関係をもたない」(傍点中川）科学と技術の認識といえども，人類を「より有徳で，より幸福に」する学問——「道徳」——に「間接の」関係をもつという確信は，晩年にいたるまで変らなかったのである。（このことは，ディドロが『セネカ論』第2版において，セネカの『自然問題』にかんする意見を多数付加し，そのなかで自然科学の方法論を詳しく吟味していることからも傍証されるだろう。）

2. 政　　治

1) S, p. 303 ; CN, t. II, p. 40 ; HN, t. II, pp. 28—29 ; AT, p. 223.
2) AT, t. XIV, p. 415.

天上の賢者と地上の哲学者　セネカは，『ルーキーリウスあての書簡集』（第68巻）のなかで，「賢者の安息」について語り，賢者はこの俗事にみちた「地球の片隅」から逃れて，「無限の空間」に身を憩わせるべきであるという。「ストア主義者は，天上の高みから，法廷や高官用象牙椅子がどれほど卑俗な席であるかを，じっと眺めている。」[1]

これにたいして，ディドロは次のように抗弁する[2]。「われわれは，高官用象牙椅子や法廷から，雲の中に姿を隠すのがどれほど気違いじみた役割であるかを，じっと眺めている。それこそ修道院的で，反社会的な考え方だ。」したがって彼は，賢者が天上に舞い上って，一時的な瞑想にふけることは容認するが，「そこに定住する」ことは，――ディドロの念頭には恐らくルソーがある――「祖国を捨てる」ことであり，「親でも，友人でも，市民でも」ないような生き方を選ぶことであるという。

「賢者」――18世紀ふうに表現すれば「哲学者」――は，雲の上から舞い下りて，この地上の現実のただ中に立たねばならない。だがこの現実の世界で，彼はなにをするのか[3]。

> 裁判官は正しい裁きをつけるが，哲学者は裁判官に，正義とはなにか，不正とはなにかを教える。軍人は祖国を防衛するが，哲学者は軍人に，祖国とはなにかを教える。僧侶は民衆に神々を愛し敬うことを教えるが，哲学者は僧侶に，神々とはなにかを教える。君主は万人に命令をくだすが，哲学者は君主に，彼の権威の起源と限界がどんなものであるかを教える。ひとはそれぞれ家庭と社会で果たすべき義務をもっているが，哲学者はひとそれぞれにこの義務がどんなものであるかを教える。人間は不運と苦悩にさらされているが，哲学者は人間に耐えることを教える。

ここには，18世紀フランスの哲学者たちが共有していた，きわめて実践的・啓蒙的な「哲学者」の理想が表明されている。同時にここには，「哲学者が〔国家を〕支配しない限り，人間は不幸な生活を続けるであろう」[4]（『百科全書』におけるディドロの項目≪プラトン哲学≫）と主張するプラトン（『国家』）の思想の影響が認められる。

1) S, p. 312 ; CN, t. II, pp. 72—73 ; HN, t. II, p. 51 ; AT, p. 242.
2) *Ibid.*
3) S, p. 323 ; CN, t. II, p. 82 ; HN, t. II, p. 57 ; AT, p. 248.
4) AT, t. XVI, p. 326.

こうして観想的「賢者」の理念と，実践的「哲学者」の理念とは，決定的に対立せざるをえない。したがって，セネカが，『人生の短さについて』のなかで，ローマの官吏パウリーヌスに向って「小麦商人の不正行為や倉庫係の怠惰を監督したり，小麦の粒を醗酵させて台なしにしてしまう湿気を予防したり，小麦を計量する桝と秤が不正確な目盛りを指さないように注意したりして時間を費すことと，神々の本性，神々を待ちうけている運命，神々の至福にかんする重要で崇高な認識に専心することがいったい比較できるとでもお考えでしょうか」と語る時，ディドロは，はっきりこれに反対して，「私にとってより差し迫って，重要だと思えるのは前者である」と断言している[1]。

ディドロによれば，「ひとりの働き手」にたいして「百人ののらくらした観想家」がおり，「ひとりの有能な現世の事柄の監理者」にたいして，「百人の来世の事柄の夢想家」がいる。セネカの教えは，「怠け者と気違い」を傲慢にし，「よい君主，よい法官，真に必要な市民」には，反感をもよおさせるという[2]。

ディドロおよび彼の周辺の哲学者たちにとっての価値の源泉は「観念」ではなくて，ことばのもっとも広い意味における「働き」（「労働」）であった。彼が「安息」する「賢者」の立場を，「修道院的」と批判していることからも明瞭なように[3]，18世紀フランスの現実のなかで彼の念頭にある「百人の来世の事柄の夢想家」というのは，祈禱し，瞑想し，禁欲するが，なにひとつ生産することのないカトリック教会の僧侶の立場であった。（ギリシア・ローマ以来の伝統的観念に基づけば生産的労働は奴隷の仕事である。）

ディドロがこれに対置して復権しようとするのが，働く勤勉な市民，技術をもった職人の立場であることはいうまでもない。「哲学者は，いたるところで尊敬されるのが当然な人間だが，学校でよりも元老院で，図書館でよりも法廷において，より尊敬されるべきだ。あなた〔セネカ〕が軽蔑する職業こそ，まさに私が敬う職業なのだ。それは，疲労と，細心の注意と，誠実さを必要とする。」[4] かつて『百科全書』の編集者として，「科学については余りにも多くのことが書かれてきたが，自由学芸〔基礎的一般的教養をなす学問と，絵画，彫刻〕の大部分については余り書かれておらず，手仕事の技術にかんしては，

1) S, p. 455 ; CN, t. II, p. 225 ; HN, t. II, p. 148 ; AT, p. 337.
2) *Ibid.*
3) S, p. 312 ; CN, t. II, p. 73 ; HN, t. II, p. 51 ; AT, p. 242.
4) S, p. 456 ; CN, t. II, p. 226 ; HN, t. II, pp. 148—149 ; AT, p. 338.

ほとんどなにも書かれてはいない」[1]（『百科全書の趣意書』）と主張して，手仕事の価値の復権を意図したディドロの姿が，ここにも再び見いだされるであろう。

理想の国家と退廃した現実　「地上の片隅」に舞い下りて，市民となった「哲学者」は，なんのために働くのか。いうまでもなく理想の国家の建設を目差してである。だがそれははたして可能であろうか。

ディドロは，――ここでもまたルソーと類似して――その可能性の根拠を，過去に人類が理想の国家をもっていたという事実のうちに求めようとする。そしてセネカの『ルーキーリウスあての書簡集』（第90信）が紹介するポセイドニオスが，「世界の最初の時代」に人類の黄金時代が存在していた，と主張していたという話を伝えている[2]。

ポセイドニオスによれば，「罪のない人間の時代」には，「賢者」が「支配権」を握っていて，「強者」の横暴から「弱者」を保護していた。彼が「有益なもの」と「無用なもの」とを教え，「人民の必要物」をあらかじめ用意し，かつ人民の「危機」を未然に防止した。彼のもたらす「恩恵」によって「一同の至福」が増大した。さらに「皆は不平をいわずに服従した。なぜなら圧政なしに命令がくだされ，国王の最大の威嚇は，王位を捨てるぞ，ということだったからである」。この古代の賢者は，ルソー『社会契約論』の「立法者」を想起させるが，ディドロ自身も，『エカテリーナ２世のための覚書』のなかで，「自然状態」において「立法者」が出現し，彼の力で「社会と呼ばれる美しい機械」が成立したとのべている[2]。ディドロはここで，「至福が野蛮時代に独特な物であり，悲惨が文明時代に独特な物なのだろうか」と自問しつつ，次のように自問する。「人類の幸福は，私にとって非常に大切だから，それについて書かれた小説を必ず信じたくなってしまう。それは，もっとも有徳な人物が最高権力者になる時代がいつかやってくるだろうという希望を私に抱かせてくれるから」と[4]。

だが，過去に人類の黄金時代があり，未来にもまた理想の国家が到来することが事実であるとしても，セネカとディドロがそれぞれに生きねばならなかっ

1) AT, t. XIII, p. 140.
2) S, pp. 342—343 ; CN, t. II, pp. 103—104 ; HN, t. II, pp. 70—71 ; AT, pp. 260—261.
3) MC, p. 273 ; DC, p. 268.
4) S, p. 343 ; CN, t. II, p. 103 ; HN, t. II, p. 71 ; AT, p. 261.

た，ローマとフランスの実状はどのようなものだったろうか。それは苛酷な圧制が支配する退廃した現実であった。

ディドロは，セネカが生まれ，育った時代について，——そして同時にそこに，18世紀フランスの状況を読みこみつつ——次のように語る[1]。

> 圧制は精神の生みだしたすべてのものに，卑しさの極印をおす。言語すらも，卑しさの影響からまぬがれてはいない。いったい，ゆりかごの傍で，奴隷のように臆病なささやきを耳にすることと，自由な人間の高貴で堂々たる語調をきくこととは，子どもの成長にとって無関係なものだろうか。

ディドロは続けて，卒直な発言が身を危険にさらすことを知ったひとびとが，やがて本心をかくした表現だけしか使用しなくなり，ついには権力者への阿諛しか口にしなくなるにいたるまでのローマの——したがってフランスの——退廃の実相を描きだす[2]。

「観想」的世界を捨てた「賢者」——「哲学者」——が生きねばならない世界とは，まさにこのようなものであった。そしてこのような世界においてこそ，「哲学」の意味が強調されなければならない。なぜなら哲学は，「虚偽を売る占師（«Augures»）と虚偽を保護する法官と，哲学を嫌悪する君主〔……〕の支配下で，真理を認識することを教え，真理を語る勇気を与える学問」だからである。ディドロが，ここで「占師」という時，それはローマの「占師」を指すと同時に，フランスの18世紀の現実におけるカトリック教会の「僧侶」を意味していることは特に指摘するまでもあるまい[3]。（事実『セネカ論』第2版では，「占師」という語は，すべて「僧侶」〔«prêtres»〕と改められている。）

このように，現実の社会で生きる市民となったディドロの哲学者は，政治の批判者にならざるをえない。その時，哲学は圧制と戦う武器になる。だから彼はいう。「若いスパルタ人が，かつて，自分は奴隷にならない，と語ったが，ひとはそういいうるようになった時，ことばの厳密な意味において，哲学者，あるいはストア主義者である」[4] と。

暴君への批判　ディドロの圧制にたいする批判は，若い時代から晩年にいた

1) S, p. 22 ; CN, t. I, p. 22 ; HN, t. I, p. 18 ; AT, p. 24.
2) *Ibid.*
3) S, p. 23 ; CN, t. I, p. 23 ; HN, t. I, p. 19 ; AT, p. 24.
4) S, p. 326 ; CN, t. II, p. 85 ; HN, t. II, p. 59 ; AT, p. 250.

るまで，一貫している。『セネカ論』初版においても，この立場は明確に主張されているのであるが，しかし彼は君主制一般の廃止を直ちに要求しているわけではない。彼はまだ君主による上からの改革にある種の期待を残している。しかも同時に，この期待が君主の側から実現される可能性はほとんどあるまいという深い絶望——この絶望が人民の力への期待と結びつく——がこれにいりまじっている。以下テクストに即して，ディドロの『セネカ論』初版における政治観をさぐっていきたい。

ディドロが暴君の圧制を批判するのは，それが，人間の精神を傷つけるからである[1]。

> 専制政府の圧迫は，気づかぬうちに精神を偏狭にしてしまう。ちょうど肉体が，自分を傷つける危険な障害を避けるように，精神は，無意識にある種のはげしい思想を自分に禁じてしまう。ひとたびこの憶病で，慎重な態度に慣れてしまうと，大胆で卒直な態度に戻るのは困難である。

人間の尊厳の基礎である，精神の自由と独立を維持することが，ディドロの政治批判の原則である。したがって，彼はセネカが，精神の独立を捨てようとする時，それを許すことができない。すなわちセネカは，『ルーキーリウスあての書簡集』（第94信）のなかで，君主が民衆に公布する勅令の冒頭に，その勅令を公布する「理由を説明する前文」をつけることは，堅固しくて場違いな感じを与えると語ったあと，さらに君主に向って，「どうか，私がどうすればよいか御下命ください。私は知識をえたいのではなくて，御命令に従いたいのでございます」と呼びかけているのであるが，ディドロはこのことばに憤激する[2]。

ディドロは，これこそ「暴君しか必要としない奴隷のことば」であるといって力に服従することを断固として拒否する。与えられた「命令の理由」が明らかに示された時にしか服従しない，というのがディドロの基本的立場である[3]。

ディドロの圧制への批判は，『セネカ論』初版のなかで，より直接的な同時代の事件にたいする言及として表明されている場合もある。たとえば，次のことばは，ロシア，オーストリア，プロイセン3国によっておこなわれた第1回

1) S, p. 296; CN, t. II, p. 32; HN, t. II, p. 24; AT, p. 219.
2) S, pp. 346—347; CN, t. II, p. 109; HN, t. II, pp. 74—75; AT, p. 264.
3) *Ibid.*

ポーランド分割（1772年）にたいする怒りのほとばしりである。「現代において，われわれは諸国の君主が臣下を売り，領土を交換しあっているのを見たけれども，人間の社会と動物の群とは違う。両者を同様に扱うのは，人類への侮辱である[1]。」

ところで，ディドロは，『エカテリーナ２世との対談』の覚書のなかでは，「われわれはポーランドの分割をまさしく既成事実とみなしている」と書いて，この分割を認めているようにも見える[2]。しかしディドロは，「既成事実」と「みなす」（«regarder comme»）と書いてはいるが，この事実を正当な行為として承認するという意味の表現を使ってはいない。彼はこのテクストの直後に，分割当事者国を「羊」を狙う「３匹の狼」とさえ呼んでいる。（さらに「フランスは４匹目の狼である」という表現すらつけ加えている。）

そればかりではない。ディドロは，おなじ対談のなかで，「女帝陛下が，ポーランドに入国された時，その御目的はこの国を分割なさることだったのだろうか。ナントの勅令を廃止した際の隣人フランスを真似て，ポーランドの離教派〔非カトリック教徒〕を，ロシアの国内に呼び寄せられたほうが，陛下にとっては有利だったのではあるまいか」と書いて，暗にポーランド分割に反対であることをほのめかしている[3]。（『絵画，彫刻，建築，詩にかんする断想』中にも，ポーランドにおける「プロシア人の残虐」への言及がある[4]。）

このような一連の主張のもっとも強い表現として，前記『セネカ論』初版中のディドロのことばを理解すべきである。ポーランド分割の直接責任者のひとりは，いうまでもなく，ロシアのエカテリーナ２世であって，ここでは彼女の政策が直接ディドロの攻撃の的にされている。しかし，この作品全体において，ディドロの彼女にたいする態度は必ずしも一義的ではなく，表面的に見る限り，彼はいたるところで，彼女への感謝を表明しているのである。ディドロの女帝への感謝の問題については以下で検討する。）

啓蒙君主への感謝　ディドロの君主制にたいする考え方は，『百科全書』中の諸項目≪政治的権威≫，≪自然権≫，≪市民≫，≪都市国家≫，≪ホッブズ

1) *Ibid.*
2) OP, p. 261 ; DC, p. 252. イーヴ・ブノは次のように指摘している。「1773年11月，ロシア駐在フランス大使は，ディドロに依頼して，フランス政府は既成事実を承認し，再び同盟を結ぶ意志があるむね，女帝に伝えさせている。」TP, p. 29, note 5, 3°.
3) OP, p. 319.
4) OE, p. 797.

哲学≫のなかに体系的に表現されているが，それはまずフランスに現に成立している王制を歴史的事実として追認する。しかし同時にこの王制が人民の君主にたいする「服従契約」によって成立したものであると解釈し，しかも人民の「服従」の側面よりも，むしろ国王にたいする「契約」の制約の側面のほうを強調することによって人民の利益をまもるという立場をとる。

たとえば，≪政治的権威≫は国王の権力の限界を次のようなことばで規定している[1]。「君主はまさにその臣民から，彼らにたいしてもつ権威をひきだす。この権威は自然の法と国家の法とによって制限されている。〔……〕それゆえ君主は，彼の権力と彼の臣民とを，国民の承任なしに，また服従契約のなかに明示された選択と独立して勝手に扱ってはならない。もし君主が権力をその他の仕方で用いた場合には，すべては無効である。」（原文でイタリック体の語は傍点で示す。）

この場合，君主にたいして彼の「権威」の「制限」，「国民の承認」，「服従契約のなかに明示された選択」がどのようなものであるかを教える存在が前提されている。これがディドロの考える「哲学者」である。私が先に引用した（本節，「天上の賢者と地上の哲学者」の項参照）「君主は命令をくだすが，哲学者は君主に，彼の権威の起源と限界がどんなものであるかを教える」というディドロのことばは，この理念を表現している。そして彼は，ネロの宮廷で活躍するセネカを眺める際，常にこの啓蒙主義的「哲学者」の理念をローマの哲学者のうちに投影しているのである。

ディドロは，≪政治的権威≫のなかで，聖書のことばを引用しつつ，「汝らの服従は理性的であれ」という[2]。「理性」を媒介とする政治的「支配」と「服従」。これがディドロの考える政治的世界の原理であった。この立場は，『セネカ論』初版においてもそのまま維持されている。

すなわち，ディドロは次のようにいう。「私の命令通りにせよ。それが私の喜びであるから」という表現は，「君主が臣下に告げうるもっとも侮蔑的なことば」である，と[3]。（上記≪政治的権威≫のなかにも，同様の主張が表明されている[4]。）

1) AT, t. XIII, p. 394.
2) *Ibid.*, t. XIII, p. 393.
3) S, p. 347; CN, t. II, p. 109; HN, t. II, p. 75; AT, p. 264.
4) AT, t. XIII, p. 397.

人民が必要としているのは，君主の「意志」の「理由」を説明してくれる「大臣」——この「大臣」のなかに，「哲学者」の理念が投影されている——と，自らの動機を説明しつつ，「私の命令通りにせよ。なぜなら，そこにおまえたちの安全，自由，および幸福がかかっているのだから」と下命する君主なのである。ディドロは，このような理性的君主に最大の期待を寄せつつ，彼には「人間からその仲間のひとりにこの像を捧げる」という碑名を刻んだ，黄金の像を贈りたいとまでのべている[1]。

君主にたいしてこのような期待が抱きうる限り，哲学者は君主の支配に従い，彼の統治に協力し続けるであろう。彼は，『ルーキーリウスあての書簡集』（第70信）のなかに，「哲学者は反乱の扇動者，悪い市民ではない」というセネカのことばを発見するや，これに全面的に賛成し，さらに次のように続ける[2]。——哲学者は，決して「国家と法律の敵，法官と統治を司るひとびとの中傷家」ではありえない。それはまた，「栄職と富とを渇望し」，君主からどれほど恩恵を与えられても，決して満足しようとしない「廷臣」とは異なる。哲学者は，君主の生命を狙ったこともなければ，君主を誹謗した諷刺文を書いたこともない（だがディドロは，まさにこの『セネカ論』初版のなかに，ルイ15世にたいする辛辣な諷刺を書きこんでいる）。いわんや反乱を扇動する教えを説いたこともない（だが，彼はまた，この作品のなかにアメリカ革命の熱烈な賛美を挿入している）。さらにまた，哲学者は，アンリ４世の暗殺をはかった，ラヴァヤックやジャン・シャテルを教育したこともない。「〔君主の〕恩恵を身にしみて感じ，直ちにそれに感謝し，ことばにだして恩返しをしようとするのが哲学者である。」[3]

読者は恐らく，現存する政治権力への迎合ともとれるようなこのディドロのことばに驚くであろう。そのなかに，君主への阿諛に近いものさえ感ずるにちがいない。しかしこれはディドロが，エカテリーナ２世の「恩恵」にたいして個人的感謝を表明するという動機から書き加えたものであった。（『セネカ論』第２版では，女帝の実名こそあげていないが，確実に彼女とわかる表現を使って，２度も彼女の徳政が賛美されている。）[4]

1) S, p. 348; CN, t. II, p. 110; HN, t. II, p. 75; AT, p. 264.
2) S, pp. 322—323; CN, t. II, pp. 81—82; HN, t. II, pp. 56—57; AT, p. 247.
3) S, pp. 323—324; CN, t. II, pp. 82—83; HN, t. II, p. 57; AT, p. 248.
4) たとえば，次の箇所を参照されたい（イタリック体は中川）。«A chaque ligne de ses sages instructions aux députés pour la confection des loix, ***l'habile & grande souveraine du Nord***

女帝の「恩恵」というのは，ディドロが4人の子どものうちただひとり生き残ったマリ＝アンジェリク（1953年9月2日出世）の結婚持参金をつくるために，蔵書を売ろうとしていた時に，エカテリーナ2世が「文芸共和国においてかくも有名な哲学者が，彼の喜びの的，仕事の資料，余暇の伴侶である蔵書」を，父性愛の犠牲にせざるをえないという窮状におかれているのを知って，「深く心を動かされ」，ディドロのいい値で買いあげてくれた事実をさす。そればかりか，女帝は引き続きディドロに蔵書の使用を許し，かつその管理費という名目で年金まで支払うようにとりはからってくれた。その結果，彼は16.000リーヴル（うち1.000リーヴルは，最初の年度の年金）を与えられる。さらに翌年には，25年間分の保管料25.000リーヴルが前金で支払われ，一挙に41.000リーヴルの財産をつくることができたのである[1]。（アンドレ・ビーは「これは当時ではひと財産だった」という[2]。）

啓蒙君主に期待しうるための条件　ディドロのエカテリーナ2世にたいする感謝は，心からのものであった。しかし，それにもかかわらず，彼の啓蒙君主への期待はある具体的条件がみたされることを前提としている[3]。

> われわれを善に強制しうる人物は，おなじように悪にも強制しうるだろう。正しく，確固たる意志をもち，しかも啓蒙された最初の専制君主は災厄である。正しく，確固たる意志をもち，しかも啓蒙された2代目の専制君主は，より大きな災厄である。2人の先代に似た3代目は，人民にその特権を忘れさせ，隷属状態を完成するであろう。

では，啓蒙君主はどうすれば人民の「災厄」でなくなるのか。『セネカ論』初版では，その点についての詳しい説明が与えられていないから，ディドロ晩年の他のテクストのうちから，彼の真意をさぐっていこう。

今引用した主張――善をなしうる啓蒙専制君主は同時に悪をもなしうる存在であり，このような啓蒙専制君主の連続が結局は国民を完全な隷属状態に追い

dit [･･･]» CN, t. I, p. 144; HN, t. I, p. 96; AT, p. 103. «“Je me suis trouvé l'ame d'un homme libre dans la contrée qu'on appelle des esclaves, & l'ame d'un esclave dans la contrée qu'on appelle des hommes libres. —— Jusqu'à présent je n'ai rien entendu de vous qui m'ait fait autant de plaisir.” —— C'est la fin d'une conversation dans le cabinet d'*une grande souveraine*.» CN, t. II, p. 33; HN, t. II, p. 24; AT, p. 219.

1) DC, pp. 4—10.

2) A. BILLY, *Diderot*, p. 337.

3) S, p. 349; CN, t. II, pp. 111—112; HN, t. II, p. 76; AT, p. 265.

こむという主張――が，最初に，萌芽的に表明されたのは，1772年の断片『ある哲学者の紙挟みから落ちた断片』においてである[1]。彼はそこで次のようにいう。「もっとも好ましい政治は，正しくかつ啓蒙された政府だろうといわれたことがある。これはきわめて無謀な主張である。〔……〕ひと〔君主〕は，善を行なうのとおなじように権力を濫用して，悪を行なうのである。どのような人間〔君主〕も，自分に権力を委託した人民を，野獣の群のように扱うことは許されていない。」たとえ人民が君主の正当な意見に反対したとしても，「説得の声によって彼らを啓蒙し，迷いからさまし，正しい見解に導くように努めねばならないのであって，決して力の声を使ってはならない。」

この主張は，このあとさらに明確にされ，『エカテリーナ２世との対談』[2]の覚書（1773年）と『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』[3]（1774年）のなかでは，先に引用した『セネカ論』初版中の一節と，ほぼおなじ表現をとるにいたる。

また，おなじ趣旨の主張が，『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』（1774年）のなかでは，現実的な諸問題との具体的連関のもとに展開されている。この『意見』は，エカテリーナ２世が1767年夏，法典編纂のための立法委員会（３部会）を招集するために，前もってその委員564人に送った『訓令』――彼女の統治の大綱――を逐条的に注釈，反駁したものであって，そこにはディドロの立法，政治，社会，経済論が詳しくのべられている。（イーヴ・ブノは，この作品は，『社会契約論』がルソーの全作品中で占めるのと等しい位置を，ディドロの全作品中で占めている，と評している[4]。）ディドロは，女帝の『訓令』第13条を反駁して，次のようにいう[5]。

> 自然の普通の秩序から外れた奇跡によって，ロシアが３人のよい君主を続けてもつようなことがあれば，それはロシアにとってさらに大きな不幸だろう。〔……〕というのは，この３人のすぐれた専制君主は国民を盲目的な服従にならしてしまうだろうからである。この３代の治世のもとで，人民は自分達の譲り渡してはならない権利を忘れ，きわめて危険な安泰感と無関心のうちに落ちこみ，自由を保持するのに必要な，

1) AT, t. VI, p. 448.
2) OP, pp. 271—272.
3) OPH, pp. 619—620; AT, t. II, p. 381.
4) TP, p. 34.
5) TP, pp. 71—72; OP, pp. 354—355.

絶えざる警戒心を感じなくなってしまうだろう。よい君主の手に握られて，多くの善をなしとげた絶対的権力は，これらのよい君主の最後の者によって，悪人の手に渡され，しかもそのことが時間と習慣の力で是認されるだろう。そうなれば一切は失なわれてしまうのだ。

ではこれを防止するにはどうすればよいのか。ディドロは，「したがって，君主権は制限されねばならない。しかも永続的な方法で制限されねばならない」という。すなわち「法が，君主の側からの一切の侵害をまぬがれるように」せねばならない[1]。その具体的な方策は，ロシアにかんしていえば，「国民の代表者」（第3身分）が5年に1回集って「君主が，誓約した法に従ったかどうかを判断し，もし法に背いていれば，彼にふさわしい刑を決定する」ための議会——ディドロの用語を使えば，「法の委託機関」——を常設することである。「ロシアでは，〔現在のところ〕それは元老院である。だが元老院は無にひとしい」とディドロはいう[2]。事実それは，ピョートル大帝によって1771年に創立されて以来，帝政の全期間にわたって存続していたが，ディドロの意図するような政治的機能を果たしたことは一度もなく，「たんなる行政機関」[3]（ブノ）にとどまったままであった。

ディドロの考えによれば，よい国家を建設するためには，まず君主——たとえそれが「啓蒙」専制君主であっても——の権力を議会で制限しなければならない。それとともに「第3身分」，「あらゆる種類の職人」，「臣民に自由の価値を教える自由人」をつくりだすことが不可欠である[4]。要するに，すべての人間の自由を保証しなければならない。それなのに，ロシアにはいまだに「農奴」が存在している。「女帝は，農奴の解放については，なにものべられていない。〔……〕女帝は，彼女の国民が隷属状態にあることを，望まれているのだろうか。女帝は，自由がないところには，真の治安も，法も，民生も，農業も，商業も，富も，科学も，趣味も，芸術もないということを御存知ないのだろうか。」[5]

もちろん，エカテリーナ2世は，すべてを知っていたが，農奴を解放する意

1) PT, p. 72; OP, p. 355.
2) TP, p. 81; OP. pp. 363—364.
3) TP, p. 81, note 1. なお，ヴェルニエールによれば，ロシアの「元老院」は，「閣議」，「最高財務委員会」，「最高裁判所」を兼ねたものであった。OP, p. 364, note 1.
4) TP, pp. 107—108; OP, p. 386.
5) TP, p. 108; OP, p. 386.

志はなかった。そればかりか，ディドロが「君主にたいする反乱を防ぐひとつのすぐれた方法がある。それは農奴をなくすことだ」と書いた[1]，まさにその年（1774年）に，プガチョーフの反乱はエカテリーナによって，暴力的に鎮圧されていたのである。

現実の君主たちへの絶望　ディドロがもっとも期待していた啓蒙君主エカテリーナ２世でさえ，その「専制」を捨て，自分の権力を制限する機関を設置することを許さなかった。前記立法委員会は1767年に召集され，203回の会議を開いたものの，ポーランド問題の緊迫と，対トルコ戦争を理由として，翌年にはなんの成果もあげないうちに解散させられてしまっている。ディドロがエカテリーナの訓令のなかに見たのは，結局「専制君主の名は棄てられているが，実体はそのまま残されている」という事実だけであった[2]。すべては，ディドロにとって絶望的であったといえる。彼はこの『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』を，次の，むしろ祈りに近いことばで結んでいる[3]。「だが女帝は，偉大な魂，洞察力，知識，幅広い天分と，正義，善良，忍耐，強固な意志をそなえておられる。〔……〕女帝は健康である。現在44歳で，自分は80歳まで生きるつもりだと私に約束された。時間と，これほど稀なすぐれた種々の天分をもってすれば，成就できないことはなにもない」と。（ディドロは，生前この作品を女帝に示していない。死後にロシアに送られてきた彼の原稿類のなかにこの作品を発見して，一読した女帝は激怒した。彼女はグリムにあてて，「この作品は，まったくくだらぬおしゃべりです。そこには事態の認識も，慎重さも，明察もありません」と1785年10月22日付の手紙で書いている[4]。彼女は67歳で死んだが，たとえ約束通り「80歳まで」生きたとしても，ディドロの原則を実現する気にはならなかっただろう。）

では，エカテリーナ２世以外に，ディドロの政治的理想を実現する可能性をもった君主が1770年代のヨーロッパにいただろうか。

プロイセンのフリードリヒ２世はどうか。ディドロは，このもうひとりの啓蒙専制君主の政治的原則にたいしては，すでに『暴君への反論』（1771年）のなかで激しい攻撃を加えている（たとえば彼は，フリードリヒに向っていう。

1) TP, p. 124 ; OP, p. 407.
2) TP, p. 176 ; OP, p. 457.
3) *Ibid.*
4) OP, p. 333.

「あなたは君主にならないほうがよい。なぜなら悪い君主になるだろうから」と[1]。また，『ある君主によって，タキトゥスの本の余白に書きこまれた覚書き，あるいは諸君主の政治原理』（1774年）においては，フリードリヒ2世の立場に身をおいてみて，タキトゥス『年代記』やその他のローマの歴史書に箴言ふうの注釈を加え，それによって専制君主の政治支配の心理と論理とを裏面からあばきだしている[2]（たとえば，第99「帝国中にはただひとりの人間しかいない。それは私だ」[3]。第165「君主の救いが問題になる時には，法は存在しない」[4]）。当然，彼には期待をもつことができない。

イギリスのジョージ3世もまた不適格である。なぜなら彼こそ，ディドロが支持するアメリカ植民地の「蜂起者」たちを弾圧する君主だったからである。

フランスの故ルイ15世はどうだったか。『セネカ論』初版は，あとでのべるように，彼にたいする諷刺にみちている。（『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的な反駁』中にも，彼の無能にたいする名ざしのからかいがある[5]。）1774年に即位した新王ルイ16世はどうだろうか。ディドロは，彼にたいしてはまだ若干の希望を託しているように見える。たとえば次の表現は，そのことを推察させる。「あなたの身分と生まれがあなたを呼びよせた宮廷において，まだその悪徳にけがされることなく，魂が徳に導びかれているがゆえに，生まれつき徳を信ずることのあつい，若い陛下よ……」[6] しかし，これすら漠たる敬愛の表現にすぎず，明確な期待の表明とはいいがたい。

それでは，もはや人間は現実の世界に理想の政府をもつことは不可能なのであろうか。

人民への期待　セネカは，『余暇について，あるいは賢者の引退について』のなかで，地上の諸政府のあり方を検討した結果，「賢者が〔支持するのに〕ふさわしくかつ，賢者に〔支持されるのに〕ふさわしい政府はただのひとつも発見できない」ことがわかった，という。これにたいして，ディドロは，「賢者は，現代の政府の幾つかを検討してみても，セネカの意見に賛成するだろう」

1) *Ibid.*, p. 145.
2) ディドロのロシア体験——エカテリーナへの幻滅——を反映して，『諸君主の政治原理』の自筆稿中には，エカテリーナを諷刺した箇所がある。*Ibid.*, p. 185, note 2; p. 186, note 2 参照。
3) *Ibid.*, p. 180.
4) *Ibid.*, p. 192.
5) *Ibid.*, p. 466; AT, t. II, p. 276.
6) S, pp. 222—223; CN, t. I, p. 229; HN, t. I, p. 150; AT, p. 160.

と結論している[1]。

しかしディドロは，この時，ただひとつ，理想の国家の可能性を，アメリカの独立革命のために蜂起した人民のなかに発見したのである[2]。そして彼は，「勇敢なアメリカ人」への長文の賛美を，『セネカ論』初版のなかで，上の彼の結論のすぐあとに挿入する[3]。

> 数世紀におよんで，圧制が世界全体を支配したのちに，大洋のかなたで勃発した革命が，ヨーロッパの全住民に狂信と暴政にたいする避難所を与え，人間を支配している連中に，彼らの権力の正当な使用法を教えんことを。

このことばではじまるディドロの雄弁な呼びかけのなかに，われわれはディドロのアメリカ革命観と彼の幾つかの重要な政治的主張とを，読みとることができる。

まず第1に，彼は，この「革命」が「自分たちの自由のほんのわずかな一部でも失う」くらいなら，「自分たちの妻が凌辱され，子どもが首をかかれ，家が打ちこわされ，田畑が荒らされ，町が火をかけられるのを見，自分たちが血を流して死ぬ」ほうがよいと考えたアメリカ人によって獲得された勝利だと断言している。

そして彼らが，将来起こりうる「富の大規模な増大とその不均等な配分，奢侈，無気力，風俗の退廃」を防止する方策をとる——これは，ディドロの政治・経済論の主要課題であった——ように勧告している。

第2に，すべてのものはやがては死滅するという自然の「おきて」にもかかわらず，この「革命」政権が永久に持続することをディドロは希求する。その

1) S, p. 438 ; CN, t. II, p. 203 ; HN, t. II, p. 134 ; AT, p. 323.

2) ディドロは以前からイギリスとそのアメリカ植民地との間の抗争に強い関心を示しており，フィラデルフィアの弁護士ディキンスンが植民地同胞にあてて書いた自由の擁護の呼びかけを，感激をもって紹介している。«Sur les lettres d'un fermier de Pensilvanie aux habitants de l'Amérique septentrionale», 1769. AT, t. IV, pp. 86—89. したがって，ディドロの「勇敢なアメリカ人」にたいする賛美は決して突発的なものではない。ただし，ディドロは『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』のなかでは，「民主政府」が，小国家においてしか可能でないと主張している。「民主政府は，〔構成員の〕意志の一致を前提としており，さらに，意志の一致は，狭い地域における全員の集合を前提としているから，共和国は小さなものしか可能でなく，したがってまたこの幸福な唯一の社会の存在は，常に不安定である。」AT, t. II, p. 390.
アンリ・ルフェーヴルは，ディドロのこの主張を「本質的に反動的」であるという。H. LEFEBVRE, ***Diderot***, Paris, Les Editeurs Réunis, 1949, p. 296. しかしディドロの政治論全体のなかに，上記のことばをおいて考察すれば，それが決して「反動的」でないことは明らかであろう。

3) S, pp. 438—441 ; CN, t. II, pp. 203—206 ; HN, t. II, pp. 134—136.

ためには，どれか1州だけが強大になって，他州を「従属させよう」としたり，誰かひとりの市民だけが強力になって，他の市民の「君主」になろうとしたりしないようにせねばならないという。

いうまでもなく，ディドロの理想は，「玉」〔個人や，州〕がピラミッド型に積み重った」「君主国」ではなく，「ほとんど等しい大きさの玉が，同一平面上に並んだ」「民主国家」（『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』）であった[1]。（ヴェルニエールは，独裁者の出現にたいするディドロのこの恐れは，ジョージ・ワシントンを想起してのことかもしれないと示唆している[2]。）

第3，アメリカの革命者たちは，次の諸点を銘記すべきであるという。――国民全体の幸福は，逆境のうちにあってこそ成就されるのであり，繁栄はかえって危険であるということ（逆境は偉大な才能を必要とするのに反して，繁栄は無能者を高い地位につける）。すべてのひとが徳行をまもることが，かえって警戒心を失なわせて，「圧制」の種をまく。

第4，ついで国家を存続させるのは，「黄金でも，労働力の大きさでもなく，よい風俗である」ことを忘れてはならないという。

ディドロは以前には，むしろ「法」（したがって「法」に支配される「国家」）が「風俗」の前提であることを強調していた。たとえば次のように。「風俗は，あらゆる所で，法制と統治の結果である。」[3] あるいは，「国民の安定した風俗としては，法制を基礎としたものしか存在しない」[4]（『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』）。

この点で『セネカ論』初版の主張は，確かに以前の所説と矛盾する。あるいは，ディドロは，ひとたび自由な国家が誕生したあとでは，逆に「風俗」のほうが「国家」を維持するように変ってくると主張したかったのであろうか。ただ，「風俗」（「道徳」）と「法制」（「国家」）間の原因・結果の順序の逆転にもかかわらず，両者間の密接な関係という点では，以前からの主張が維持されているといえるかもしれない。

---

1) TP, p. 97; OP, p. 378.
2) OP, p. 490.
3) TP, p. 68; OP, p. 349. ディドロにおける道徳と政治との関係について，ルッポルは，マルクス主義の立場から次のようにいう。「ディドロにとって道徳がイデオロギー――あるいはわれわれの表現を使えば上部構造――であるとしても，その土台は経済ではなくて，政治なのである。」（傍点は原文イタリック体の語。）I. K. LUPPOL, *Diderot*, p. 252.
4) TP, p. 94; OP, p. 376.

第5，さらに各人は，家に，畠に，生産用具の傍に，銃，剣，銃剣を用意せよ。「国民のすべてが兵士であるように」という。

これもまた，ディドロの以前からの主張である。すなわち彼はこうのべていた。「革命のあと，帝国のすべての臣民が，兵士になるように教育されることが望まれる時が必ず来る。国家は，2，3の大きな戦闘に破れたあと，ふつうなら防衛力を失ってしまう。だが，軍事技術が国民教育の一部になれば，そういう恐れはなくなるだろう。次から次へと防衛者があらわれてくるような社会を攻撃する国があるだろうか」[1]（『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』）。

第6，最後にディドロは「討議」が可能な，平静な時には「老人」の忠告も有用であるが，「危機の時」には「青年」のほうがより機敏に状況に対処しうることを記憶せよと忠告している。

このように検討してみると，ディドロのアメリカ独立革命にたいする共感は，なんら突発的なものではなく，すべて彼の以前からの政治的理念に発していることが明らかであろう。なおつけ加えれば，ディドロの上記の主張のうちには，ルソーの主張との顕著な類似が認められる。——人民の平等への要求，奢侈，道徳的退廃への抵抗，徳の称揚は，『政治経済論』，『社会契約論』の論旨と一致するし，国民皆兵（民兵制度）は，『ポーランド統治論』（「軍隊制度」[2]）が強調するところである。

『自由の熱狂者』　それにしても，ディドロのこれほどあからさまな人民の蜂起への支持は，ある種の唐突な印象を与えるかもしれない。

確かに，ディドロは，第3身分を代表する議会が君主の権力を制限する立憲君主制が，現実に実現可能なほとんどただひとつの合理的政体であると考え，君主がその方向に改革を進めるように啓蒙していくことこそが，哲学者の役目である，と主張し続けてきた。しかし，それと同時に，彼の心情のうちには即刻，君主制を打倒して自由を回復したいという強い熱狂がひそかに燃えていたのである。

この熱狂は，1772年恐らくドルバック邸において，グリム，ネジョン，スデーヌ，ジョルジュ・ルロワたちを前にして，ディドロが即興的に作りあげた

1) TP, p. 160 ; OP, p. 443.
2) J.-J. ROUSSEAU, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, p. 1014.

『エルーテロマーヌ（自由の熱狂者たち），あるいは1772年の主顕節の王の辞退』のなかに端的に歌われている。この詩の形式は，ディドロ自身の「前書き」によればピンダロスのディテュランボス（«dithyrambe»）を模倣したものであって，ストロペー（«strophe»），アンティストロペー（«antistrophe»），エポーデー（«épode»）の3部1組からなる単位の反復からなりたっている。ディドロはこの「ディティラーンブ」のなかで，まず自然の子の賛美を歌う[1]。

自然の子は隷属を嫌う。
権威と名のつくものには，どんなものでも仮借なくはむかい，
くびきにたいしては怒りに燃える。強制されれば，この子の心は傷つく。
自由こそはこの子の願い。ほとばしる叫び声は自由。
社会の絆をさげすんで，
心ひそかに求めるのは昔の原野。
礼儀作法というのは型通りの顰面のことだが，
そんなものをこの子にかぶせようとしても，とてもヴェールの役を果たせはしない。
猫かぶりの優雅な身ぶりも，
檻のなかで鎖につながれた虎の神妙な様子も，
賢者の目をあざむくことはできない。
都の囲のなかでも，
賢者はすぐに未開のひとを見わける。
この男は首にはめられた鉄鎖のもとでも，なお，身をもがいているのだから。

暴君はどのようにしても，この「自然の子，未開のひと」を完全に隷属させてしまうことができない。そればかりか，この「虎」の「心」と「額」から「尊厳のしるし」を抹殺することも，彼の「怒りにみちた目」からその「輝き」を消しさることもできない。どこに安全を求めていいかわからず，恐怖に「おののき，震え，茫然とする」「専制君主」に向って，「怒った人民」は叫ぶ[2]。

王よ，答えよ。誰が決めたのか，この契約を。
誰が署名し，誰が承認したのか。
どんな森で，どんな洞窟で契約書を作ったのか。

1) *Ibid.*, t. IX, pp. 14—15.
2) *Ibid.*, t. IX, p. 15.

誰の手でそれは書かれたのか。
石か，木の皮にそれを彫りこんだのか。
誰がそれをまもらせるのか。正義か，力か。
権利と力によって，それは破棄される。

この一節のなかで「契約」と呼ばれているものは，いうまでもなくディドロが『百科全書』の項目≪政治的権威≫のなかで，事実としてフランスに成立している王制を，法的に根拠づけるために前提した，あの人民と王との間の「服従契約」を指している。ディドロはこの「契約」がまったくの幻影であり，事実は強者による人民の抑圧があったにすぎぬと歌う。したがってこの事態は，暴力的に打破されるべきであって，そのことは「権利によって」合法化される，というのである。ディドロは続けて歌う[1]。

そしてこの男〔自然の子〕の手は，僧侶の腹わたで紐を編み，
綱の代りに，それで王どもを絞め殺すだろう。

ディドロは，ここで完全に彼の平素の理論的主張——立憲君主制——の枠を越えている。彼は心情的に，抑圧された人間と自己とを同一化し，暴君にたいするはげしい怒りに燃えている。今引用した一節は，まさに暴力的な革命行動へのいざないである。

抑圧にたいして，なにがそれほどディドロを激昂させるのだろうか。恐らくそれは，彼の政治理論の理論的帰結ではあるまい。そうではなくて，彼の36歳の時の入獄体験——自分自身が真理であると確信することを公表したためにヴァンセンヌの牢獄に投じられ，真理の否認を力によって迫られた体験——と，その時の怒りが，ディドロの心情の中核にあったと考えられる。（本論第四部参照）。

あらゆる場合にディドロを抑圧された人間と同一化させ，彼に『自由の熱狂者』を作詩させ，そして彼とアメリカ革命の蜂起者とを連帯させるのは，この彼の若い日の体験であったといいうるように思う。この心情を媒介にして，彼は一方で立憲君主制の理論を展開しつつも，同時に暴力的な人民の革命的行動を是認することができたのである。ここでもまた，ディドロの政治論を背後か

1) *Ibid.*, t. IX, pp. 15—16.

ら支えているのは，弱者，被抑圧者との同一化の意識である。現実の政治にたいするディドロの批判は，常にこの深層の意識から発している。

人民への絶望　では，ディドロは，君主の手による政治の改革に絶望して，最終的に人民の力に依拠しようとするのだろうか。『セネカ論』初版におけるディドロの立場は決してそれほど単純ではない。たとえば，彼は次のようにいう[1]。

> ひとは「まず生き，それから哲学する」という。だがこんなふうに語るのは人民だ。これに反して，賢者は，「まず哲学し，それから可能であれば生きる」，あるいは「生命よりも徳を愛する」という。

ディドロがここで彼の人生観における基本的価値について語っていることは明らかであろう。すべての人間は，ディドロにおいて，徳への愛の有無によって判断されている。そこから彼の人民観の一見矛盾したような――しかしその内容においては決して矛盾していない――相反する２つの様相が生まれる。

すなわち彼は，人民のなかに「生命より徳を愛する」存在を発見する限り，これに熱狂する。彼がかつて，『エルーテロマーヌ（自由の熱狂者たち）』において夢想し，アメリカ独立革命の戦士のうちに発見したものこそ，このような理想化された人民であった。

これに反して，人民が徳への愛を失う時，それは魂を失った奴隷になりさがる。「奴隷は主人を失うと，自分の魂も失ってしまう。道に迷った犬のように，水とパンをもらって棒で打たれていた元の飼主の家を探し求め，それが見つかるまで啼き続ける。」[2] あるいはまた，それはもっとも卑劣な，権力者の迎合者と化する。「人民が危険な扇動家でない場合，彼らはあらゆる廷臣中でもっとも迎合的な廷臣になる。」[3]

このような人民の二面性に応じて，ディドロ自身の立場も時に人民に味方し，時にそれに敵対するようになる。

たとえば，彼は人民の立場に立つ場合には次のようにいう。「自分の地位を失うことを恐れる政治家は，決して大きなことをする勇気がない。いつも権力

1) S, pp. 282—283 ; CN, t. II, p. 16 ; HN, t. II, p. 13 ; AT, p. 209.
2) S, p. 442 ; CN, t. II, pp. 206—207 ; HN, t. II, p. 136 ; AT, p. 325.
3) S, p. 154 ; CN, t. I, p. 174 ; HN, t. II, p. 115 ; AT, p. 121.

者の懇請に向って開かれた彼の耳は，いつも人民の訴えには閉ざされている」と[1]。

逆に，信頼できない人民を前にした時には，こう叫んでセネカをはげます。「あなたは卑怯者呼ばわりされることが恐ろしいのか。いったい人民のことばが，あなたにとってどういう意味をもつのか。真の偉大さは，たとえ恥辱をこうむろうとも，善をなすことにあるのではないのか。」[2]

こういう脈絡のなかでディドロの真意を理解する時，次の一文もまたなんら矛盾を含んでいないことが，理解できるであろう[3]。

> 人民はあらゆる人間のなかで，もっとも愚かで，もっとも邪悪である。人民から遠ざかることと，よい人間になることとはおなじである。
>
> 人民の声に逆らう哲学者の声は，理性の声である。
>
> 人民の声に逆らう君主の声は，狂気の声である〔傍点は，原文でイタリック体の語を示す〕。

「人民から遠ざかること（«se dépopulariser»）と，よい人間になることとはおなじである」という表現のゆえに，ディドロを反人民主義者，貴族趣味の持主と誤解してはならない。事実はまさに逆である。彼は，道徳の世界においても，政治の世界においても，常に抑圧された者の側に自己を投入し，その幸福の回復を主張し続けてきた。ただ彼は，すべての人間が幸福になるための前提条件として，徳への愛を力説し続けていたがゆえに，たとえそれが抑圧された人民であってもこの愛を失うことだけは許せなかったのである[4]。

---

1) S, p. 314; CN, t. II, p. 75; HN, t. II, p. 52; AT, 243.

2) S, pp. 511－512; CN, t. II, pp. 281—282; HN, t. II, p. 183; AT, pp. 376—377.

3) S, p. 346; CN, t. II, p. 108; HN, t. II, p. 74; AT. pp. 263—264.
アンリ・ルフェーヴルは，このことばだけを切り離して解釈し，ディドロの真意を誤解する。ルフェーヴルはいう。「ディドロの哲学の，抽象的，個人主義的，貴族主義的把握法と，彼の道徳主義とが彼を導いていった地点がこれである。自分自身〔の最初の立場〕を否定するとはなんということだろう。」H. LEFEBVRE, *Diderot*, p. 297.

4) 『セネカ論』（第2版）にかんして，アンリ・ルフェーヴルは上掲『ディドロ』のなかで次のような，やや力点を異にする2つの評価をくだしている。（この評価は『セネカ論』第2版に与えられたものではあるが，そのまま初版にも妥当する。）まず第1章において，著者はこうのべている。「老人になっても，ディドロはその力をいささかも失わなかった。彼は〔時代の腐敗にたいする〕論告を提出する。〔……〕彼はもっとも熱烈な有弁の調子を発見する。」*Ibid.*, p. 45.
これに反して，第4章では次のようにいっている。「生涯の最後の時期に，ディドロは古いストア主義，すなわちかってモンテーニュが自分用に順応させたあの古いストア主義を若返らせて，一種の道徳的均衡状態と，ひとつの道徳とを発見した。この種の最終的成功こそ，どのような証明にもまさって，人間の問題の次元における，哲学者の根本的挫折を示している。彼は人間的なものを道

3. 過去の批判を媒介とした現実の批判と未来への期待

古代ローマと18世紀のフランス　本章の冒頭（1.「道徳」,「セネカとの対話」の項）でのべたように，セネカの著作を検討するディドロの視線は，3つの次元に焦点を結ぶ。まず現実における人間の個人的行為の世界（道徳），ついで現実における人間の社会的行為の世界（政治），第3が現実を越えた未来の世界（後世のひとびとへの期待）である。本節では，ディドロの意識における，この後世への期待の構造を扱いたいと思うのであるが，そのためには，まずこの期待の成立根拠である，過去の批判を媒介とした，現在の批判の構造から検討していかなければならない。

『セネカ論』初版におけるディドロが，18世紀のフランス（およびロシアも含めた広いヨーロッパ）と古代ローマ世界とを絶えず比較していたことは，作品冒頭のネジョンへの献辞中のことばからも明らかである。すなわち彼はそこで彼と同年輩の読者が，もしタキトゥス，スエトニウス，セネカの著作を読み，「〔ディドロが〕注意を向けたのとおなじ箇所に注意を向け，自分が生きている時代と過ぎ去った時代とを比較し」，現実の「状況や人物」を見るのとおなじように過去を見て判断をくだせば，「ほぼこれとおなじ本」を作ることができるだろう，とのべている[1]。

事実，読者は作中いたる所で，ディドロがセネカの時代――ティベリウス，カリグラ，クラウディウス，ネロの治世――と自分の生きている時代――ルイ15世，ルイ16世の支配するフランス，エカテリーナ2世治下のロシア――とを，あるいは明示的に，あるいは暗示的に，比較，同一化していることに気づく。

この両時代の比較，同一化は，ディドロにおける自己とセネカとの比較，同一化の意識を中核として，成立したものである。彼自身自分とセネカとのこの類似意識を，やはりおなじネジョンへの献辞のなかで語っている。すなわち彼は，自分の作品が「支離滅裂」，あるいは「曖昧」な印象を読者に与えるかもしれないと断ったあと次のようにいう[2]。

しかしもし読者が，セネカの本と私の本とを同時に比較して読んでくれれば，セネ

徳に，道徳をエピクロス主義の色合いを帯びた，気軽なストア主義に還元し，不変の世界をそのままうけいれる。〔……〕彼の道徳のゆえに，革新的な諸勢力がすでに結集しつつある歴史的時点において，彼は腐敗しか見ることができなかった。」*Ibid.*, pp. 286—288. このルフェーヴルの評価が妥当をかくことは，私の所論が示した通りである。

1) S, pp. (3)—(4); CN, t. I, p. 3; HN, t. I, p. 6; AT, p. 10.

2) S, p. (5); CN, t. I, p. 4; HN, t. I, p. 6; AT, p. 10.

カと私との間に，多かれ少なかれ類似点を発見してくるにつれて，私の本のうちにより多くの脈絡と，明晰さとを発見することだろう。

この類似意識に支えられて，ディドロはセネカの生涯を見，著作を読んでいく。その時彼はセネカとその周囲の退廃した現実との葛藤という情景のなかに，自分自身とフランスの堕落した現実との戦いを読みこもうとする。つまり彼は，自分の周囲の現実という鏡に映して，セネカとその時代を観察し，逆にローマ世界の鏡に映して，自分と現代を熟視するのである。

この現在と過去との絶えざる比較というディドロの特徴は，すでにグリムによって指摘されている。グリムは『文芸通信』（1782年3月）における『セネカ論』第2版の書評のなかで，ディドロが突如として「パリからローマへ，ローマからパリへ，クラウディウスの治世からルイ15世の治世へ，ソルボンヌの教授団からローマの占師の一団へと」飛躍していく，一種の「混乱」について語っている[1]（この書評は，第2版にかんするものであるが，初版にも妥当する）。

グリムは，さらにこの「混乱」が一種の「欠点」には違いないが，同時にそれが作品に「独創的な」性格を付与しているとつけ加えている。たしかにこれは「混乱」である。しかしグリムのいう通り，ディドロはまさにこの「混乱」によってこそ，もっとも彼らしい時代批判を残すことができたのであり，その「混乱」を通してこそ，われわれは彼の意識の奥底をかい間見ることができるのである。

現代の批判　国王の批判——過去を媒介にした現代の観察は，現代——国王，国王の愛妾，廷臣など——にたいする諷刺，あるいは批判となってあらわれる。まずフランス国王への批判から考察しよう。

たとえば，ディドロはメッサリーナに支配されたクラウディウスの宮廷の退廃の進行を批判して，こう語る[2]。「政務官の職〔フランスでは法官の職〕，僧職，市民権，正義，不正は公然と売られる。寵臣たちは結託して，すべての専売権を自分たちの手で独占する。〔……〕皇帝の知らぬ間に，高い官職，軍隊の支配権，特赦，刑罰がやりとりされる。彼の贈物や命令が勝手にとりあげら

1) CORR LIT, t. XIII, p. 104.
2) S, pp. 43—44 ; CN, t. I, p. 40 ; HN, t. I, pp. 29—30 ; AT, p. 36.

れる。彼が下した判決は無視され，彼が署名した認可状は廃止され，その代りに別の認可状が贋造される。」

あるいは，クラウディウスの性格を非難して，次のようにいう[1]。「彼の治世は，まさにそうなるのが当然なようなものだった。すなわちそれは，腐り切った体質，悪い教育，猜疑心，臆病，無力，女好き，放蕩，矛盾する徳と悪徳との混淆などの結果だった。確固たる意志がなければ，君主のその他の美点は役に立たない。威厳がなければ，彼は君主の座から降りて，民衆の群にはいりこんだも同然になってしまう。本来なら，彼のおごそかな頭は，常に群衆の上に高く抜きんでていなければならないのである。国王についても婦人についてもおなじことがいえる。ひとにあまりなれなれしくしすぎると，必ずなにか困った結果が生じる。」

また，ネロの最初の善政についてのべたあと，「国民の最高の希望」の的であった皇帝が突如として暴虐な皇帝に変貌したことは，理解に苦しむと語り，そのあとこう続ける[2]。「ただし，彼がもう老いぼれてしまっていたというのなら，話は別だ。君主の魂が衰弱し，不幸に押しひしがれ，帝国の手綱を握ることが不可能になると，その手綱を，気違い，無学文盲のやから，狂信者に委ねざるをえなくなる。こういう連中は君主の幼少期の偏見，老衰，恐怖心などにつけこんで，即位当時の栄光を傷つけようとする。そんな例は多いし，読者もすぐわかるはずだ。」

当時の読者は，上に引用したクラウディウスとネロにかんする記述のうちに，ルイ15世にたいする諷刺を読みとったはずである。5歳で王位につき，摂政オルレアン公と，デュボア神父，フルーリ枢機卿にひきまわされ，33歳で親政をはじめてからも，常に「確固たる意志」に欠け，「無力」で，「女好き」な君主であった彼は，まさにディドロがローマ皇帝の姿をかりて描きだした通りのものであった。

あるいはまた，ディドロが，宮廷の誰ひとりとして信用できなくなったネロの状況を語ったあと「暴君の不幸な境遇はこのようなものである。自分が遠ざけた誠実なひとにも，周囲に止まっている悪人にも，心を打ちあけることができない」とのべ[3]，またネロの治世の末期の状態を説明し，ついでもしこの時

1) S, p. 82; CN, t. I, p. 67; HN, t. I, p. 47; AT, p. 54.
2) S, p. 92; CN, t. I, p. 76; HN, t. I, pp. 52—53; AT, p. 60.
3) S, p. 112; CN, t. I, p. 116; HN, t. I, p. 78; AT, p. 84.

セネカが皇帝になるように懇願されたら，はたして彼はそれを受諾しただろうかと問うたあと，「病人が絶望的な状態にある時，医者は遠ざかる。命令も，服従もすべきでない時がある。ではどうすべきか。逃げること」と答える時[1]，当時の読者のうちで，暗澹たるフランスの現状を思いうかべない者がいただろうか。たとえばこの最後の一節を読んだ読者は直ちに1776年に，マリー・アントワネットの策動によって財務総監の地位を罷免され，フランスの破滅に瀕した政治・経済状態に絶望しつつ，政府を去っていったテュルゴを想起したはずである。（なお，ディドロがこのような形で現代の諷刺あるいは批判を展開している箇所では，過去のことを語っていても，動詞はすべて現在形におかれている。動詞の時制が，ディドロの暗黙の現代批判の標識になっているといえるだろう。）

国王の愛妾の批判——ディドロの批判はまた，国王の愛妾が国の統治の方針に容喙することから生じる政治の退廃にも向けられる。ディドロは，セネカの青年時代に，彼の叔母が甥のためにローマの宮廷で運動したと語ったあと，次のような感想をのべる[2]。「退廃した世紀の特徴のひとつは，男が徳と才能をもっていても，それだけではなにもできず，女性が——身持ち正しい女にせよ，不身持ちな女にせよ——万事をうまくはこぶということだ。不身持ちな女は悪徳の力で，身持ち正しい女は，この女をなんとか誘惑して堕落させてやろうという周囲の男たちの野心によって。現実の悪徳にせよ，未来に期待される悪徳にせよ，恩恵を求めるのは常に悪徳である。」

あるいは，ティベリウスやネロの宮廷のみならず，すべての時代の宮廷にあてはまる真理であると断わった上で，こう語る[3]。「立派な大臣の職よりも，女衒の仕事のほうがもっと確実に君主の寵遇をえられる。ひとつの戦闘に破れて国の体面を汚しても身に危険はないが，君主の愛妾にたいしてついうっかり侮辱的なことばをはいたり，そんな身振りを示したりするとそうはいかない。」

ここでディドロが批判している「愛妾」が，直接的にはポンパドゥール侯爵夫人を指すことはいうまでもあるまい。確かに彼女は『百科全書』の刊行にかんしては，ディドロたちに好意的であり，ディドロは彼女の恩恵をこうむっている。しかし愛妾政治一般の弊害にかんして，ディドロは沈黙することができ

1) S, p. 230 ; CN, t. I, p. 233 ; HN, t. I, p. 153 ; AT, p. 163.
2) S, p. 33 ; CN, t. I, p. 32 ; HN, t. I, pp. 24—25 ; AT, p. 30.
3) S, pp. 162—163 ; CN, t. I, pp. 179—180 ; HN, t. I, pp. 118—119 ; AT, p. 125.

なかったのである。

廷臣の批判——過去の歴史を媒介とした，ディドロの，現代にたいする諷刺や批判は，このような一般的政治問題だけに限定されてはいない。明らかに彼自身の個人的体験に根ざした諷刺や批判と考えられるものも存在する。

たとえば，ネロの宮廷における廷臣と哲学者のあり方を対比した次の描写のなかに，ロシアのエカテリーナ2世の宮廷におけるディドロ自身の体験が投影されていることはほぼ確実であろう[1]。「罪深い君主の傍で生きる善行のひとは，なんと不幸な状況にいることだろう。なん度彼らは，自分の性格を無理矢理におし殺さねばならないことだろう。だが，廷臣と哲学者とは，次の点が違う。すなわち廷臣は，君主の御機嫌をとる機会をうかがうのに反して，哲学者は，その機会を避ける。哲学者は，このいつわりに悩み，赤面し，自分を咎めるが，廷臣は，うまくやったと得意になる。」

またたとえば，ブッルスの性格と行為にかんしてはひとびとの意見が一致するのに，セネカのそれについては意見が分裂するのはなぜか，という問にたいする，次のような答のなかにも，ディドロの体験が読みとれる[2]。「なぜなら明らかにひとは軍人にたいしては，賢者にたいするほど多くのことを要求しないからである。それに，哲学者は宮廷の有徳者を中傷したりしないのに，廷臣はしばしば哲学者を中傷して喜ぶからである。」

君主への直接的呼びかけ——上記のような暗示的諷刺，批判と並んで，作中には過去の実例を教訓とせよという，君主への直接的勧告，呼びかけが存在する。たとえば彼は，母親のアグリッピーナを殺害したあとカンパーニア地方にひきこもっていたネロが，人民の意向に内心恐れを抱きつつローマに帰って来た時，人民は皇帝の危懼に反して歓呼して迎えたと語ったあと，次のように続ける[3]。「諸国の君主よ。首都であなた方につきまとう歓呼の声と，あなた方の豪奢な馬車をとり囲む臣下の群のほんとうの価値を，今こそ認識されるがよい。この歓呼の儀式が，心からのものであると自分自身に保証できるのは，良心だけである。今日あなた方にしたのとおなじことを，民衆はかつて親殺し〔ネロ〕にたいしてもしたのだ。もしあなた方の行列の道筋に臣下がまばらで，堅い沈黙をもっているなら，自分がどれほど軽蔑され，あるいは憎まれている

1) S, p. 162; CN, t. I, p. 179; HN, t. I, p. 118; AT, p. 125.
2) S, p. 163; CN, t. I, p. 180; HN, t. I, p. 119; AT, p. 125.
3) S, pp. 152—153; CN, t. I, p. 173; HN, t. I, pp. 114—115; AT, P. 121.

かに思いをいたされるがよい。」

ヴォルテールへの賛美　『セネカ論』初版には，上記のような過去を機縁とした現在の諷刺，批判以外に，直接的な同時代人への言及——賛美と批判——がある。賛美はヴォルテールにたいするものであり，批判はルソー，およびラ・メトリ，サン＝テヴルモンに向けられたものである。まず，ヴォルテールにたいする賛美から検討していこう。

『セネカ論』初版の執筆に際して，ディドロがヴォルテールの生涯と業績にかんする，全体的な評価をまとめて発表しようとした外面的契機は，この作品が完成に近づいていた1778年5月30日に突発したヴォルテールの死である。ディドロが，セネカの『ルーキーリウスあての書簡集』（第77信）の一節をめぐって，のべていることばのなかには，このヴォルテールの葬儀に際会したディドロの感慨が表明されている。すなわち彼は，「皆のことばを聞いていると，まるで短すぎない人生はないみたいだ」というセネカの一節を引用したあと，こう語っている[1]。「そうだ，偉大な人物，有徳な人物，有用な人物の人生は必ず短すぎる。死後の葬儀がはっきり示すのは，まさにそのことだ」と。

では，ディドロがヴォルテールの生涯において，もっとも高く評価するのはなんだろうか。「私が，ヴォルテールにたいして羨ましく思うのは，彼のカラスの弁護であって，悲劇『マホメット』ではない。」ディドロは，文学者としてのヴォルテールよりも，むしろ善行の実践者としてのヴォルテールを尊重する[2]。

もちろん彼はこのような自分の基本的立場にたいする反論を当然予想している。すなわち，善行の実践者よりも，芸術的天才のほうがはるかに稀であり，「〔祖国防衛のために1日のうちに〕死んでいった300人中，エウリピデスやソフォクレスの詩の一行を創造しうる人間は，ただのひとりもいなかった」ではないか，という反論である。これにたいしてディドロは，なおも，「確かにその通りだ。だが彼らは実際に祖国を救ったのだ」と答えて，彼の基本的立場を擁護し続けている[3]。

しかしだからといって，ディドロが文学者ヴォルテールの天才を過少評価していたと考えるなら，それは誤りである。事実はむしろ逆であった。『マホメット』，『アルジール』，『ブルータス』，『タンクレッド』などの悲劇を書き，そ

1) S, pp. 330—331 ; CN, t. II, p. 89 ; HN, t.II, p. 62 ; AT, pp. 252—253.
2) S, p. 384 ; CN, t. II, p. 146 ; HN, t. II, p. 98 ; AT, p. 285.
3) *Ibid.*

の他のあらゆる文学ジャンルに手をのばしていた文学者ヴォルテールの死を，ディドロは次のように嘆息する[1]。「ヴォルテールが文学のほとんど全ジャンルに残していった巨大な空白をいったいどのようにして埋めればいいのだろう。もし私が，彼は今までに自然が生みだした最大の人物だったといっても，賛成者がえられるだろう。さらに，これほど非凡な人物を自然は今までに生みだしたことがないし，また今後も恐らく生みだすことはあるまいといったとしても，反対するのは彼の敵だけであろう。」

ディドロはまた，『セネカ論』初版の別の箇所で，ヴォルテールの文学者としての業績と，社会的活動家としての業績の一覧表を示している。文学者としての彼の名前は，「文学のすべてのジャンルにおける多数の崇高な作品によって」「不滅」である[2]。

> 啓蒙された地上のすべての国で，賛美と尊敬の念をこめて発音されるあなたの名前は，もっとも遠い後世にまで伝えられ，世界の破滅の時にならなければ消えさることがないでしょう。

まず，文学者ヴォルテールは，フランスがもちえた「第1の，そして唯一の叙事詩人」である（ラシーヌほどの「諧調」をもたないにしても，コルネーユに比肩すべき高貴な調子」をもつ）。しかも，劇作を通して「哲学の声」をひとびとに聞かせることに成功した。「軽詩」においては，古今無類である。イギリス文化の紹介者としては，ロック，ニュートン，シェイクスピア，コングリーヴをフランスに伝えた。そのほか，非凡な戯曲『オルレアンの少女』，悪人への嫌悪を読者にふきこむ歴史書，「熱と理性と独創性にみちた」小説とコントを書き残したのである[3]。

ヴォルテールの名前は，また「目覚ましい活動」によって光彩をはなっている。彼は処刑された無実の人間，カラスの弁護をした。さらにその家族の名誉を挽回してやった。私財を投じてフェルネの町を建設し，そこに時計職人の仕事場を作らせた。こうして彼は，国王すら獲得したことがないほどの「称賛」をえたのである。「あなたの一日と自分の生涯とを取りかえたい」と思わないよう

1) S, p. 331 ; CN, t. II, p. 89 ; HN, t. II, p. 62 ; AT, pp. 252—253.
2) S, p. 460 ; CN, t. II, p. 232 ; HN, t. II, p. 152 ; AT, p. 342.
3) *Ibid.*

な人間が，われわれのなかにいるだろうかとさえ，ディドロはいう[1]。

彼は，このあとさらに次のようにことばを続けている。

> それに，嫉妬と羨望に狂った，つまらぬ虫けらが刺したからといって，あなたの幸福に傷がつくものでしょうか。あなたは御自身の真価を御存知ないか，それとも御自身を充分に尊重していらっしゃらないか，どちらかです。今こそ御自身の高さをお認めください。そして，どれほどの力で矢が射られようと，決して天にはとどかないことを御承知ください。〔……〕ああ，なんと悲しいことだろう。私がこんなふうにあなたに語った時には，あなたはまだ生きておられたのだった[2]。

ディドロのヴォルテール評価の基本的立場は，彼の芸術的創作の独創性を認めつつも，むしろ彼の絶えざる「徳」の実践を優先して評価するところにあった。ディドロのこの立場は，『セネカ論』初版を通じて一貫している。だから彼はセネカにかんしても，おなじようにいう。「セネカの断想のうちから，私が引用したいと思うのは，知性の美しさを示しているものではなくて，むしろ魂の善良さを示しているものの方だ。なぜなら私は，この２つの特徴のうちで，知性の美しさよりも魂の善良さの方を高く評価するからであり，美しいページを書くよりも美しい行為をやりとげるほうが好ましいと思っているからだ。」[3]

1) S, p. 462 ; CN, t. II, p. 222 ; HN, t. II, p. 153 ; AT, p. 342.

2) S, pp. 462—463 ; CN, t. II, p. 223 ; HN, t. II, p. 153 ; AT, pp. 342—343.
ディドロのこの文章——「私がこんなふうにあなたに語った時……」——が真実を伝えているとすれば，彼は1778年２月10日からパリのボヌ街にあるヴィレット侯爵邸（これはタランヌ街のディドロ家のすぐそばである）に滞在していたヴォルテールを訪問したことになる。だがこれは事実だろうか。２人の研究者ジャン・ファーブルとポール・ヴェルニエールはこの会見の真実性を否定している。
これに反して，ジャン・ヴァルロットは次の事実を根拠として，この会見の真実性を承認する。——『セネカ論』初版が出版されるとすぐ，グロジエ神父は『文学日報』のなかで，今引用した対話の一節をとりあげ，ディドロが「こんな〔なれなれしい〕調子で桂冠詩人に話しをしたはずがない」と断言する。これにたいしてディドロは３年後の第２版中で，グロジエ神父に反論を加え，「私は，この偉大な人物の年齢と優越性に当然払うべき敬意は持ち続けながらも，私にとって好ましい卒直な調子で，会話のなかでも手紙においても遠慮なくド・ヴォルテール氏に向って反対意見をのべてきた。それでも同氏を怒らせたことはなかった。同氏の不機嫌な返事を耳にしたこともなかった」とのべている。彼はこのあと，初版よりもさらに詳しく，ヴォルテールとの会見の状況を再現している。ヴァルロットは，以上の事実から次のように結論する。「もし彼が，実際にヴォルテールに会いに行っていなかったなら，せんさく好きで，敵意をむきだしにした口のうるさい同時代人を前にして，まったくの作り話をすぐ印刷させたというようなことはありえないと思われる。」
しかし，このヴァルロットの論証にもかかわらず，おなじ事実を根拠にして，反対の結論を導きだすこともまた可能ではあるまいか。すなわち，ディドロは初版における作り話（«affabulation»）に，より説得性をもたせるため，第２版でさらに詳細な会見記をつけ加えたという結論である。現在までのところ，この問題にかんしては，確定的なことはのべられないように思う。CORR, t. XV, pp. 87—89 参照。

（なおここで，ディドロが，セネカの行為の弁護に際して，「すぐれた知性」の立場ではなくて，「美しい魂」の立場に立っていたことを想起されたい。）

「美しいページ」を犠牲にしても「美しい行為」をなしとげる，というのは，18世紀の思想家・文学者たちが共有していた「哲学者」の理念であった。そして，ディドロがセネカの生涯のなかに見たものこそ，この理念の現実化——および，それにともなうセネカの個人的悲劇——にほかならない。

このような視点から見る時，なぜディドロが，『セネカ論』初版のなかで，ヴォルテールの生涯について語ったかという内面的理由が明らかになるだろう。すなわち，ヴォルテールもまた，ディドロとおなじく，この「哲学者」の理想に忠実にその生涯を生きた人物だったからである。専制君主——ネロ，エカテリーナ２世，フリードリヒ２世——の傍で，彼らを善に向わせようと努力したセネカ，ディドロ，ヴォルテールの使命は，いずれも現実的には挫折している。しかし，失敗を恐れることなく現実の改革に進みでたという事実のなかにこそ，ディドロは「美しい魂」のあかしを見ようとするのである。こうしてディドロは，ヴォルテールの生涯の意味を確認することを通して，自分自身の生涯の意味をも確認しようとする。そしてまさにそのために，ディドロは『セネカ論』初版のなかにヴォルテールへの賛美を付加したのである。

しかし，時代は，このような「哲学者」の理念を共有する「美しい魂」を生みだしただけではなかった。ディドロの傍には，また，ひとりの「狡猾な悪漢」をも生みだしていたのである。

ルソーへの非難　ディドロは，スイッリウスにたいするはげしい攻撃（第３章２における「スイッリウスの告発」の項参照）を本文で展開したすぐあとに，長文の脚注をつけ，そのなかで主題とは無関係なある「狡猾な悪漢」に罵倒に近い非難を加えている[1)]。

しかも，ディドロはこの非難を自分自身のことばとして語ることを慎重にさけ，「誠実さと学識で知られたある人物」がおこなった「指摘」であると偽って，直接話法で叙述している。

当時の読者には，一読して明らかだったはずであるが，この「狡猾な悪漢」とは，ジャン＝ジャック・ルソーを指している。この「誠実さと学識で知られ

3) S, pp. 383—384 ; CN, t. II, p. 146 ; HN, t. II, p. 98 ; AT, p. 285.
1) S, pp. 121—122, note (191) ; CN, t. I, p. 125 ; HN, t. I, pp. 84 ; AT, pp. 90—91.

たある人物」は，次のように語る。

「こういう奇妙なことが以前にもなかったわけではないが，不正で残酷な〔他人への〕非難を本当らしく見せかけるために，自分自身を醜悪な色どりで描く狡滑な悪漢によって，正直な人間が容赦なく中傷されている作品が，あらわれるかもしれない。その時を予期して，こう自問してみるがよい。いったい，ある破廉恥漢，あるカルダーノが，自分は数え切れない悪行を犯しましたと自白したからといって，それが〔彼の発言の〕信ずるにたりる証拠になるだろうか，と。〔……〕彼の恥ずべき中傷文書〔ルソーの『告白』を指す〕を遠くへ投げ捨てよ。〔……〕彼の偽りの雄弁に誘惑され，彼の熱狂者の幼稚で気違いじみた興奮の叫びにひきずられて，彼の共犯者になることを恐れよ。恩人の悪口をいうこの恩知らずを憎悪せよ。自分にうちあけられた，または自分が生前に目撃した秘密を，墓の上であばくこの卑法者を憎悪せよ。私は，はっきり誓うが，自分の目を彼の作品で汚すことは決してないだろう。またはっきり断言するが，彼にほめられるくらいなら，非難されたほうがましだ。」誰かが彼に「私も同感です」と答えた。だが私はこんな人間がかっていたとも，これからあらわれるとも思わない。

ディドロは，なぜスイッリウスの人格を攻撃したすぐあとで，これほど唐突に，ルソーへの非難を脚注として挿入したのだろうか。

納得できる説明は，ひとつしか考えられない。——この脚注はルソーの死によって突然に現実化した，彼の『告白』の出版にたいして，急遽ディドロがとった対抗措置であった。

すでにのべたように（第二部，第Ⅰ章，1），ヴァルロットによれば『セネカ論』初版は1768年6月以前に完成していたと推測されるのであるが，その直後，1778年6月2日にルソーがエルムノンヴィルで死亡する。同年5月のヴォルテールの死にすぐ続く，このルソーの死は，以前から予想されていたものとはいえ，ディドロとその仲間とを恐慌におとしいれる。なぜなら，それは，「正直な人間〔すなわち，ディドロ一派〕が容赦なく中傷されている」はずの『回想録』（当時，ひとびとはまだ『告白』をこう呼んでいた）の出版——ディドロたちの破局——の日が近ずいていることを意味したからである。ダルジャンソン侯爵の『秘録』1778年7月20日号は，すでに次のように報じている[1]。

1) CORR,t. XV, p. 98, note 9.

ディドロ氏は，ルソーの『回想録』の出版をもっとも恐れているひとたちのひとりである。同氏の語るところによれば，同氏は生涯の20年近くを彼ともっとも親しく暮してきたので，この厚顔な男が，なにもかも洗いざらい，ひとりひとりの実名をあげて，忘却の淵に沈めたほうがよいような多数の事柄を，あばきだすことは疑いないという。同氏のことばからも，ルソーが根っからの悪人であることがわかるだろう。

ついでメトラが，『秘密通信』8月18日号に，ルソーを擁護した，次のような記事を掲載する[1]。

われわれは，今世紀最大の2人の人物，J.-J.ルソーとヴォルテールとを最近失ったばかりだから，きっとそのうちになにかの本のなかで2人の対比があらわれるにちがいない。

すでに哲学者一派はJ.-J.ルソーは，不徳義漢であるとか，恩知らずであるとか，その他この種の御親切なことばを，社交界でたえずふりまいている。たとえどんな贈物でも，贈物と名のつくものは全然受けとろうとはせず，他人からほんの少しの恩義を受けることさえも恐れ，貧困のうちに生きて，死んだ人間が，恩知らずの非難をうけるなどということは，私には信じられない。彼を非難する連中の大部分が，徳を頭で描いているだけだというのに，「心情の豊かさから」沢山の作品のなかで徳を描きだした人物が，不徳義漢であるるなどということは，私には信じられない。おなじ百科全書派たちは，ヴォテールの美しい魂を称揚することに努めている。

メトラがはやくもその出現を予想していたように，ルソーとヴォルテールとの「対比」——ルソーの非難とヴォルテールの称揚——は，『セネカ論』初版のなかにもすでにあらわれており，それがこの作品の顕著な特徴のひとつである。(「対比」といっても，2人はそれぞれ別の箇所で論じられていて，直接的な両者の比較は見られない。)

ところで，こういう歴史的状況のなかに先のディドロのルソーへの非難の文言をおいてみると，この文言全体が著しく具体性を欠いた慎重な表現をとっている——すべての非難は第3者の口に仮託して語られている——理由が納得できるだろう。すなわち，『告白』がまだ公刊されていない以上，ディドロはそこで自分がどのように攻撃されているかわからないから具体的に反撃のしようがなく，またもし将来『告白』を読んだのちに，必要とあればルソーへの非難

1) *Ibid.*

を撤回する余地を残しておかねばならなかったのである。しかし，ディドロはのちになっても彼の意見を変えず，かえって，第2版では激烈な攻撃をルソーにあびせかけることになるのであるが，これについては，第三部でのべる。（ディドロのルソー攻撃にもかかわらず，『セネカ論』初版におけるディドロの考えが，ルソーの思想ときわめて類似していることは，本第二部中で幾度か指摘してきたが，両者の関係についての最終的な分析は，第三部で行なう。）

ただ，ディドロが，このルソー攻撃の注を，スイッリウスによるセネカの財産にたいする攻撃と，それにたいするディドロの弁護のあとに付加したという事実は，かなり暗示的である。第1にそれは，ディドロが，一生清貧を貫いたルソーから，彼の財産——エカテリーナの恩恵によって得た財産——にかんして非難されることを予期していたと推測させ，第2にそれは，ディドロの意識におけるルソーとスイッリウスとの同一化を示すことによって逆に，ディドロとセネカとの同一化の意識を証明しているからである。

ラ・メトリへの批判　ディドロが攻撃する第2の敵は，ラ・メトリである。ジュリアン・オフレ・ド・ラメトリは，1709年に生まれ，1750年に死んでいるから，1750年から活躍期にはいるディドロとその仲間の百科全書派にとっては1世代前の思想家に当る。

ディドロが『セネカ論』初版のなかで，ラ・メトリにたいしてはげしい批判を展開するようになったのは，セネカの『ルーキーリウスあての書簡集』（第29信）中の一節が，直接の契機であった。彼はこの一節に触れながら次のようにのべている[1]。「ローマでも，哲学者一派の同類だと皆から好んで噂されていた悪漢がいたことがわかる。この噂は，悪漢の破廉恥な振舞いを利用して，哲学者の純粋さに泥をぬってやろうという皆のむごい魂胆からでたものだ。この事実が私に想起させるのは，『反セネカ論』の著者のことであり，さらにこの著者と，真理を探求し，徳を実践しつつ一生をすごす賢明で啓蒙されたひとびととを同類扱いしようとする哲学者の敵どもの，しっこく，わざとらしい手口のことである。」

ここで，『反セネカ論』と呼ばれているのは，『幸福論』という副題をもつラ・メトリの倫理学の著作であるが，ディドロはこのあとまず，「ラ・メトリは，セネカの教説を知らないで，それについて語った，判断力のない著作家で

1) S, p. 293 ; CN, t. II, p. 29 ; HN, t. II, pp. 21—22 ; AT, p. 217.

ある」と断定し，ほとんど罵倒に近いことばを使って彼を非難している。その主な論点は次の通りである[1]。

第1，ラ・メトリは，セネカのなかにきわめて厳格なストア主義者を見ているが，これは誤りである。

第2，この『幸福論』中，よく書かれた部分は，すべてセネカからの剽窃か，それとも「まぐれ当たりに発見した」——「不幸にもそんなことはきわめて稀であるし，またきわめて稀でしかありえなかった」——ものである。

第3，彼の所説には，いたる所で矛盾がある。——賢者の悩みと悪人の苦しみとを混同し，学問から生じる些細な不都合と無知がもたらす有害な結果とを取りちがえている。ある所では，人間は天性邪悪であると主張しながら，別の所では，人間の本性が義務の規範，幸福の源泉であると断定している。

第4に，彼が書いたものには，「精神の軽薄さ」が読みとれるし，語らない部分には「心情の腐敗」がうかがえる。彼は，犯罪者と背徳者に安心を与えようと努力しているかのようだ。

第5，荒っぽいが，楽天的な詭弁を弄している。それだけでも彼が「道徳の初歩的観念」すらもっていないことは明らかだ。この「理性と不条理の混沌」を嫌悪なしに読みうるのは「浮薄な読者」だけである。

以上のようにのべたあと，ディドロは次のように結論する。

> 彼の原則を最後の結果までおし進めていけば，法をくつがえすことになるだろう。両親から子どもの教育を免除することになるだろう。常規を逸した自分の性向と愚かにも戦おうとした勇気ある人物を精神病院に閉じこめることになるだろう。自分の放埒な性向にいささかの悔恨もなしに身を委ねた悪人に，不滅の名声を保証することになるだろう。

ディドロは，なぜこれほどまでに，ラ・メトリと自分の立場の違いを強調するのだろうか。いうまでもなく，彼は『人間機械論』の著者とある種の基本的論点を共有している。すなわち，道徳を宗教から解放し，感覚的な快楽の価値を復権したことである。しかしディドロは，そこから出発しながら，ラ・メトリのように道徳を生物学的次元における個人の幸福（官能的快楽）の問題に還元しようとはしない。ディドロにとって，道徳とは，なによりも社会における

1) S, pp. 293—296 ; CN, t. II, pp. 29—31 ; HN, t. II, pp. 22—23 ; AT, pp. 217—218.

「義務の認識と徳の実践」であった。（同時にディドロは，セネカが「官能的快楽の軽視それ自体が，官能的快楽」であると主張して，「官能的快楽」の意味そのものを否定しようとする時，これにも反対する。その点では，ディドロはラ・メトリと基本的出発点を共有する。）そこからディドロと「哲学者」たちの，道徳・教育・政治の改革プログラムのすべてが生まれてきたのであった。したがって，ラ・メトリへの批判は，ディドロ自身の改革のプログラムの擁護の意味をもっていたのであり[1]，しかもそれは，ディドロのうちにあるセネカとの同一化の意識に支えられて，『セネカ論』初版のなかに挿入されたのであった。

サン＝テヴルモンへの批判　ディドロの批判はまた，「官能的エピクロス主義者，才人」であるサン＝テヴルモンのセネカ解釈にも向けられている。ディドロは，生前「愛すべき放蕩者」と呼ばれていたこの17世紀の「軽薄才士」には，「セネカの著作を評価する」ことも，「彼の厳格な原則を認める」ことも不可能だと断定したあと，次のように順次彼の主張を反駁していく[2]。

第1，サン＝テヴルモンは，「この哲学者〔セネカ〕の著作よりも，人物のほうをはるかに高く評価する」とのべているが，実は彼の著作も，人物も知らないのである。

第2，彼はまた，「ネロの教師」，「アグリッピーナの愛人」，「ローマ帝国〔の帝位〕を狙った野心家」として，セネカを尊敬するという。しかしセネカはユーリアの愛人でもアグリッピーナの愛人でもない。（これはディドロが作品の前半ですでに証明したことであるが，それをここでも繰り返している。）

ディドロは，このサン＝テヴルモンの主張は「ディオンや，修道僧クシフィリヌスのことばの繰返し，破廉恥漢スイッリウスのことばの繰返し」にすぎないという。また，セネカが皇帝の座を狙っていたという主張にたいしては，セネカが皇帝にたいするピーソの陰謀事件に連座していないという事実だけからも，それが偽りであることは明らかだとのべている。

第3，サン＝テヴルモンは，現実の世界で活躍した実践家セネカにくらべると，哲学者と著作家としてのセネカは余り評価できないという。ディドロはこれにたいして，それは厳格すぎる評価だとのべ，権威ある次のひとびとでさえ，サ

1) Pierre NAVILLE, *D'Holbach et la philosophie scientifique au XVIIIe siècle*, Gallimard, 1967, pp. 173—181 参照。
2) S, pp. 349—358 ; CN, t. II, pp. 112—119 ; HN, t. II, pp. 76—81 ; AT, pp. 266—270.

ン＝テヴルモンほどにきびしくはないとセネカを弁護する。すなわち，クインティリアヌス，コルメラ，プルタルコス，ユヴェナリス，フロント，マルティアリス，シドニウス・アポロナリス，テルトゥリアヌス，ラクタンティウス，聖アウグスティヌス，聖ヒエロニムス，ジュストゥス・リプシウス，エラスムス，モンテーニュなどの「高名な」文学者たちである。セネカの著作中には，他のどんな古代作家の作品よりも，多くの「健全な道徳」があり，彼の１通の手紙のうちには，サン＝テヴルモンの15巻の著作集よりも，多くの「すぐれた思想」があると，ディドロは主張する。

また，サン＝テヴルモンは，セネカのラテン語には，アウグストゥス時代のラテン語の美しさが欠けており，平易さと自然さがないという点と，彼の警句や想像力の展開には，ギリシア，イタリアの「明るさ」ではなく，アフリカ，スペインの「熱気」が支配している点とを，彼の欠点として指摘する。これにたいして，ディドロは，サン＝テヴルモンのあげるような欠点がセネカにあることを認めつつも，これらはすべて「軽い欠点」にすぎないという。また彼の警句が，目ざわりであるとしても，それはサン＝テヴルモンの警句とおなじ程度に目ざわりなのであり，彼の「熱気」と呼ばれるものにしても，それは「天才の欠如」ではなくて「ストア主義の熱狂」を示しているにすぎないとのべてセネカを弁護している。

第４，サン＝テヴルモンは，セネカがネロの宮廷で「衒学者」扱いされていたといって非難する。それにたいしてディドロはこう反論する。セネカを衒学者扱いしたのは誰か。ティゲッリーヌス，パッラス，ナルキッスス，スポロス，アテナゴラスたち一派，すなわち「恥すべき放蕩者，風俗の紊乱者，怪物〔ネロ〕の御機嫌とり，最高刑に処すべき背徳者の群」にほかならない。だから彼らの目に滑稽に映ることこそ，むしろセネカの「名誉」である，と。

第５，サン＝テヴルモンは，「彼〔セネカ〕の徳は〔ひとびとに〕恐怖を与える」という。ディドロはそのことを認める。ただし「彼〔サン=テヴルモン〕は，自分の欠点を自慢するが，私は自分の欠点を恥ずかしく思い，彼はこの〔セネカの〕徳を笑いものにするが，私はその前で膝まずく，という点だけが違う」とディドロはいう。

第６，サン＝テヴルモンは，セネカが「死」をいとわしくえがきすぎるという。これにたいしてディドロは，「サン＝テヴルモンは，自分がそっと仲間に

はいりこんだ一派〔エピクロス派〕にふさわしくない。彼は師のエピクロスの最後の瞬間の話を蒼ざめずにはきけないだろう」とのべている。

第7，サン＝テヴルモンは，最後に，セネカが莫大な「富」を享受しておきながら，ひとには「貧困」を説いたのは「おかしい」と非難する。これにたいしてディドロは，セネカの実生活が「質素」であったこと，「富」はただ「慈善の資金」として使用されただけであって，「彼は富を維持する面倒と，それを正しく使用する困難」とを味わったにすぎないと抗弁している。そしてこう結論する。「ほんとうにおかしいのは，セネカのように尊敬すべき人物の，著作，教説，生き方にかんして，これほどはっきりと，しかも品の悪い調子で断定をくだす軽薄な老人のおかしさである」と。

ディドロが，サン＝テヴルモンに許せなかったのは，彼が一方においてセネカを官能的快楽，個人的虚栄を追求する野心家であると歪曲しながら，その歪曲したセネカ像を高く評価し，他方セネカの真の姿——有徳の哲学者——を笑いものにしたという点であった。セネカのなかに自己を投入しているディドロにとって，セネカの敵はすべて彼自身の敵であった。

この論敵サン＝テヴルモンにたいして，ディドロはセネカを擁護しようとする。ディドロによれば，セネカの真の姿は，セネカ自身が語った，次の「徳の姿」のなかにあらわれているという[1]。

> 真理を認識する魂。この魂は善と悪とを識別する。事物を，他人の意見に左右されないで，その本性によって判断する。思惟によって宇宙のすみずみまで赴き，宇宙の驚くべき運行を研究し，ついで観想から実践に帰る。魂の偉大さと力強さの基礎には，正義がある。魂は甘言と同時に，威嚇にたいしても抵抗できる。幸福と同様に不運をも支配できる。必然的な出来事や偶然的な出来事を超越する。慎ましさのない美や抑制と簡素さのない力強さであれば，欲しがろうとはしない。暴力も打ち倒すことができず，運命も恥かしめたり，高慢にしたりできない，大胆で不屈の魂。こういう魂が徳の姿である。

これがセネカの理想の「徳の姿」であると同時に，晩年のディドロの理想の「徳の姿」でもあったことは，すでに本論の私の説明から明らかになっていることと思う。

1) S, p. 355 ; CN, t. II, pp. 116—117 ; HN, t. II, p. 79 ; AT, p. 268.

未来への期待　これまでの考察によって明らかになったように，『セネカ論』初版におけるディドロの基本的立場は，セネカとの同一化であった。退廃した時代に「哲学者」として専制君主を導き，「実践」の場で「徳」を追求し，道徳と政治の世界で「運命」と「暴力」に抗して「魂」の自律性をまもるという点において，ディドロはセネカと生の理想を共有している。

けれども，セネカはこの作品においてひとつの象徴——不当に迫害された善人の象徴——である。ディドロにおける他者との同一化の意識は，決してセネカだけを対象とするものではなく，セネカのように不当に苦しめられた人間，権力者にしいたげられた弱者すべてに——ただし彼らが精神の自律性を放棄して，奴隷的境遇に甘んじてしまわない限り——向けられていく。『セネカ論』初版におけるディドロのセネカ弁護，道徳論，政治論，過去の批判を媒介にした現在の批判などすべての問題領域における，論理の展開を根底において支え，それらにいわば一貫した構造を与えているのは，ディドロの意識のもっとも深い層に存在する，この不当に迫害された善人との同一化の意識——彼らへの「同情」(«compassion»)[1]——なのであった。

このようにして，ディドロはセネカ——およびすべての迫害された善人——の立場に自己を投げいれ，彼らがこうむった非難を，自分自身の身のうえにひきうけて，彼らを弁護し，非難者に反駁する。そこには明らかにデイドロの意識における二重性が認められる。すなわち，セネカに象徴される非難された善人に自己を同一化する意識と，彼らの弁護者としての意識との二重性である。しかしこの二重性は，ディドロの意識の内部で，決して分裂をひきおこすことなく，そこにひとつの統一ある全体性を保っている。ディドロによるセネカの

1) S, pp. 390—391 ; CN, t. II, pp. 155—156 ; HN, t. II, p. 104 ; AT, pp. 291—292.
ディドロにおける他者との同一化の原理「同情」(«compassion»)は，直ちにルソーにおける他者との同一化の原理「憐れみ」(«pitié»)を想起させるだろう。両者はきわめて類似している。だがディドロにおける他者との同一化の志向とルソーのそれとの間には，根本的な相違点が存在する。それは，ディドロは他者のうちにある自己との異質性に余り敏感ではない——したがって原則としてすべての人間と同一化したがる——のに反して，ルソーは他者のうちにある自己との異質性に極度に敏感である——したがって自分と異質なものを拒否し，同質なものだけとともに閉鎖的共同体をつくろうとする傾向をもつ——という点である。ジャック・プルーストはこの両者の傾向の違いを，ルソー『孤独な散歩者の夢想』(「第9の散歩」)の一節と，ディドロのソフィー・ヴォランあての手紙（1760年9月15日付）の一節との比較分析——プルーストはこの分析法を «lecture croisée» と呼ぶ——に基づいて，実証しており，きわめて示唆的である。Jacques PROUST, «La fête chez Rousseau et chez Diderot», dans les *Annales Jean-Jacques Rousseau*, 1971.
なおディドロが，尊敬する人間にたいして示す，ある種の認識の甘さ——特に『セネカ論』初版で示したセネカへの甘さ——は，ディドロ独得の他者との同一化のあり方によって説明できるだろう。

ための弁護が，結局は自分自身（セネカと同一化した自己）のための，自分自身（セネカの弁護者としての自己）による弁護という様相を帯びてくるのは，まさにそのゆえである。

だがこの意識の二重性は，たんに現在（弁護者ディドロの次元）と過去（弁護されるセネカ，すなわちセネカと同一化したディドロの次元）との関係のうちだけに出現するものではない。のちに来る者が，過去の不当に迫害された善人を弁護するという関係は，ディドロのうちで，強い未来への期待となって結晶し，未来と現在との関係のうちにも投げこまれるにいたる。たとえば，ディドロは次のようにいう[1)]。

> われわれの巨大な図書館，すなわち天才の作品と，汚物のごとき文学作品との共通の収蔵庫は，両種の作品を無差別に保存するだろう。未来のある日，今世紀のもっともすぐれた著作家たちを誹謗した文書が，これらの文書を執筆させたのとおなじ精神に駆りたてられた悪人の手で，埃のなかならひきだされることになるだろう。だが，次のこともまた確実である。それとおなじ時に，怒りに燃えた誰か善行のひとがあらわれて，中傷家たちの醜行をあばき，そのひとの努力によって，これらの有名な作家たちが，今セネカが私によって弁護されているよりも，もっとよく弁護され，もっとよく恨みをはらされるだろうということだ。

ディドロが視点を未来に移す時，そこで非難され中傷されているのは，ディドロ自身とその仲間の哲学者たち――「今世紀のもっともすぐれた著作家たち」――である。そして，かつてスイッリウスがセネカを非難したのとおなじように，今世紀のディドロとその仲間たちを非難するのは，ルソーの『告白』を筆頭に，反哲学者たちの「誹謗」「文書」である。そして現在，ディドロの同時代の「悪人」が，セネカにたいするローマ時代の誹謗をむしかえしているのとまさにおなじように，未来のある日，「悪人」どもが，ディドロとその仲間を中傷した文書――たとえば『告白』――を，図書館の「埃のなかから」，ひきだしてくるにちがいない。だがディドロは，「それとおなじ時に」，現在ディドロがセネカを弁護しているのとちょうどおなじように，「怒りに燃えた誰か善行のひと」があらわれて，自分を弁護してくれることは確実だという。

もちろん，理性的立場に立つ限り，「怒りに燃えた誰か善行のひと」が，将

1) S, p. 359 ; CN, t. II, p. 120 ; HN, t. II, p. 81 ; AT, p. 270.

来あらわれてディドロの名誉を回復してくれるという保証は存在しないであろう。だがディドロは，一方でセネカ弁護者としての自己の意識を未来にあらわれる善人のうちに，他方では非難されているセネカの立場を現在の自己の立場のなかに，それぞれ投影して，自分の死後の名誉が未来の善人によって救われることを確信しようとする。

ディドロの現実世界での行動は，このように，同時代人の評価より，むしろ「後世」の称賛を期待しておこなわれていたのである。この「後世」への顧慮は，『セネカ論』初版中で，ディドロの次のような文言のうちにうかがうことができよう。たとえば，セネカが「私は子孫のことを気にかけている。自分の肉体を越えて生き残り，子孫のためになるなにかを考えている」と書いているのを評して，「このようにしてひとは，同時代人と未来の人間の間で名声をえる」（傍点中川）とのべている箇所[1]，あるいはセネカの『ヘルウィア慰藉文』を評して，「セネカがこの作品しか残さなかったとしても，善行のひとと，後世の称賛をうる権利がある」（傍点中川）とのべている箇所などである[2]。

ディドロの考えによれば，歴史の世界の内部には，同時代の「善行のひと」と「後世」の「称賛」をうることを目的として，中傷と非難を恐れずに行動したひとびとの共同体が形成されている。その共同体の結合の象徴が，ソクラテス，あるいはセネカにほかならない[3]。

> おおセネカよ。あなたこそ，ソクラテス，すべての輝かしい不幸な人物，および古代のすべての偉人とならんで，私の友人と私の間の，あらゆる時代の賢明なひとたちとその友人の間のもっとも甘美な絆である。

ディドロがセネカの行為を弁明することは，自分もまた，ソクラテス，セネカをはじめとするこれらの「輝かしい不幸なひとたち」にたいする「宗教」的ともいえるような連帯のあかしであった。そしてこの連帯のあかしのなかには，自分もまたこのような「善行のひと」たちの共同体の一員として，人類が存在し続ける限り，人類の記憶のうちにいつまでも消えずにとどめられたいという期待がこめられているのである。そして『セネカ論』初版全体は，このディド

1) S, p. 259; CN, t. I, pp. 276—277; HN, t. I, p. 181; AT, p. 193.
2) S, p. 447; CN, t. II, p. 216; HN, t. II, p. 142; AT, p. 331.
3) S, p. (12); CN, t. I, p. 8; HN, t. I, p. 9; AT, p. 12.

ロの未来における「不滅」への願望を強く表明している[1]。(ディドロにおける「ソクラテス，セネカ，後世」の問題と，「不滅」の問題については，第四部でさらに詳しく説明する。)

第Ⅳ章　ディドロ方法とモンテーニュの伝統

良心の自己検討　『セネカ論』初版に表現されたディドロの意識の構造全体は，以上の考察によってすでに明らかになったと思うが，最後にディドロの意識の中心，その一番深い部分の構造についてもう少し詳しく検討を加えておきたい。ディドロの視線が，自我の枠を越えて世界に拡がりながら，そこで遭遇したすべての問題に判断をくだすために内面に立ち戻って沈潜していく場所，迫害されたすべての善人と連帯する「同情」が流出してくる源泉——それがディドロの心の内奥にほかならない。ディドロによれば彼はそこで，絶えざる自己との対話，絶えざる良心の自己検討を行なっているという[2]。

> 学者，哲学者，および文学者にとって，上流社会のひとびとと交際することがどれほど有益だといわれようと，そして私自身その交際の楽しさを知らないわけではないけれども，私は，学者の才能，生き方は，親しい友人たちと交わり，隠遁した生活を送り，偉大な作家の本を読み，自分の心情を検討し，自己自身とひんぱんに会話するのがふさわしいと，やはり考えている〔傍点中川〕。

ディドロは，この自己自身との対話の習慣を，セネカのなかにも発見する。セネカは，『怒りについて』のなかで，クイントゥス・セクスティウスの「独語」の習慣について説明しながら，自分自身の「独語」について語っている。セクスティウスは，毎日夜が来ると，寝室の腰掛に坐り，「裁判官と同時に犯罪者」になり，「おまえは今日どんな欠点を改めたか，どんな悪い性質と戦ったか，どの点で以前よりよくなったか」，と自問答し，そのあとで，心安らかな眠りにはいったという。セネカは続けていう。「これこそ私が自分にとっておいた裁判官の役目だ。私は，毎日自分自身の法廷に出頭して，セネカにかんして是非の弁護をする。」ディドロは自分もまたいつも，「独語」にふけるとい

1) 『セネカ論』初版全体において，ディドロの視線は，過去にさかのぼることを契機として，直ちに未来に飛躍する。こうして，「人間は，うしろにさかのぼればのぼるほど，また前に飛躍すればするほど偉大」（ディドロ）なのである。PC, p. 88 ; AT, t. XVIII, p. 112.
2) S, p. 259 ; CN, t. I, p. 277 ; HN, t. I, p. 181 ; AT, p. 193.

う。「ああ，そのことはもっと前に考えておくべきだった。わけもわからずに，あんなことをいってしまった。……こんなふうに振舞うべきではなかった。……なんと貴重な機会を逸したことだろう」などと彼は反省する。だが「長い間の経験となんども繰り返した自分への非難によってこそ，ひとは少しずつよくなっていくのである」[1]（傍点中川）。

ディドロの内面を無限に豊かにし，彼の人間を無限によくしていくものこそ，この良心の自己検討——「独語」——と，「経験」なのであった。私は前章の最後で，ディドロの意識の二重性——弁護される人間と同一化した意識と，それを弁護する人間の意識との二重性——について語ったが，この意識の二重性が，ディドロの良心の内部における裁く自己と裁かれる自己との二重性に根ざしていることが今や明らかになったであろう。

だから，あれほど，未来での「名声」にあこがれるディドロが，自分は「有名」になることを望まず，ただ自分の「良心の称賛」だけがほしいのだ，という時，彼は矛盾したことを語っているわけではない。未来の「名声」とは，実はディドロの内部の，裁く自己の「称賛」を未来に投影したものにほかならなかったからである。たとえば，次の一節は，まさにディドロのそのような意識を明白に語っている[2]。

> 皆は，良心の称賛以上に，他人の称賛を尊重している。私は自分が生きているこの瞬間にも，死んでしまったあとからも，ひとから称賛されないだろう。そのことを認めよう。だが，だからといって私の自分自身にたいする評価は変らないし，友人たちの私にたいする愛情も変らないだろ。報賞が確実な善行〔自己の良心の称賛が確実な善行〕と，なにか不都合な結果を生まずにはえられない名声とをとりかえるのは，悪くない交換だ。

別の所でもディドロは，「私はひとびとの判断よりも，私自身の判断のほうがずっと恐ろしいように思う」とのべている[3]。

私は，先にセネカの著作の検討に即しながら，ディドロの道徳論を検討し，道徳の原理が「心情」の直観によって獲得されるという彼の主張を考察したが，この「心情」の直観は，ディドロの内部における絶えざる良心の自己検討のな

1) S, pp. 386—387 ; CN, t. II, pp. 149—150 ; HN, t. II, pp. 99—100 ; AT, pp. 287—288.
2) S, p. 449 ; CN, t. II, pp. 217—218 ; HN, t. II, p. 143 ; AT, p. 333.
3) S, pp. 502—503 ; CN, t. II, p. 275 ; HN, t. II, p. 180 ; AT, p. 372.

かから生まれるものであった。その意味からいえば，ディドロのセネカ弁護も，セネカの著作の注釈——およびそれを契機としたディドロ自身の道徳・政治論，現実の批判——も，すべて，彼の良心の自己検討に裏づけられているということができるであろう。

経験の意味　しかし，彼の良心をなにか永遠不動の実体のごときものと理解してはならない。良心は，「経験」によって変化し，成熟する。

かつて，シャフツベリの翻訳『人間の真価と徳論』につけた注のなかで，ネロに諫言するという義務を果たさず，財産をためこむことに汲々とし，最後には「惨めにも，自分の財産とひきかえに命を助けてもらいに行く」，「賢者セネカ」の姿を描きだして，彼を完全に断罪していたディドロは，『セネカ論』初版のなかでは，彼の弁護をひきうけるまでに変化する。ディドロの内部で，この変化をひきおこしたものは，彼の一生にわたる「経験」であった。32歳の自分の発言を否定し，「セネカがどれほど努力したかが，経験によって理解できるなら，寛容になろうではないか」（傍点中川）と65歳のディドロはいう[1]。

かつて，35歳の時に発表した『お喋りな宝石』（1748年）のアレゴリのなかで，思弁哲学の時代が終って「実験」（«Expérience»）の時代が訪れようとしていると書き[1]，『自然の解釈について』（初版1753年）のなかで，「実験」物理学 «physique *expérimentale*» の支配が来たと語って以来[3]，ディドロは，«expérience» という語の「実験」という意味を強調してきた。しかし，『セネカ論』初版において，«expérience» の意味は，「実験」から「経験」に移行する。（簡単な統計をあげれば，『セネカ論』初版本文中で使用される «expérience» 13例中，「実験」の意味は，1例，第2版への付加部分中には，さらに9例がふえるが，「経験」の意味は1例である。なお第2版へのディドロの注の中の1例は，「実験」，「経験」の両義をもつ[4]。）

1) S, p. 51 ; CN, t. I, p. 46 ; HN, t. I, p. 33 ; AT, p. 40.
2) OR, p. 117 ; AT, t. IV, p. 258.
3) OPH, p. 180 ; AT, t. II, p. 11.
4) 繁雑になるので，初版，第2版それぞれのページ数に，HN ページ数をそえたものだけを示す。
初版——「経験」S, p. 17 (HN, t. I, p. 16) ; S, p. 51 (HN, t. I, p. 33) ; S, p. 70 (HN, t. I, p. 42) ; S, p. 98 (HN, t. I, p. 55) ; S, p. 100 (HN, t. I, p. 57) ; S, p. 179 (HN, t. I, p. 127) ; S, p. 240 (HN, t. I, p. 157) ; S, p. 267 (HN, t. I, p. 183) ; S, p. 278 (HN, t. II, p. 10) ; S, p. 284 (HN, t. II, p. 14) ; S, p. 341 (HN, t. II, p. 69) ; S, p. 387 (HN, t. II, p. 100)
初版——「実験」S, p. (3) (HN, t. I, p. 6)
第2版——「経験」CN, t. I, p. 163 (HN, t. I, p. 108) ; CN, t. I, p. 252 (HN, t. I, p. 165) ; CN, t. I, p. 254 (HN, t. I, p. 166) ; CN, t. II, p. 66 (HN, t.II, p. 47) ; CN, t. II, p. 67 (HN, t. II, p. 47) ; CN, t. II, p. 100 (HN, t. II, p. 69) ; CN, t. II, p. 175 (HN, t. II, p. 116) ; CN,

«expérience» は，今や「人生経験」(«expérince de la vie»)，または「日常経験」(«expérience journalière») という語とともに，この作品中では重要な意味をになってくる。

たとえば，セネカがアグリッピーナの好意によって追放を解除され，コルシカ島からローマに呼びもどされ，法務官職を与えられたことを語ったあと，ディドロは次のようにつけ加える[1]。

> 退廃した宮廷で，恩恵をうけ，あるいは恩恵を懇願するひとは，いつかある日，それにどれほどの代価を支払わねばならなくなるかを知らないのだ。その日こそ彼は，自分の義務と名誉とを犠牲にするか，それともかっての恩顧を忘却するかという選択の岐路に，自分の軽蔑をかうか，それとも恩人の憎しみをかうかという選択の岐路に立たされるのだ。この危険な二者択一を，高潔に，確固たる意志をもって切り抜けることは，想像するほど簡単でも容易でもないことは，経験が余りにもはっきりと証明している〔傍点中川〕。

「経験が余りにもはっきりと証明している」(«L'expérience ne prouve que trop que...») という上の一句や，「私の経験によれば」[2] («d'après mon expérience»)，「経験によって理解する」[3] («nous connaissons par expérience»)，あるいは，「時間と経験とが教えた」[4] («c'était au temps et à l'expérience à apprendre...») というような用法が，はっきり示すように，『セネカ論』初版において，今や「理性」と並ぶもうひとつの判定の原理として「経験」が登場してくる。ある事柄が「経験と理性に一致するか」[5] どうかが，ディドロの判断の新しい基準になる。

ディドロ自身も，自分自身の一生の経験が自分の判断に影響を与えてきたことを自覚しており，セネカの著作の検討をはじめる前に，読者は，「セネカの著作論」のなかに，「人生経験と年齢の成熟とが私の判断に及ぼした影響」[6] を

---

t. II, p. 254 (HN, t. II, p. 166)
第2版——「実験」CN, t. II, p. 260 (HN, t. II, p. 171)
第2版の注——「経験」・「実験」CN, t. I, p. 310, note 191p (HN, t. I, p. 215, note 191p)

1) S, pp. 70—71 ; CN, t. I, p. 59 ; HN, t. I, p. 42 ; AT, pp. 48—49.
2) S, p. 341 ; CN, t. II, p. 101 ; HN, t. II, p. 69 ; AT, p. 259.
3) S, p. 51 ; CN, t. I, p. 46 ; HN, t. I, p. 33 ; AT, p. 40.
4) S, p. 100 ; CN, t. I, p. 82 ; HN, t. I, p. 57 ; AT, p. 64.
5) S, p. 240 ; CN, t. I, p. 240 ; HN, t. I, p. 157 ; AT, p. 168.
6) S, p. 267 ; CN, t. I, p. 280 ; HN, t. I, p. 183 ; AT, p. 196.

読みとるだろうと書いている。

「セネカ論』初版は，ディドロが65歳の時に発表されたという事実によってよりも，むしろそのすべてのページにディドロの生涯の経験が，色濃く影を落しているという意味において，彼の生涯の総決算の書という名に価するのである。

モステーニュの伝統のなかで　私は先に，ディドロがモンテーニュ『エセー』の一節（第２巻，第32章「セネカとプルタルコス弁護」）を引用し，タキトゥスをローマの歴史家としてきわめて高く評価するモンテーニュに共感を示していることを指摘したが，ディドロ自身はこのほかにも幾度か作中で，モンテーニュに言及している。

ディドロは，モンテーニュにたいして，ある種の深い親近性をもっているが，そのことを，２人の文体の類似性に即して，最初に指摘したのは，『セネカ論』初版・第２版の編者ネジョンであった。彼は，『ドニ・ディドロの生涯と著作にかんする歴史的・哲学的覚書』（1821年）のなかで，次のように書いている[1)]。

> 機知のある12人の人物の――しかもこのなかには非常な教養人の混った――定例になった，自由な会話ほど，モンテーニュの一章あるいはディドロのある種の著作に似たものはない。もっともたわいない問題が，次第次第に，しかも一同がなにも気づかぬうちに，彼らをもっとも重大な主題ともっとも抽象的な疑問の論議，もっとも変った考え方，もっとも奇妙な逆説，もっとも不合理な仮定にまで導いて行く。彼らが，順次語ることは，道理にかなっていたり，突飛だったり，正しかったり，誤っていたり，本気だったり，陽気だったり，軽薄だと思うと深刻だったり，有用だと思うと有害だったり，慎ましいと思うと図々しかったりしながらも，常にどこかの一隅で，なにかひそかな関係でつながりあっている。

ネジョンは続いて，モンテーニユの『エセー』における表現の外面的な断絶・飛躍とそれらをつなぐ内面的な連関について語り，さらにそのあと，モンテーニュ自身が，「彼の方法の秘密」を明らかにし，「彼の書物の読み方，聞き方」を教えている箇所として，『エセー』，第３巻，第９章「空虚について」から，

1) J.-A. NAIGEON, *Mémoires historiques et philosophiques sur la vie et les ouvrages de Denis Diderot*, Paris, Brière, 1821, pp. 373—374.

次の一節を引用している[1]。

> 私はさ迷っている。だが不注意からではなくて，好きでさ迷うのである。私の思想は互いに続いている。しかし時にはずっと遠くから続いている。互いに見つめあってはいるが藪にらみで見つめ合っている。

ネジョンが，このモンテーニュのことばに言及したのは，それが同時に，ディドロ自身の文体の秘密を明らかにしているからであった。事実ディドロは『セネカ論』初版冒頭のネジョンへの献辞のなかで，こう語っている[2]。「私は会話をする。いたる所で，質問したり，答えたりする。もし読者が私のことばしか聞かなければ，特にセネカの著作を検討している箇所では，私が支離滅裂だとか，恐らく曖昧だとかさえいって非難するだろう。そして，ラ・ロシュフコーの一節，モンテーニュやラ・ブリュイエールの一章を読むように，私の本を読むことだろう。」(ただし，彼はこのあとで，読者が，セネカと自分とを比較しながら読んでくれさえすれば，この作品のうちに「より多くの脈絡と明晰さ」とを発見するはずだと，弁解している。) また彼はこの献辞の別の箇所では，次のようにのべている[3]。「私の作品は，私の散歩に似ている。景色のいい所にであうと，立ち止ってそれを楽しむ。風景の見事さ，みすぼらしさに従って，歩みを速めたり，ゆるめたりする。いつも夢想のままに導かれる私は，倦怠の瞬間が来ないように気をつけているだけだ」。

献辞からの最初の引用文によって明らかなように，ディドロは，自分の叙述の仕方とモンテーニュのそれとの間の類似を自覚している。外部の現実と内部の思想・感情がもつ，さまざまな局面をいささかも切り捨てることなく検討していくには，このような精神の歩みこそが，ディドロにとって，もっともふさわしいものであった。彼はまた，このおなじ歩みをセネカのうちにも発見し，「セネカの文体は断片的だが，思考は一貫している」と指摘している[4]。

---

1) 原氏訳『モンテーニュ II』，筑摩書房「世界古典文学全集」pp. 296—297.
2) S, p. (5); CN, t. I, p. 3; HN, t. I, p. 6; AT, p. 10.
3) S, pp. (6)—(7); CN, t. I, p. 5; HN, t. I, p. 7; AT, p. 11.
4) S, 404; CN, t. II, p. 172; HN, t. II, p. 115; AT, p. 303.
ジェローム・シュヴァルツは，ディドロとモンテーニュの親近性を指摘したひととして次のような名前をあげている。——Naigeon, Sainte-Beuve, Loyalty Cru, Karl von Roretz, Pierre Hermand, Hubert Gillot, Jean Thomas, Jean Pommier, Lester Crocker, Otis Fellows, Pierre Mesnard, Paul Vernière, René Etiemble, Henri Benac, Robert Loy, Georges May, Robert Niklaus, Herbert Dieckmann. Jerome SCHWARTZ, ***Diderot and Montaigne***, Genève, Droz,

しかし，ディドロとモンテーニュの親近性は，文体あるいは叙述の仕方の次元だけに限定されるものではない。古典を素材とし，それに触発されながら，自分の経験と良心の自己検討に照らして，この素材に絶えず反省を加え，その反省の歩み自体を読者に提示するというディドロの方法――これこそまさに『エセー』の著者の方法そのものだった[1)]。

しかも，この2人の方法を支えているのは，ディドロとモンテーニュが共有していた確信であった。それは，自分自身の意識は，同時にすべての人間――善人も悪人も含めたすべての人間――の普遍的状況とつながっており，したがって，自分の心をのぞきこむことによって，同時にそこにすべての人間の心を

1966, pp. 17—24 ; p. 54. このシュヴァルツの研究は，モンテーニュがディドロに及ぼした影響，両者の親近性の問題を，シャフツベリの自由訳から『セネカ論』にいたるまでの諸作品について，はじめて実証的に解明したものである。

ただ，『セネカ論』とモンテーニュの関係にかんしては，シュヴァルツの分析はかなり表層的であると思う。私は，『セネカ論』のディドロと『エセー』のモンテーニュとの親近性の核心が「人間は誰でも自分の中に人間の性状の完全な形をそなえている」という両者に共通の確信であると考えるのであるが，シュヴァルツにはその点の分析がない。

なお，ディドロをモンテーニュにはじまるユマニスムの潮流のなかに位置づけた研究者として，ジャン・トマがいる。たとえば，彼の次のことばは，今日にいたるまでディドロの作品が提出した問題にもっとも忠実なディドロ解釈であると思う。「決定論のまっただなかにあって，ディドロは人間性の尊厳を再建し，自分は人間だから，人間個有の理由しかうけいれないと宣言した。われわれひとりひとりが，自分の気質に従って，自己の幸福と義務と真理の判定者になるのだということを彼は証明した。こうして彼は，ユマニスムの立場を全面的に維持し続けた。しかも科学と，伝統と人生の経験とが彼に選びとることを命令した原則をどれひとつとして拒否することなく。」Jean THOMAS, ***L'humanisme de Diderot***, Paris, Les Belles Lettres, 1938, p. 157.

1) 古典を素材にした，さまざまな反省という点にかんして，ディドロは次のようにいう。「わが国のもっとも有名な作家の幾人かが，プルタルコス，セネカ，マキャヴェルリから，断わりもなしにとってきている部分を，もと通り彼らに返してしまえば，これらの有名な作家からどれほど沢山の偉大で美しい断想や，独創的で，時には風変りな考えなどを奪いとってしまうことになるだろう。私にはモンテーニュの卒直さが好ましい。彼はこういっている。『私の書物〔『エセー』〕は，彼ら〔セネカとプルタルコス〕の抜殻でできあがっている。』〔『エセー』第2巻，第32章「セネカとプルタルコス弁護」の冒頭〕借用することは容認してもよい。だが，盗んできたり，いわんや自分が盗んできた当の本人の悪口をいったりすることは許せない。」S, pp. 268—272 ; CN, t. I, pp. 280—281 ; HN, t. I, p. 183 ; AT, pp. 196—198.

なお編者ネジョンは，古典から「断わりもなしにとってきている」「わが国のもっとも有名な作家」という箇所に長文の注をつけ，次のようにのべている。「私はただひとりの名前しかここではあげない。それはG.〔ジュネーヴ〕のR.〔ルソー〕氏である。彼の書物のなかでもっとも称賛されている哲学思想，道徳・政治原則の大部分が，セネカ，プルタルコス，モンテーニュ，ロック，シドニからの借用であることは，容易に証明できるだろう。」このあとネジョンはさらに，熱狂的なルソー崇拝者が現在大勢いるが，ルソーが剽窃した原著が世人に知られてくるようになれば，皆のルソーにたいする熱狂もやがておさまり，最後にはルソーの思想と称するものは無視されて，ただその文体，「魅惑的な形式」だけしか称賛されないようになるに違いないと力説している。

ネジョンが指摘しているように，ディドロはここで明らかにルソーを諷刺している。だが，ディドロにはこのネジョンの注には必ずしも賛成でなく，第2版においては，「初版の編者〔ネジョン〕にたいしては失礼であるが，私はジュネーヴの市民〔ルソー〕の作品を非常に高く評価している」と書いて，ネジョンを反駁している。CN, t. I, p. 132 ; HN, t. I, pp. 88—89 ; AT, p. 95. この問題は第三部で検訂する。

読みとることができる，という確信であった。

ディドロは，『セネカ論』初版前半の最後の部分で，「自己自身の心情の検討」，「絶えざる自己との対話」が，「学者」，「哲学者」，「文学者」にふさわしいと語ったあと，次のようにいう[1]。

> もし，私が考えるように，悪人に無縁な徳がなく，善人に無縁な悪徳がないとすれば，自己自身の心を研究したひとは，他人の認識を非常に深めたことになるだろう。

このことばは，モンテーニュの『エセー』におけるあの有名なことば（第3巻，第2章「後悔について」）にそのままつながる[2]。

> 私は卑しい輝きのない生活をお目にかける。だがそれはどうでもよいことだ。あらゆる哲学は平凡な私人の生活にも，それよりもっと豊富な生活にも，同じようにあてはまる。人間は誰でも自分の中に人間の性状の完全な形をそなえている。

ディドロは，セネカの生涯と著作とを，モンテーニュのような語り口で紹介していく。だが，彼の叙述がたんなる事実の紹介の次元を越えて，セネカの行為と考えにかんして，善悪の判断をくださねばならない箇所に遭遇すると，彼の意識はたちまち，彼の魂の一番奥底を――あらゆる「人間の性状の完全な形」が映されている魂の一番奥底を――のぞきこむ。

私は，ディドロにおけるセネカ――および迫害された善人――との同一化の意識について幾度か触れ，ディドロはセネカのなかに自分自身を投げこんだと語ってきた。だが，今や私はむしろこういうべきであろう。セネカ――および迫害された善人――の苦しみと，彼らの一切の人生経験は，すべてそのままディドロの意識の奥底に映しだされているのだ，と。彼はただそこを，じっとのぞきこみさえすればよい。ディドロの善悪の判断，弱者への連帯，個人の自由を抑圧する権力者への怒り，こうしたものすべてが生まれてくるのは，まさにこの魂の奥底からなのであるから。

そして，『セネカ論』初版が，そこに表現された道徳・政治論，世界観の「断片的」性格にもかかわらず，なおかつ「一貫」した全体性，「一貫」した構造を読者の前に提示しているのは，ディドロがあらゆる問題を前にして，常

1) S, pp. 259—260 ; CN, t. I, p. 277 ; HN, t. I, p. 181 ; AT, p. 193.
2) 原氏訳『モンテーニュ II』，筑摩書房「世界文学全集」p. 148.

にたち戻ってのぞきこむ魂のこの連続性のゆえにである。この作品は，このように，ディドロの晩年の意識の深層の構造の表現として，今日ディドロの全著作のなかで，正当な位置づけを要求している。だが『セネカ論』初版の重要性はそれだけにとどまってはいない。それはまた，自己省察を通しての人間一般の検討，自己の経験に照らしての古典の評釈というこの作品独特の方法によって，モンテーニュの系譜に直接結びつき，まさにそのゆえに，18世紀フランス文学史のなかにおいても，今日正当な位置づけを要求している，ということができるだろう。